Cisco UCS Director アドミニストレーション ガイド、リリース 5.3

初版：2015 年 04 月 17 日

シスコシステムズ合同会社
〒107-6227 東京都港区赤坂9-7-1 ミッドタウン・タワー
http://www.cisco.com/jp
お問い合わせ先：シスコ コンタクトセンター
0120-092-255 （フリーコール、携帯・PHS含む）
電話受付時間：平日 10:00～12:00、13:00～17:00
http://www.cisco.com/jp/go/contactcenter/

【注意】シスコ製品をご使用になる前に、安全上の注意（**www.cisco.com/jp/go/safety_warning/**）をご確認ください。本書は、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。また、契約等の記述については、弊社販売パートナー、または、弊社担当者にご確認ください。

このマニュアルに記載されている仕様および製品に関する情報は、予告なしに変更されることがあります。 このマニュアルに記載されている表現、情報、および推奨事項は、すべて正確であると考えていますが、明示的であれ黙示的であれ、一切の保証の責任を負わないものとします。 このマニュアルに記載されている製品の使用は、すべてユーザ側の責任になります。

対象製品のソフトウェア ライセンスおよび限定保証は、製品に添付された『Information Packet』に記載されています。 添付されていない場合には、代理店にご連絡ください。

The Cisco implementation of TCP header compression is an adaptation of a program developed by the University of California, Berkeley (UCB) as part of UCB's public domain version of the UNIX operating system. All rights reserved. Copyright © 1981, Regents of the University of California.

ここに記載されている他のいかなる保証にもよらず、各社のすべてのマニュアルおよびソフトウェアは、障害も含めて「現状のまま」として提供されます。 シスコおよびこれら各社は、商品性の保証、特定目的への準拠の保証、および権利を侵害しないことに関する保証、あるいは取引過程、使用、取引慣行によって発生する保証をはじめとする、明示されたまたは黙示された一切の保証の責任を負わないものとします。

いかなる場合においても、シスコおよびその供給者は、このマニュアルの使用または使用できないことによって発生する利益の損失やデータの損傷をはじめとする、間接的、派生的、偶発的、あるいは特殊な損害について、あらゆる可能性がシスコまたはその供給者に知らされていても、それらに対する責任を一切負わないものとします。

このマニュアルで使用している IP アドレスおよび電話番号は、実際のアドレスおよび電話番号を示すものではありません。 マニュアル内の例、コマンド出力、ネットワーク トポロジ図、およびその他の図は、説明のみを目的として使用されています。 説明の中に実際のアドレスおよび電話番号が使用されていたとしても、それは意図的なものではなく、偶然の一致によるものです。

Cisco and the Cisco logo are trademarks or registered trademarks of Cisco and/or its affiliates in the U.S. and other countries. To view a list of Cisco trademarks, go to this URL: http://www.cisco.com/go/trademarks. Third-party trademarks mentioned are the property of their respective owners. The use of the word partner does not imply a partnership relationship between Cisco and any other company. (1110R)

© 2014-2015 Cisco Systems, Inc. All rights reserved.

目 次

はじめに xv

対象読者 xv

表記法 xv

マニュアルに関するフィードバック xvii

マニュアルの入手方法およびテクニカル サポート xvii

このリリースの新規情報および変更情報 1

このリリースの新規情報および変更情報 1

概要 3

Cisco UCS Director について 3

機能と利点 4

物理的および仮想的な管理機能 6

モデルベースのオーケストレーション 7

Cisco UCS Director のウィザード 8

ワークフローからのウィザードの作成 9

共通のユーザ インターフェイス オプション 10

最初のログイン 11

システム設定の推奨順序 12

ユーザとグループの管理 15

ユーザ ロールの管理 15

ユーザ ロールの追加 16

ユーザの追加 17

ユーザ タイプの管理 19

デフォルトのユーザ権限 19

すべてのポリシー管理者 20

請求管理者 22

コンピューティング管理者 24

グループ管理者 27
IS 管理者 29
ネットワーク管理者 31
オペレータ 33
サービス エンド ユーザ 35
ストレージ管理者 38
ユーザの役割および権限 40
MSP 管理者ロール 45
グループの管理 46
ユーザ グループの作成 46
MSP 組織の作成 48
顧客組織の作成 49
パスワード ポリシー 51
パスワード ポリシーの作成 51
グループ予算ポリシー 52
グループ予算ポリシーの表示および編集 52
リソース制限値 53
リソース制限の表示 54
リソース制限の編集 54
管理プロファイルの設定 57
管理者プロファイルの作成 57
管理者パスワードの変更 58
現在のオンライン ユーザの表示 58
ユーザ アクセス プロファイルの管理 59
マルチロール アクセス プロファイル 59
ユーザ アクセス プロファイルの作成 59
ユーザ アクセス プロファイルの編集 61
ユーザ アクセス プロファイルの削除 61
プロファイルへのログイン 61
プロファイルの削除 62
デフォルト プロファイルの変更 62
認証および LDAP 統合 62

認証の環境設定 63
LDAP 統合 64
LDAP 統合の規則と制限事項 64
LDAP 統合の管理 65
LDAP サーバの設定 66
LDAP サーバのサマリー情報の表示 70
LDAP サーバの接続のテスト 70
LDAP 検索ベースDN エントリの追加 71
LDAP 同期システム タスクの実行 71
LDAP サーバの詳細の変更 71
LDAP サーバ情報の削除 73
シングル サインオン 74
シングル サインオンの有効化 75
顧客組織のブランディングについて 75
ユーザ グループのブランディング 76
顧客組織のブランディング 78
ログイン ページのブランディング 79
カスタム ドメイン ロゴの設定 80
システム管理設定の管理 81
送信メール サーバの設定 82
電子メール テンプレートの使用 82
電子メール テンプレートの追加 83
電子メール テンプレートのプレビュー 84
デフォルトの電子メール テンプレートの設定 85
システム パラメータの設定（任意） 85
システム パラメータの設定 85
インフラストラクチャ システム パラメータの設定（任意） 87
ライセンスの更新 87
ライセンス使用率の確認 88
ライセンス使用率履歴の表示 88
リソース使用率データの表示 89
アプリケーション カテゴリの編集 89

ポータルのカスタマイズ 90
ログイン ページと背景イメージのカスタマイズ 90
アプリケーション ロゴのカスタマイズ 92
ファビコンのカスタマイズ 93
アプリケーション ヘッダーのカスタマイズ 93
日付表示のカスタマイズ 95
カラー テーマのカスタマイズ 95
ログアウト時のリダイレクト先のカスタマイズ 96
レポートのカスタマイズ 96
詳細な制御の有効化 97
サービス プロバイダー機能の有効化 98
ユーザ メニュー 99
ユーザ メニューの設定 99
ユーザ権限の設定 100
システムのタスク 100
ノード プールの作成 101
システム タスク ポリシーの作成 101
システム タスク ポリシーへのノード プールの割り当て 102
サービス ノードの作成 103
システム タスクへのシステム ポリシーの割り当て 104
システム タスクの実行 105
システム タスクの有効化または無効化 105
アイコンの管理 105
アイコンの追加 106
アイコンの編集 107
アイコンの削除 107
アイコンのプレビュー 108
タグ ライブラリ 108
タグの作成 108
タグの編集 110
タグの複製 112
タグの削除 113

サポート情報 114
サポート情報の表示 114
システム情報の表示 114
ログの表示 114
ログのダウンロード 114
デバッグ ログの開始 115
統合設定の管理 117
構成管理データベースの統合 117
CMBD 統合の設定 117
計測データのエクスポート 118
計測データのエクスポートの設定 119
変更レコード 119
変更レコードの表示 119
システムログ 119
システム ログの設定 119
ストレージおよび OVF のアップロード 120
複数言語のサポート 121
物理インフラストラクチャの管理 123
物理インフラ ストラクチャの管理について 123
サイトの追加 123
Pod の追加 124
物理的なアカウントの追加 126
マルチドメイン マネージャ アカウントの追加 129
ネットワーク要素の追加 130
DHCP ロギングのイネーブル化 131
接続のテスト 132
管理対象ネットワーク機器の接続テスト 132
物理アカウントへの接続のテスト 132
デバイス検出の有効化 133
仮想インフラストラクチャの管理 135
VMware の管理について 135
クラウドの作成 135

Cisco PowerShell エージェント インストーラのダウンロード 137
PowerShell エージェントの作成 138
クラウドの検出および接続の確認 138
接続のテスト 138
vCenter プラグインの表示 139
ポリシーの管理 141
ポリシー 141
コンピューティング ポリシー 142
コンピューティング ポリシーの作成 142
データ コレクション ポリシー 145
仮想アカウントのデータ コレクション ポリシーの設定 146
仮想アカウントのデータ コレクション ポリシーの関連付け 147
グループの共有ポリシーについて 147
グループ共有ポリシーの作成 147
ストレージ ポリシー 148
複数ディスク VM のストレージ ポリシー 149
ストレージ ポリシーの追加と設定 149
仮想ストレージ カタログ 153
仮想ストレージ カタログの設定 153
ネットワーク ポリシー 155
スタティック IP プール ポリシーの追加 155
ネットワーク ポリシーの追加 156
ネットワーキング プロビジョニング ポリシー 158
ネットワーク プロビジョニング ポリシーの設定 158
VLAN プール ポリシー 160
VLAN プール ポリシーの設定 161
システム ポリシー 161
システム ポリシーの設定 161
OS ライセンス 165
OS ライセンスの追加 165
エンド ユーザ セルフサービス ポリシーについて 165
エンド ユーザ ポリシーの作成 166

仮想データセンターの管理 169
仮想データセンターの管理について 169
VDC アクション 170
仮想データセンターの追加 170
仮想データセンターの表示 173
仮想データセンターの編集 174
仮想データセンターの削除 177
仮想データセンターの複製 178
仮想データセンターのアプリケーション カテゴリの管理 181
仮想データセンター サービス プロファイル 182
仮想データセンター サービス プロファイルの追加 182
カタログの管理 187
カタログ管理について 187
カタログの公開 188
詳細カタログの公開について 194
詳細カタログの公開 195
カタログの表示 197
カタログの編集 197
フォルダ内のカタログの並べ替え 203
カタログの複製 204
カタログの削除 204
展開するホストへのアクセス 205
カタログ フォルダの並べ替え 206
セルフサービス プロビジョニングの使用方法 207
セルフ サービス プロビジョニングについて 207
サービス リクエストについて 207
[標準] カタログ タイプを使用したサービス リクエストの作成 208
カタログ タイプを使用したサービス リクエストの作成 - 詳細 213
サービス リクエスト ワークフローと詳細 213
サービス リクエスト ワークフロー 214
サービス リクエスト詳細 214
サービス リクエストのワークフロー ステータスの表示 216

サービス リクエストのログ詳細の表示 217
サービス リクエストのスケジュール設定について 217
サービス リクエストのスケジュール設定 217
サービス リクエストの再送信について 218
サービス リクエストの再送信 218
その他のサービス リクエスト機能 218
サービス リクエストのキャンセル 218
サービス リクエストのロールバック 219
特定グループのサービス リクエストの表示 219
グループのサービス リクエスト履歴の検索 220
グループのサービス リクエスト履歴のエクスポート 220
アーカイブ済みのサービス リクエストの回復 220
サービス リクエストの承認プロセス 221
サービス リクエストの承認 221
サービス リクエストの拒否 222
サービス リクエスト承認の履歴の表示 222
サービス リクエストの承認履歴の検索 222
サービス リクエスト承認の履歴のエクスポート 223
サービス リクエストの予算作成 223
今月の利用可能な予算の表示 223
予算エントリの表示 223
予算エントリの追加 224
予算エントリの編集 224
予算エントリの削除 225
複数ディスクの VM プロビジョニング 227
複数ディスクの VM プロビジョニングについて 227
複数ディスクの VM プロビジョニングのワークフロー 228
複数ディスクを含むテンプレートについて 228
ディスク カテゴリの割り当て 228
ストレージ ポリシーの定義 229
ストレージ ポリシーの作成 229
カタログの作成 233

カタログの追加 233
VM ディスクの作成 239
チャージバック モジュールの使用方法 241
チャージバック機能について 241
予算ポリシー 242
予算ポリシーの設定 242
コスト モデル 243
コスト モデルの作成 243
VDC を編集してコスト モデルを含める 248
VDC へのコスト モデルの追加 248
VDC を編集してコスト モデルに含める 251
パッケージ ベースのコスト モデル 251
パッケージ ベースのコスト モデルの作成 252
ストレージ階層コスト モデル 253
階層へのコストの割り当て 254
階層へのデータストアの割り当てについて 254
階層へデータストアの割り当て 255
チャージバック レポート 255
今月のサマリーの表示 256
前月のサマリーの表示 256
月間リソース アカウンティング情報の表示 257
VM レベルのリソース アカウンティングの詳細の表示 257
VM レベルのチャージバックの詳細の表示 258
月間リソース アカウンティングの詳細のエクスポート 258
VM レベルのリソース アカウンティングの詳細のエクスポート 258
VM レベルのチャージバックの詳細のエクスポート 259
変更レコードについて 259
変更レコードへのアクセス 260
チャージバックの計算 260
システムのモニタリングとレポート作成 263
ダッシュボード 263
ダッシュボードの有効化 264

レポート ウィジェットの追加 264

ウィジェット データの更新 264

サマリー 265

仮想マシン、クラウド、およびシステムのサマリー情報 265

サマリー レポート ウィジェットのカスタマイズ 265

インベントリ管理 266

システム インベントリの詳細情報へのアクセス 266

リソース プール 266

リソースの詳細情報へのアクセス 266

クラスタ 267

クラスタへのアクセス 267

イメージ 267

イメージへのアクセス 267

ユーザまたはグループへの VM イメージの割り当て 268

ホスト ノード 269

ホスト ノードへのアクセス 269

仮想マシン（VM） 269

VM へのアクセス 269

グループ レベル VM へのアクセス 270

トポロジ 270

トポロジ タイプへのアクセス 270

アセスメント 271

評価へのアクセス 271

レポート 271

レポートへのアクセス 272

ライフサイクルの管理 273

VM の電源設定の管理 273

VM のサイズ変更 274

VM スナップショットの管理 275

VM スナップショットの作成 276

スナップショットへの復帰 277

ゴールデン スナップショットのマーキング 277

スナップショットの削除 278
すべてのスナップショットの削除 278
仮想マシンのリース時間の設定 279
VM アクションの管理 279
VM の詳細の表示 280
スタック ビューの使用方法 281
VM の削除 281
VM ディスクの作成 282
VM ディスクの削除 283
vNIC の追加 284
vNIC の置換 285
vNIC の削除 286
VM クライアントの起動 287
VM の VNC コンソールの有効化 288
VM の VNC コンソール ウィンドウへのアクセス 288
VM の割り当て 289
VM クレデンシャル 291
VM クレデンシャルの表示 291
VM のインベントリ収集のリクエストの使用方法 292
VNC 接続のテスト 292
VM の複製 293
VM の VDC への移動 298
VM の再同期 298
CloudSense 分析の管理 301
CloudSense Analytics について 301
レポートの生成 302
アセスメントの生成 303
付録 305
ESX サーバでの VNC コンソールの設定 305

はじめに

ここでは、次の項について説明します。

- 対象読者，xv ページ
- 表記法，xv ページ
- マニュアルに関するフィードバック，xvii ページ
- マニュアルの入手方法およびテクニカル サポート，xvii ページ

対象読者

このマニュアルは、Cisco UCS Director または を使用し、以下の少なくとも 1 つの分野において責任と専門知識を持つデータセンター管理者を主に対象としています。

- サーバ管理
- ストレージ管理
- ネットワーク管理
- ネットワーク セキュリティ
- 仮想化および仮想マシン

表記法

テキストのタイプ	用途
GUI 要素	タブの見出し、領域名、フィールドのラベルのようなGUI要素は、[GUI 要素] のように示しています。 ウィンドウ、ダイアログボックス、ウィザードのタイトルのようなメイン タイトルは、[メイン タイトル] のように示しています。

テキストのタイプ	用途
マニュアルのタイトル	マニュアルのタイトルは、イタリック体（*italic*）で示しています。
TUI 要素	テキストベースのユーザ インターフェイスでは、システムによって表示されるテキストは、`courier` フォントで示しています。
システム出力	システムが表示するターミナル セッションおよび情報は、`courier` フォントで示しています。
CLI コマンド	CLI コマンドのキーワードは、ボールド体（**bold**）で示しています。 CLI コマンド内の変数は、イタリック体（*italic*）で示しています。
[ ]	角カッコの中の要素は、省略可能です。
{x | y | z}	どれか1つを選択しなければならない必須キーワードは、波カッコで囲み、縦棒で区切って示しています。
[x | y | z]	どれか1つを選択できる省略可能なキーワードは、角カッコで囲み、縦棒で区切って示しています。
string	引用符を付けない一組の文字。 string の前後には引用符を使用しません。引用符を使用すると、その引用符も含めて string とみなされます。
< >	パスワードのように出力されない文字は、山カッコで囲んで示しています。
[ ]	システム プロンプトに対するデフォルトの応答は、角カッコで囲んで示しています。
!、#	コードの先頭に感嘆符（!）またはポンド記号（#）がある場合には、コメント行であることを示します。

（注） 「注釈」です。 役立つ情報や、このマニュアル以外の参照資料などを紹介しています。

ヒント 「問題解決に役立つ情報」です。 ヒントには、トラブルシューティングや操作方法ではなく、ワンポイントアドバイスと同様に知っておくと役立つ情報が記述される場合もあります。

注意 「要注意」の意味です。 機器の損傷またはデータ損失を予防するための注意事項が記述されています。

ワンポイント アドバイス 「時間の節約に役立つ操作」です。 ここに紹介している方法で作業を行うと、時間を短縮できます。

警告 安全上の重要事項

「危険」の意味です。 人身事故を予防するための注意事項が記述されています。 機器の取り扱い作業を行うときは、電気回路の危険性に注意し、一般的な事故防止対策に留意してください。 警告の各国語版については、各警告文の末尾に提示されている番号をもとに、この機器に付属している各国語で記述された安全上の警告を参照してください。

これらの注意事項を保存しておいてください。

マニュアルに関するフィードバック

このマニュアルに関する技術的なフィードバック、または誤りや記載もれなどお気づきの点がございましたら、HTML ドキュメント内のフィードバック フォームよりご連絡ください。 ご協力をよろしくお願いいたします。

マニュアルの入手方法およびテクニカル サポート

マニュアルの入手方法、テクニカル サポート、その他の有用な情報について、毎月更新される『What's New in Cisco Product Documentation』を参照してください。シスコの新規および改訂版の技術マニュアルの一覧も示されています。

『*What's New in Cisco Product Documentation*』は RSS フィードとして購読できます。また、リーダー アプリケーションを使用してコンテンツがデスクトップに直接配信されるように設定することもできます。 RSS フィードは無料のサービスです。シスコは現在、RSS バージョン 2.0 をサポートしています。

第 1 章

このリリースの新規情報および変更情報

この章の内容は、次のとおりです。

- このリリースの新規情報および変更情報, 1 ページ

このリリースの新規情報および変更情報

次の表に、最新リリースに関するこのガイドでの重要な変更点の概要を示します。 この表は、このマニュアルに加えられた変更やこのリリースの新しい機能をすべて網羅するものではありません。

表 *1*：*Cisco UCS Director* リリース *5.3* の新機能と動作変更

機能	説明	参照先
組織へのリソース制限値の編集	MSP 組織へのリソース制限値を編集できます。 ただし、MSP 組織とその中の顧客組織への制限値の設定時に従うべき特定のガイドラインがあります。	リソース制限値, （53 ページ）、リソース制限の編集, （54 ページ）
MSP 組織へのブランディングサポート	MSP 組織と顧客組織へのブランディング タスクを実行できます。	顧客組織のブランディング, （78 ページ）
ストレージ ポリシーを設定するための新しいフィールド	VMware ストレージ ポリシーの作成時に、ストレージ プロファイルおよびデータ ストアの情報を入力する必要があります。	ストレージポリシーの追加と設定, （149 ページ）

機能	説明	参照先
カタログ作成時のイメージのフィルタリング	カタログの作成時に、ユーザが属しているグループに割り当てられているイメージが [イメージ（Image）] フィールドに表示されます。	カタログの公開, （188 ページ）
グループにVMイメージを割り当てる機能	ユーザまたはグループに VMware クラウドの特定のイメージを割り当てることができます。 これにより、VM のプロビジョニング時に使用できるイメージがフィルタリングされます。	ユーザまたはグループへの VM イメージの割り当て, （268 ページ）
コストモデルがアプリケーション コンテナにマップできるようになりました。	コスト モデルをコンテナにマップできるようになりました。	コスト モデル, （243 ページ）
特定の VDC のチャージバック レポート	グループ内の特定の VDC のチャージバック レポートを生成できるようになりました。 チャージバック レポートには、ベア メタル サーバの情報も含まれます。	チャージバック レポート, （255 ページ）
CloudSense レポートのフィルタ処理されたリスト	ユーザのシステムで利用可能なレポート数はユーザ ロールによって異なります。	CloudSense Analytics について, （301 ページ）

第 2 章

概要

この章は、次の内容で構成されています。

- Cisco UCS Director について，3 ページ
- 最初のログイン，11 ページ
- システム設定の推奨順序，12 ページ

Cisco UCS Director について

Cisco UCS Director は、シスコおよびシスコ以外の多岐にわたるデータ インフラストラクチャ コンポーネントと、Cisco UCS および Cisco Nexus プラットフォームに基づく業界をリードするコンバージドインフラストラクチャ ソリューションに対する、安全性に非常に優れたエンドツーエンドの管理、オーケストレーション、および自動化のためのソリューションです。 サポート対象のインフラストラクチャ コンポーネントとソリューションの完全なリストについては、『Cisco UCS Director Compatibility Matrix』を参照してください。

Cisco UCS Director は、次の標準テンプレートを使用する 64 ビットのアプライアンスです。

- Open Virtualization Format（OVF）for VMware vSphere
- Virtual Hard Disk（VHD）for Microsoft Hyper-V

Cisco UCS Director を介した管理

Cisco UCS Director は、Cisco UCS を通じてコンピューティング層およびネットワーク層の統合を拡張し、データセンターインフラストラクチャコンポーネントの包括的な可視性と管理をユーザに提供します。 サポート対象のシスコとシスコ以外のコンポーネントの設定、管理およびモニタのために Cisco UCS Director を使用できます。 実行できるタスクには次のものがあります。

- すべての Cisco UCS サーバおよびコンピューティング アプリケーションを対象にした、サービス プロファイルとテンプレートの作成、複製、および導入

- コンバージドインフラストラクチャにおける組織の使用状況、トレンドおよび容量の継続的なモニタリング。 たとえば、すべてのデータセンター間の仮想マシン（VM）の使用率を示すヒート マップを表示できます。
- 一貫したリピート可能な方法によるコンバージドインフラストラクチャへの容量の導入や追加
- Cisco UCS ドメインや Cisco Nexus ネットワーク デバイスなどの、データセンター コンポーネントの管理、監視、報告。
- 物理インフラストラクチャへのサービスを追加するための仮想サービス カタログの拡張。
- 非仮想化ワークロードで動作する仮想化ワークロードに対応するための安全なマルチテナント環境の管理。

Cisco UCS Director による自動化とオーケストレーション

Cisco UCS Director を使用することで、自動化サービスを提供するワークフローを構築し、そのワークフローを発行してオンデマンド方式でサービスをユーザに拡大することができます。 社内の他の専門家と協力して、単純または複雑なプロビジョニングと設定のプロセスを自動化するためのポリシーの作成と Cisco UCS Director ワークフローの構築を迅速かつ容易に行うことができます。

一度構築および検証された後は、これらのワークフローは誰が実行しても常に同じように実行できます。 経験豊富なデータセンター管理者がそれらを実行したり、または、ロールベースアクセスコントロールを実行してユーザや顧客が必要に応じてセルフサービスベースでワークフローを実行できるようにすることができます。

Cisco UCS Director を使用して、サポート対象のシスコおよびシスコ以外のさまざまなハードウェアおよびソフトウェアのデータセンター コンポーネント間で多岐にわたるタスクおよび使用例を自動化できます。 自動化できる使用例には以下のものがありますが、これらに限定されません。

- VM のプロビジョニングとライフサイクル管理
- ネットワーク リソースの設定とライフサイクル管理
- ストレージ リソースの設定とライフサイクル管理
- テナント オンボーディングとインフラストラクチャの設定
- アプリケーション インフラストラクチャのプロビジョニング
- セルフサービス カタログと VM プロビジョニング
- オペレーティング システムのインストールを含むベアメタル サーバのプロビジョニング

機能と利点

Cisco UCS Director の機能と利点を以下に示します。

機能	利点
中央管理	• 管理者に物理、仮想、ベアメタル環境全体のシステムをモニタリング、プロビジョニング、管理する単一インターフェイスを提供 • 統合型ダッシュボード、レポート、ヒート マップを提供し、トラブルシューティングとパフォーマンスのボトルネックを削減
セルフサービス カタログ	• エンドユーザが IT の規定したポリシーやガバナンスに沿って、新しいインフラストラクチャ インスタンスの発注および導入が可能
適応型のプロビジョニング	• リアルタイムで利用可能な機能、内部ポリシー、アプリケーション ワークロード要件を使用して、リソースの可用性を最適化
動的な容量管理	• 継続的なモニタリングにより、リアルタイムでインフラストラクチャ使用率を示し、キャパシティ プランニングと管理を改善 • 使用率の低いリソースや使用率の高いリソースを特定
複数のハイパーバイザのサポート	• VMware ESX、ESXi、Microsoft Hyper-V、Red Hat の各ハイパーバイザをサポート
コンピューティングの管理	• 物理、仮想、ベアメタルの各サーバおよびブレードをモニタリング、管理、プロビジョニング • エンド ユーザがスナップショットを介して仮想マシンのライフサイクル管理とビジネス継続性を実現可能 • 管理者にサーバ使用率のトレンド分析を提供
ネットワーク管理	• 物理スイッチ、仮想スイッチ、動的ネットワーク トポロジをポリシーベースでプロビジョニング • 管理者が VLAN、仮想ネットワーク インターフェイス カード（vNIC）、ポート グループ、ポート プロファイル、IP および動的ホスト制御プロトコル（DHCP）割り当て、アクセス コントロール リスト（ACL）を、複数のネットワーク デバイスにわたって設定可能

機能	利点
ストレージの管理	• ファイラ、仮想ファイラ（vFiler）、論理ユニット番号（LUN）、ボリュームをポリシーベースでプロビジョニングおよび管理可能 • 統合ダッシュボードにより、管理者が組織的な使用状況、トレンド、キャパシティ分析の詳細を包括的に可視性可能
Cisco CloudGenie	• Apple の iPad と iPhone、および Android デバイスによるモバイル管理を提供 • モバイル セルフサービス プロビジョニング、仮想マシン管理、および管理ダッシュボードの表示をサポート

物理的および仮想的な管理機能

物理サーバの管理	仮想コンピューティング管理
• 設定と変更の検出および収集 • 物理サーバのモニタリングと管理 • ポリシーベースでのサーバ プロビジョニングの実行 • ブレードの電力管理 • サーバ ライフサイクルの管理 • サーバの使用傾向と容量分析の実行 • Preboot eXecution Environment（PXE）ブート管理機能を使用したベアメタル プロビジョニングの実行	• 仮想コンピューティング環境の検出、収集、モニタリング • ポリシーベースでのプロビジョニングと動的リソース割り当ての実行 • ホストサーバの負荷と電力の管理 • VM ライフサイクルとスナップショットの管理 • VM の容量とスプロール、ホストの使用率を評価するための分析の実行

物理ストレージの管理	仮想ストレージの管理
• ストレージ ファイラの検出、収集、モニタリング • ポリシーベースでの vFiler プロビジョニングの実行 • ボリュームのプロビジョニングとマッピング • 論理ユニット番号（LUN）と iGroup インスタンスの作成とマッピング • SAN ゾーン管理の実行 • Network-Attached Storage（NAS）および SAN ベースのストレージのモニタリングと管理 • ストレージ実装のベスト プラクティスと推奨事項	• vFiler のストレージおよびストレージプールの検出、収集、モニタリング • シックおよびシン クライアントを対象としたポリシーベースでのストレージ プロビジョニングの実行 • 新しいデータ ストアの作成と仮想デバイス コンテキスト（VDC）へのマッピング • VM へのディスクの追加とサイズ調整 • 組織でのストレージ使用率のモニタリングと管理 • 仮想ストレージの傾向と容量分析の実行
物理ネットワークの管理	**仮想ネットワークの管理**
• 物理ネットワーク要素の検出、収集、モニタリング • 複数のスイッチ間のプロビジョニング VLAN • ネットワーク デバイスに対するアクセス コントロール リスト（ACL）の設定 • ストレージ ネットワークの設定 • 動的ネットワーク トポロジの実装	• VM へのネットワークの追加 • IP および DHCP 割り当てによるポリシーベースでのプロビジョニングの実行 • VLAN およびプライベート VLAN に対する仮想ネットワークインターフェイスカード（vNIC）の設定と接続 • VM のためのポート グループとポート プロファイルの作成 • 組織での仮想ネットワークの使用率のモニタリング

モデルベースのオーケストレーション

Cisco UCS Director には、1000 以上のタスクや、すぐに使用できるワークフローなどが含まれているタスク ライブラリが用意されています。モデルベースのオーケストレーションとワークフローデザイナを使用すると、インフラストラクチャの管理や運用タスクをカスタマイズしたり、自動化したりできます。 また、個々の必要性に対応して、システムの拡張とカスタマイズを進められます。

次の表は、タスク ライブラリの 1 日目から 3 日目のメンテナンスおよび更新アクティビティを示しています。

1 日目	2 日目	3 日目
• テナントの追加 • 申請者の移行または追加 • エンタープライズ システムとの統合 • セルフサービス ポータルの使用	• パフォーマンスのモニタリング • ミーティングおよび請求の開始 • テナントの変更の管理 • セルフサービス Infrastructure as a Service（IaaS）	• ハードウェアの追加とアップグレード • 用途変更

Cisco UCS Director のウィザード

Cisco UCS Director には、いくつかの機能の設定をサポートする一連のウィザードが組み込まれています。 使用可能なウィザードは、次のとおりです。

- デバイス検出：このウィザードでは、デバイスを検出し、そのデバイスをポッドに割り当てることができます。
- システム初期設定：このウィザードでは、ライセンスのアップロード、SMTP、NTP、および DNS サーバのセットアップなど、Cisco UCS Director をセットアップするための初期タスクを実行できます。
- vDC の作成：このウィザードでは、プライベート クラウドで VM をプロビジョニングするために必要なポリシーを設定できます。
- FlexPod の設定：このウィザードでは FlexPod のアカウントをセットアップできます。
- Vblock ポッド設定：このウィザードでは、アカウントを検出し、ポッドに割り当てることができます。
- VSPEX ポッド設定：このウィザードは、アカウントを検出し、ポッドに割り当てることができます。

最初に Cisco UCS Director にログインすると、[ウィザード エクスプローラ] ウィンドウが表示されます。 このウィンドウから、使用可能なウィザードの詳細を表示し、そのいずれかを選択して起動できます。 ログインするたびにこの [ウィザードエクスプローラ] を表示させないようにするには、[今後このページを表示しない] チェックボックスをオンにします。 これらのウィザードを後で起動するには、[管理] > [ガイド付きセットアップ] をクリックします。

システムが提供するこれらのウィザードに加え、以前に設定したワークフローからウィザードを作成することもできます。 詳細については、ワークフローからのウィザードの作成, （9 ページ）を参照してください。

ワークフローからのウィザードの作成

有効なワークフローをウィザードに変換して Cisco UCS Director に保存することができます。

はじめる前に

Cisco UCS Director で、有効なワークフローを作成しました。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ガイド付きセットアップ] を選択します。

ステップ 2 [ワークフローからの作成（Create from Workflow）] をクリックします。

ステップ 3 [ワークフローからのウィザードの作成（Create Wizard from Workflow）] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[ワークフローの選択（Select Workflow）] フィールド	[選択（Select）] をクリックして、ウィザードに変換するワークフローのチェック ボックスをオンにします。
[ラベル] フィールド	ウィザードの名前。 これは、ウィザードの基本名です。
[2つ目のラベル（Second Label）] フィールド	ウィザードの 2 次名。
[説明] フィールド	ウィザードの説明。
[アイコンイメージ（Icon Image）] フィールド	[選択（Select）] をクリックして、このワークフローに関連付けるアイコンのチェック ボックスをオンにします。

ステップ 4 [送信] をクリックします。

ステップ 5 [OK] をクリックします。

次の作業

次の作業を実行できます。

- ウィザードを起動する。

- ウィザードを編集する。
- ウィザードの詳細を表示する。
- インターフェイスでのウィザードの順序を変更する。
- ウィザードを削除する。

共通のユーザ インターフェイス オプション

次の表は、アプリケーションユーザインターフェイスのすべてのページで利用できるオプションについて説明します。 現在開いているページに関係なく、これらのオプションを使用して同じタスクを実行できます。

アイコン	ラベル	説明
	更新（Refresh）	ページ上の報告されたデータを更新します。
	お気に入り （Favorite）	[お気に入り （Favorite）] メニューにページを追加します。 このオプションを使用して、頻繁にアクセスするページを素早く表示できます。
	追加（Add）	[追加（Add）]ダイアログボックスが表示され、新しいリソースを追加できます。
	編集（Edit）	[編集（Edit）]ダイアログボックスが表示され、リソースを編集できます。
	テーブルのカスタマイズ（Customize Table）	[レポートテーブルのカスタマイズ（Customize Report Table）] ダイアログボックスが表示され、画面に追加したい列を選択できます。

アイコン	ラベル	説明
	エクスポート レポート	[レポートのエクスポート（Export Report）] ダイアログボックスが表示され、レポートの形式を選択して、システムにダウンロードできます。 次のいずれかの形式でレポートを生成できます。 • PDF • CSV • XLS
	拡張（Expand）	ページに表示されているフォルダを展開します。
	折りたたむ	ページに表示されているフォルダを折りたたみます。
	高度な検索フィルタを追加（Add Advanced Filter）	ページに追加のフィルタリング パラメータを追加します。
	検索フィールド（Search	キーワードを入力して特定のレコードを検索できます。

最初のログイン

ホスト名と IP アドレスのいずれかと次のクレデンシャルを使用して、Cisco UCS Director にログインします。

- ユーザ名：admin
- パスワード：admin

（注） 最初の管理アカウントを作成した後、起動時の管理アカウントを削除するか、少なくともデフォルトのパスワードを変更することをお勧めします。 セルフサービス ポータルにアクセスするには、有効な電子メール アドレスが必要です。

システム設定の推奨順序

次の表は、システム設定の推奨順序を示します。

項目	章	説明
初期設定	2、3、4、5	ライセンスの適用、管理者プロファイルの設定、グループの作成、およびユーザの作成の方法について説明します。 言語サポートへのアクセス、ポータル カスタマイズの適用、およびシステム設定の方法を習得します。
物理インフラストラクチャ	6	任意でのポッドと物理アカウントの追加、ネットワーク要素の追加、接続のテスト、およびアカウント検出の検証の方法について説明します。 （注） 必要に応じて、物理インストラクチャよりも前に仮想インフラストラクチャを作成できます。
仮想インフラストラクチャ	7	クラウドの作成、クラウド検出および接続の検証、接続のテスト、および vCenter プラグインの表示の方法について説明します。
ポリシー	8	コンピューティング ポリシー、ストレージ ポリシー、ネットワーク ポリシー、およびシステム ポリシーを作成して管理する方法について説明します。 Microsoft Windows カタログの OS ライセンスを追加する方法を習得します。
仮想データセンター	9	グループ、ポリシー、コスト モデルの特定の環境を管理するために VDC を設定する方法、さらに、 VDC レベルでのリソース制限の設定および管理の方法について説明します。
カタログ	10	カタログ項目の設定方法、カタログへのアクセス権限をグループに追加する方法、およびカタログ項目の公開方法について説明します。
Self-Service プロビジョニング	11	プロビジョニング サービス リクエストの作成および管理方法について説明します。
Multi-Disk プロビジョニング	12	1 つまたは複数のデータストアで VM ディスク プロビジョニングを設定する方法を説明します。 また、テンプレートで追加ディスクごとに個別のディスク ポリシーを設定する手順についても説明します。

項目	章	説明
チャージバック	13	チャージバック サマリー レポート、詳細レポート、およびリソース アカウンティング レポートを作成する方法について説明します。 コスト モデルが定義され、部門や組織内のポリシーに割り当てられる仕組みも示します。
クラウド管理	14	クラウドを完全に可視化し、リソース使用率をモニタし、クラウド スタック（クラウド、クラスタ、ホスト サーバ、および仮想マシン）を管理する方法について説明します。
ライフサイクル	15	プロビジョニング後のライフサイクル管理アクション（VMの電源管理、VMのサイズ変更、VMスナップショット管理などのVMアクション）を実行する方法を説明します。
CloudSense	16	Cisco UCS Director で生成可能な、基礎となる物理インフラストラクチャと仮想インフラストラクチャに関する分析レポートについて説明します。

第 3 章

ユーザとグループの管理

この章は、次の内容で構成されています。

- ユーザ ロールの管理，15 ページ
- ユーザ ロールの追加，16 ページ
- ユーザの追加，17 ページ
- ユーザ タイプの管理，19 ページ
- デフォルトのユーザ権限，19 ページ
- MSP 管理者ロール，45 ページ
- グループの管理，46 ページ
- 管理プロファイルの設定，57 ページ
- ユーザ アクセス プロファイルの管理，59 ページ
- 顧客組織のブランディングについて，75 ページ
- ユーザ グループのブランディング，76 ページ
- 顧客組織のブランディング，78 ページ
- ログイン ページのブランディング，79 ページ

ユーザ ロールの管理

Cisco UCS Director は次のユーザ ロールをサポートしています。

- すべてのポリシー管理者
- 請求管理者
- コンピューティング管理者

- グループ管理者：ユーザを追加する権限を持つエンド ユーザ。 このユーザはセルフサービス ポータルを使用できます。
- IS 管理者
- MSP 管理者
- ネットワーク管理者
- オペレータ
- サービス エンド ユーザ：このユーザはセルフサービス ポータルの表示および使用のみが可能です。
- ストレージ管理者
- システム管理者

これらのユーザ ロールはシステムで定義されており、デフォルトで使用できます。 あるロールがデフォルトで使用できるかどうかは、[ユーザ ロール] ページの [デフォルトのロール] 列に [はい] とマークされているかどうかで判別できます。

システムの管理者は、ユーザ ロールについて次のタスクを実行できます。

- システム内で新しいユーザ ロールを作成し、そのロールのユーザを作成します。

  新しいユーザ ロールを作成する場合は、ユーザ ロールを管理者にするかエンド ユーザにするかを指定できます。 ユーザ ロールの作成の詳細については、ユーザ ロールの追加, （16 ページ）を参照してください。 特定のロールに対するユーザの作成の詳細については、ユーザの追加, （17 ページ）を参照してください。
- デフォルトのロールを含む既存のユーザ ロールを変更し、そのロールに関連付けられたユーザのメニュー設定と読み取り/書き込み権限を変更します。

  ロールのメニュー設定と権限を変更する手順は、ユーザ ロールを追加する手順と同じです。

ユーザ ロールの追加

Cisco UCS Director に任意の数のユーザ ロールを作成し、そのロールのユーザのメニュー設定を定義できます。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [システム] の順に選択します。

ステップ 2 [ユーザロール] タブをクリックします。

ステップ 3 [追加]（+）をクリックします。

ステップ 4 [ユーザロールの追加] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[ユーザロール] フィールド	ユーザ ロールの名前。
[ロールタイプ] ドロップダウン リスト	追加するロールのタイプを選択します。 この属性の種類は次のとおりです。 • 総務 • エンド ユーザ
[説明] フィールド	追加するロールの説明。

ステップ 5 [次へ] をクリックします。

ステップ 6 [メニュー設定] ペインで、このロールを定義されたユーザに表示されるメニュー オプションを選択します。

ステップ 7 [次へ] をクリックします。

ステップ 8 [ユーザ権限] ペインでは、このロールに作成されるユーザのさまざまなタスクに対する読み取りまたは書き込み権限を選択します。

ステップ 9 [送信] をクリックします。

次の作業

このタイプのロールを持つユーザを作成します。

ユーザの追加

はじめる前に

グループにユーザを追加する前に、そのグループが作成されていることを確認してください。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザとグループ] の順に選択します。

ステップ 2 [ログインユーザ] タブをクリックします。

ステップ 3 [追加]（+）をクリックします。

ステップ 4 [ユーザの追加] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

フィールド名	説明
[ユーザロール] ドロップダウン リスト	ユーザのロール タイプを選択します。 （注） このドロップダウン リストには、Cisco UCS Director で使用可能なすべてのユーザ ロールが表示されます。デフォルトで使用可能なユーザ ロールに加えて、追加のユーザ ロールを作成できます。 ユーザ ロールの作成の詳細については、ユーザ ロールの追加, （16 ページ）を参照してください。
[グループ名（Group Name）] ドロップダウンリスト	ユーザがアクセスできるグループを選択します。 すでに使用可能なグループを選択するか、または新しいグループを追加できます。 （注） このフィールドは、ユーザ ロールとしてサービス エンドユーザまたはグループ管理者を選択している場合にのみ表示されます。
[MSP組織（MSP Organization）] ドロップダウンリスト	ユーザが管理する MSP 組織を選択します。 現在使用可能な組織を選択するか、または新しい組織を追加できます。 （注） このフィールドは、ユーザ ロールとして MSP 管理者を選択している場合にのみ表示されます。
[ログイン名] フィールド	ログイン名。
[パスワード] フィールド	パスワード。 （注） ユーザに対して Lightweight Directory Access Protocol（LDAP）認証が設定されている場合、パスワードはローカル サーバではなく、LDAP サーバでのみ検証されます。
[パスワードの確認] フィールド	確認のためにパスワードを再入力します。
[User Contact Email（ユーザの連絡先電子メール）] フィールド	電子メール アドレス。 （注） 電子メール アドレスは、サービス リクエストのステータスをグループ所有者に通知し、承認を要求するために必要です。

フィールド名	説明
[名] フィールド	名。
[姓] フィールド	姓。
[電話] フィールド	ユーザの電話番号です。
[住所] フィールド	ユーザの郵便住所です。

ステップ 5 [追加] をクリックします。

次の作業

ユーザをメイン ウィンドウから選択し、[プロファイルの管理] をクリックすると、任意でそのユーザに複数のロールを割り当てることができます。

ユーザ タイプの管理

システム管理者には、ユーザの追加、ユーザとユーザ権限の表示、さまざまなシステム コンポーネントに対する個別ユーザの読み取り/書き込み権限の変更など、Cisco UCS Director を管理するためのすべての権限が与えられています。

ほとんどのユーザは、ログイン時に管理ポータルを表示して使用します。

デフォルトのユーザ権限

各管理ユーザは、Cisco UCS Director にアクセスするための権限セットを持っています。 ユーザ権限のタイプは次のとおりです。

- 読み取り：読み取り権限を持つ管理ユーザは、ファイルの読み取りのみを行うことができます。
- 書き込み：書き込み権限を持つ管理ユーザは、ファイルの読み取り、書き込み、および変更を行うことができます。 この権限では、ファイルの変更、削除、または名前変更が許可されます。
- 読み取り/書き込み：読み取り/書き込み権限を持つ管理ユーザは、ファイルの読み取り、および書き込みを行うことができます。

すべてのポリシー管理者

次の表は、全ポリシー管理者が実行できるアクションのリストを示します。

一般業務	権限	
	読み取り	書き込み
仮想コンピューティング	はい	
VM ラベル		はい
vDC への VM 割り当て		はい
仮想ストレージ	はい	
仮想ネットワーク	はい	
物理コンピューティング	はい	はい
物理ストレージ	はい	はい
物理ネットワーク	はい	はい
グループのサービス リクエスト	はい	はい
承認者のサービス リクエスト	はい	はい
予算	はい	
リソース アカウンティング	はい	
チャージバック	はい	
システム管理者	はい	
ユーザとグループ	はい	
仮想アカウント	はい	
カタログ	はい	
vDC	はい	

一般業務	権限	
コンピューティング ポリシー	はい	はい
ストレージ ポリシー	はい	はい
導入ポリシー		はい
SLA ポリシー		はい
ネットワーク ポリシー	はい	はい
サービス提供	はい	はい
リソース制限レポート	はい	
グループ ユーザ	はい	
CloudSense レポート	はい	
CloudSense アセスメント レポート	はい	
オーケストレーション	はい	はい
検出	はい	
MSP		はい
自動化モジュールを開く		
CS 共有レポート		
CS 共有評価		
リモート VM アクセス		
モバイル アクセス設定		
エンド ユーザのチャージバック		
リソース アカウンティングの書き込み		
チャージバックの書き込み		はい

一般業務	権限	
UCSD クラスタ		
リソース グループ		
タグ ライブラリ		

請求管理者

次の表は、請求管理者が実行できるアクションのリストを示します。

オペレーション	権限	
	読み取り	書き込み
仮想コンピューティング		
VM ラベル		
vDC への VM 割り当て		
仮想ストレージ		
仮想ネットワーク		
物理コンピューティング		
物理ストレージ		
物理ネットワーク		
グループのサービス リクエスト	はい	
承認者のサービス リクエスト		
予算	はい	はい
リソース アカウンティング	はい	
チャージバック	はい	

オペレーション	権限	
システム管理者		
ユーザとグループ		
仮想アカウント		
カタログ		
vDC		
コンピューティング ポリシー		
ストレージ ポリシー		
導入ポリシー		
SLA ポリシー		
ネットワーク ポリシー		
サービス提供		
リソース制限レポート	はい	
グループ ユーザ		
CloudSense レポート	はい	はい
CloudSense アセスメント レポート	はい	はい
オーケストレーション		
検出	はい	
MSP	はい	はい
自動化モジュールを開く		
CS 共有レポート		
CS 共有評価		
リモート VM アクセス		

オペレーション	権限	
モバイル アクセス設定		
エンド ユーザのチャージバック		
リソース アカウンティングの書き込み		はい
チャージバックの書き込み		はい
UCSD クラスタ		
リソース グループ		
タグ ライブラリ		

コンピューティング管理者

次の表は、コンピューティング管理者が実行できるアクションのリストを示します。

オペレーション	権限	
	読み取り	書き込み
仮想コンピューティング	はい	
VM ラベル		はい
vDC への VM 割り当て		
仮想ストレージ	はい	
仮想ネットワーク	はい	
物理コンピューティング	はい	はい
物理ストレージ	はい	
物理ネットワーク	はい	

オペレーション	権限	
グループのサービスリクエスト	はい	
承認者のサービスリクエスト	はい	はい
予算	はい	
リソース アカウンティング	はい	
チャージバック	はい	
システム管理者	はい	
ユーザとグループ	はい	
仮想アカウント	はい	
カタログ	はい	
vDC	はい	
コンピューティングポリシー	はい	はい
ストレージ ポリシー	はい	
導入ポリシー	はい	
SLA ポリシー	はい	
ネットワーク ポリシー	はい	
サービス提供	はい	
リソース制限レポート	はい	
グループ ユーザ	はい	
CloudSense レポート	はい	

オペレーション	権限	
CloudSense アセスメント レポート	はい	
オーケストレーション	はい	はい
検出	はい	
MSP	はい	はい
自動化モジュールを開く		
CS 共有レポート		
CS 共有評価		
リモート VM アクセス		
モバイル アクセス設定		
エンド ユーザのチャージバック		
リソース アカウンティングの書き込み		
チャージバックの書き込み		
UCSD クラスタ		
リソース グループ	はい	はい
タグ ライブラリ	はい	はい

グループ管理者

タスク	権限	
	読み取り	書き込み
仮想コンピューティング	はい	はい
VM ラベル		はい
vDC への VM 割り当て		
仮想ストレージ		
仮想ネットワーク		
物理コンピューティング		
物理ストレージ	はい	はい
物理ネットワーク		
グループのサービス リクエスト	はい	はい
承認者のサービス リクエスト	はい	はい
予算		
リソース アカウンティング	はい	
チャージバック	はい	
システム管理者		
ユーザとグループ		
仮想アカウント		
カタログ	はい	
vDC	はい	

タスク	権限	
コンピューティング ポリシー		
ストレージ ポリシー		
導入ポリシー		
SLA ポリシー		
ネットワーク ポリシー		
サービス提供		
リソース制限レポート	はい	
グループ ユーザ	はい	はい
CloudSense レポート	はい	はい
CloudSense アセスメント レポート		
オーケストレーション		
検出		
MSP		
自動化モジュールを開く		
CS 共有レポート	はい	はい
CS 共有評価		
リモート VM アクセス		
モバイル アクセス設定		
エンド ユーザのチャージバック	はい	
リソース アカウンティングの書き込み		
チャージバックの書き込み		

タスク	権限	
UCSD クラスタ		
リソース グループ		
タグ ライブラリ		

IS 管理者

タスク	権限	
	読み取り	書き込み
仮想コンピューティング	はい	
VM ラベル		はい
vDC への VM 割り当て		はい
仮想ストレージ	はい	
仮想ネットワーク	はい	
物理コンピューティング	はい	
物理ストレージ	はい	
物理ネットワーク	はい	
グループのサービスリクエスト	はい	
承認者のサービスリクエスト	はい	はい
予算	はい	
リソースアカウンティング	はい	
チャージバック	はい	
システム管理者	はい	
ユーザとグループ	はい	

タスク	権限	
仮想アカウント	はい	
カタログ	はい	
vDC	はい	はい
コンピューティング ポリシー	はい	
ストレージ ポリシー	はい	
導入ポリシー	はい	はい
SLA ポリシー	はい	はい
ネットワーク ポリシー	はい	
サービス提供	はい	はい
リソース制限レポート	はい	
グループ ユーザ	はい	
CloudSense レポート	はい	
CloudSense アセスメント レポート	はい	
オーケストレーション	はい	はい
検出		はい
MSP		はい
自動化モジュールを開く		
CS 共有レポート		
CS 共有評価		
リモート VM アクセス		
モバイル アクセス設定		

タスク	権限	
エンド ユーザのチャージバック		
リソースアカウンティングの書き込み		
チャージバックの書き込み		
UCSD クラスタ		
リソース グループ	はい	はい
タグ ライブラリ	はい	はい

ネットワーク管理者

タスク	権限	
	読み取り	書き込み
仮想コンピューティング	はい	
VM ラベル		はい
vDC への VM 割り当て		
仮想ストレージ	はい	
仮想ネットワーク	はい	
物理コンピューティング	はい	
物理ストレージ	はい	
物理ネットワーク	はい	はい
グループのサービス リクエスト	はい	
承認者のサービス リクエスト	はい	はい

タスク	権限	
予算	はい	
リソース アカウンティング	はい	
チャージバック	はい	
システム管理者	はい	
ユーザとグループ	はい	
仮想アカウント	はい	
カタログ	はい	
vDC	はい	
コンピューティング ポリシー	はい	
ストレージ ポリシー	はい	
導入ポリシー	はい	
SLA ポリシー	はい	
ネットワーク ポリシー	はい	はい
サービス提供	はい	
リソース制限レポート	はい	
グループ ユーザ	はい	
CloudSense レポート	はい	
CloudSense アセスメント レポート	はい	
オーケストレーション	はい	はい
検出	はい	はい
MSP	はい	はい

タスク	権限	
自動化モジュールを開く		
CS 共有レポート		
CS 共有評価		
リモート VM アクセス		
モバイル アクセス設定		
エンド ユーザのチャージバック		
リソース アカウンティングの書き込み		
チャージバックの書き込み		
UCSD クラスタ		
リソース グループ	はい	はい
タグ ライブラリ	はい	はい

オペレータ

タスク	権限	
	読み取り	書き込み
仮想コンピューティング	はい	
VM ラベル		はい
vDC への VM 割り当て		はい
仮想ストレージ	はい	
仮想ネットワーク	はい	
物理コンピューティング	はい	
物理ストレージ	はい	

タスク	権限	
物理ネットワーク	はい	
グループのサービス リクエスト	はい	はい
承認者のサービス リクエスト	はい	はい
予算	はい	
リソース アカウンティング	はい	
チャージバック	はい	
システム管理者	はい	
ユーザとグループ	はい	
仮想アカウント	はい	
カタログ	はい	
vDC	はい	
コンピューティング ポリシー	はい	
ストレージ ポリシー	はい	
導入ポリシー	はい	
SLA ポリシー	はい	
ネットワーク ポリシー	はい	
サービス提供	はい	
リソース制限レポート	はい	
グループ ユーザ	はい	
CloudSense レポート	はい	

タスク	権限	
CloudSense アセスメント レポート	はい	
オーケストレーション		
検出		
MSP		
自動化モジュールを開く		
CS 共有レポート		
CS 共有評価		
リモート VM アクセス		
モバイル アクセス設定		
エンド ユーザのチャージバック		
リソース アカウンティングの書き込み		
チャージバックの書き込み		
UCSD クラスタ		
リソース グループ		
タグ ライブラリ		

サービス エンド ユーザ

タスク	権限	
	読み取り	書き込み
仮想コンピューティング	はい	はい
VM ラベル		はい

タスク	権限	
vDC への VM 割り当て		
仮想ストレージ		
仮想ネットワーク		
物理コンピューティング	はい	
物理ストレージ	はい	
物理ネットワーク		
グループのサービス リクエスト	はい	はい
承認者のサービス リクエスト	はい	はい
予算		
リソース アカウンティング	はい	
チャージバック	はい	
システム管理者		
ユーザとグループ		
仮想アカウント		
カタログ	はい	
vDC	はい	
コンピューティング ポリシー		
ストレージ ポリシー		
導入ポリシー		
SLA ポリシー		
ネットワーク ポリシー		

タスク	権限	
サービス提供		
リソース制限レポート	はい	
グループ ユーザ		
CloudSense レポート	はい	
CloudSense アセスメント レポート		
オーケストレーション		
検出		
MSP		
自動化モジュールを開く		
CS 共有レポート	はい	
CS 共有評価		
リモート VM アクセス		
モバイル アクセス設定		
エンド ユーザのチャージバック	はい	
リソース アカウンティングの書き込み		
チャージバックの書き込み		
UCSD クラスタ		
リソース グループ		
タグ ライブラリ		

ストレージ管理者

タスク	権限	
	読み取り	書き込み
仮想コンピューティング	はい	
VM ラベル		はい
vDC への VM 割り当て		
仮想ストレージ	はい	
仮想ネットワーク	はい	
物理コンピューティング	はい	
物理ストレージ	はい	はい
物理ネットワーク	はい	
グループのサービス リクエスト	はい	
承認者のサービス リクエスト	はい	はい
予算	はい	
リソース アカウンティング	はい	
チャージバック	はい	
システム管理者	はい	
ユーザとグループ	はい	
仮想アカウント	はい	
カタログ	はい	
vDC	はい	

タスク	権限	
コンピューティング ポリシー	はい	
ストレージ ポリシー	はい	はい
導入ポリシー	はい	
SLA ポリシー	はい	
ネットワーク ポリシー	はい	
サービス提供	はい	
リソース制限レポート	はい	
グループ ユーザ	はい	
CloudSense レポート	はい	
CloudSense アセスメント レポート	はい	
オーケストレーション	はい	はい
検出	はい	はい
MSP	はい	はい
自動化モジュールを開く		
CS 共有レポート		
CS 共有評価		
リモート VM アクセス		
モバイル アクセス設定		
エンド ユーザのチャージバック		
リソース アカウンティングの書き込み		
チャージバックの書き込み		

タスク	権限	
UCSD クラスタ		
リソース グループ	はい	はい
タグ ライブラリ	はい	はい

ユーザの役割および権限

次の表に、各管理ユーザ タイプに対応する権限のリストを示します。

権限	すべてのポリシー管理者	請求管理者	コンピューティング管理者	グループ管理者	IS 管理者	MSP 管理者	ネットワーク管理者	オペレータ	サービスエンドユーザ	ストレージ管理者
仮想コンピューティング	読み取り		読み取り	読み取り/書き込み	読み取り	書き込み	読み取り	読み取り	読み取り/書き込み	読み取り
VM ラベル	書き込み		書き込み	書き込み	書き込み	書き込み	書き込み	書き込み	書き込み	書き込み
vDC への VM 割り当て	書き込み				書き込み			書き込み		
仮想ストレージ	読み取り		読み取り		読み取り		読み取り	読み取り		読み取り
仮想ネットワーク	読み取り		読み取り		読み取り		読み取り	読み取り		読み取り
物理コンピューティング	読み取り/書き込み		読み取り/書き込み		読み取り		読み取り	読み取り	読み取り	読み取り

権限	すべてのポリシー管理者	請求管理者	コンピューティング管理者	グループ管理者	IS 管理者	MSP 管理者	ネットワーク管理者	オペレータ	サービスエンドユーザ	ストレージ管理者
物理ストレージ	読み取り/書き込み		読み取り	読み取り/書き込み	読み取り		読み取り	読み取り	読み取り	読み取り/書き込み
物理ネットワーク	読み取り/書き込み		読み取り		読み取り		読み取り/書き込み	読み取り/書き込み		読み取り
グループのサービス リクエスト	読み取り/書き込み	読み取り	読み取り	読み取り/書き込み	読み取り	読み取り/書き込み	読み取り	読み取り/書き込み	読み取り/書き込み	読み取り
承認者のサービスリクエスト	読み取り/書き込み		読み取り/書き込み	読み取り/書き込み	読み取り/書き込み	読み取り/書き込み	読み取り/書き込み	読み取り	読み取り/書き込み	読み取り/書き込み
予算	読み取り	読み取り/書き込み	読み取り		読み取り	読み取り/書き込み	読み取り	読み取り		読み取り
リソースアカウンティング	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り
チャージバック	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り
システム管理者	読み取り		読み取り		読み取り		読み取り	読み取り		読み取り
ユーザとグループ	読み取り		読み取り		読み取り		読み取り	読み取り		読み取り
仮想アカウント	読み取り		読み取り		読み取り		読み取り	読み取り		読み取り

権限	すべてのポリシー管理者	請求管理者	コンピューティング管理者	グループ管理者	IS 管理者	MSP 管理者	ネットワーク管理者	オペレータ	サービスエンドユーザ	ストレージ管理者
カタログ	読み取り		読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り
vDC	読み取り		読み取り	読み取り	読み取り/書き込み	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り
コンピューティングポリシー	読み取り/書き込み		読み取り/書き込み		読み取り		読み取り	読み取り		読み取り
ストレージ ポリシー	読み取り/書き込み		読み取り		読み取り		読み取り	読み取り		読み取り/書き込み
ネットワーク ポリシー	読み取り/書き込み		読み取り		読み取り		読み取り/書き込み	読み取り		読み取り
導入ポリシー	書き込み		読み取り		読み取り/書き込み		読み取り	読み取り		読み取り
SLA ポリシー	書き込み		読み取り		読み取り/書き込み		読み取り	読み取り		読み取り
サービス提供	読み取り/書き込み		読み取り		読み取り/書き込み		読み取り	読み取り		読み取り
リソース制限レポート	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り	読み取り

権限	すべてのポリシー管理者	請求管理者	コンピューティング管理者	グループ管理者	IS 管理者	MSP 管理者	ネットワーク管理者	オペレータ	サービスエンドユーザ	ストレージ管理者
グループユーザ	読み取り		読み取り	読み取り/書き込み	読み取り	読み取り/書き込み	読み取り	読み取り		読み取り
CloudSense レポート	読み取り	読み取り/書き込み	読み取り	読み取り/書き込み	読み取り		読み取り	読み取り	読み取り	読み取り
CloudSense アセスメント レポート	読み取り	読み取り/書き込み	読み取り				読み取り			読み取り
オーケストレーション	読み取り/書き込み		読み取り/書き込み		読み取り/書き込み		読み取り/書き込み			読み取り/書き込み
検出	読み取り	読み取り	読み取り		書き込み		読み取り/書き込み			読み取り/書き込み
MSP	書き込み	読み取り/書き込み	読み取り/書き込み		書き込み	読み取り/書き込み	読み取り/書き込み			読み取り/書き込み
自動化モジュールを開く										
CS 共有レポート				読み取り/書き込み		読み取り			読み取り	

権限	すべてのポリシー管理者	請求管理者	コンピューティング管理者	グループ管理者	IS 管理者	MSP 管理者	ネットワーク管理者	オペレータ	サービスエンドユーザ	ストレージ管理者
CS 共有評価				読み取り/書き込み						
リモート VM アクセス										
モバイルアクセス設定										
エンドユーザのチャージバック				読み取り		読み取り			読み取り	
リソースアカウンティングの書き込み		書き込み								
チャージバックの書き込み	書き込み	書き込み								
UCSD クラスタ										
リソースグループ			読み取り/書き込み		読み取り/書き込み		読み取り/書き込み			読み取り/書き込み

権限	すべてのポリシー管理者	請求管理者	コンピューティング管理者	グループ管理者	IS 管理者	MSP 管理者	ネットワーク管理者	オペレータ	サービスエンドユーザ	ストレージ管理者
タグ ライブラリ			読み取り/書き込み		読み取り/書き込み		読み取り/書き込み			読み取り/書き込み

MSP 管理者ロール

マネージド サービス プロバイダー（MSP）の組織は、Cisco UCS Director での顧客グループのカテゴリ化です。 これは顧客組織のハイレベルなカテゴリ化で、親組織と見なすこともできます。 この MSP 組織内で、複数のサブカテゴリまたは子組織をグループ化できます。 たとえば、シスコのような企業名は MSP 組織です。 この MSP 組織内で、人事、財務、運営など複数の顧客グループを作成できます。 これらのグループは MSP 組織内の顧客グループと見なされます。

管理者は、Cisco UCS Director の各 MSP に必要です。 この管理者は MSP 管理者と呼ばれます。 この管理者は、MSP 組織と MSP 組織内のすべての顧客組織を管理します。

Cisco UCS Director のグローバル管理者として、MSP 組織および MSP 管理者を作成するステップの推奨手順を以下に示します。

1. Cisco UCS Director でサービス プロバイダー機能を有効にします。 この機能を有効にする方法の詳細については、サービス プロバイダー機能の有効化, （98 ページ）を参照してください。
2. MSP 組織を作成します。 詳細については、MSP 組織の作成, （48 ページ）を参照してください。
3. MSP 組織内で顧客グループを作成します。 詳細については、顧客組織の作成, （49 ページ）を参照してください。
4. Cisco UCS Director で MSP 管理者ロール権限を持つユーザを作成します。 このユーザを作成するときに、このユーザが管理できる MSP 組織を選択したり、新しい MSP 組織を作成することもできます。 特定のロールを持つユーザを作成する方法の詳細については、ユーザの追加, （17 ページ）を参照してください。

   ロールによって、ユーザが Cisco UCS Director で確認できるメニューおよびタブが定義されます。 通常、MSP 管理者には次のメニューが必要です。

   - 組織
   - ポリシー
   - Cloud Sense

MSP 組織および MSP 管理者ロールの作成に加えて、カスタマイズされたロゴおよびアプリケーションラベルでこれらの組織をブランディングすることもできます。 詳細については、顧客組織のブランディング, （78 ページ）を参照してください。

（注） Cisco UCS Director は、グローバル レベル、MSP 組織レベル、および顧客組織レベルでのブランディングをサポートしています。 ただし、ユーザに表示されるブランディングの詳細は特定のガイドラインに依存します。 詳細については、顧客組織のブランディングについて, （75 ページ）を参照してください。

MSP 管理者の場合、次の表に Cisco UCS Director で実行するタスクを示します。 また、タスクの手順情報を確認できるこのガイドのトピックへのリンクも示します。

タスク	ガイドの情報へのリンク
管理する顧客組織の作成	顧客組織の作成, （49 ページ）
顧客組織への特定のブランディングの適用	顧客組織のブランディング, （78 ページ）
VM をプロビジョニングするためのポリシーの作成と管理	ポリシーの管理, （141 ページ）
レポートを生成するための Cloud Sense 分析の使用	CloudSense 分析の管理, （301 ページ）

グループの管理

ユーザ グループの作成

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザとグループ] の順に選択します。

ステップ 2 [ユーザ グループ] タブをクリックします。

ステップ 3 [追加] をクリックします。

ステップ 4 [グループの追加] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

フィールド名	説明
[名前] フィールド	グループまたは顧客組織の名前。
[説明] フィールド	グループまたは顧客組織の説明（必要な場合）。

フィールド名	説明
[コード] フィールド	グループの短い名前またはコード名。 この名前は、VM とホスト名テンプレートで使用されます。
[コストセンター] フィールド	（任意）コストセンターの名前または番号（必要な場合）。 この名前または番号は、グループが関連付けられているコストセンターを表します。 この名前は、VMware システム ポリシー VM の命名規則で使用できます。 命名規則にコストセンターを使用する方法の詳細については、ポリシーの管理, （141 ページ）を参照してください。
[連絡先の電子メール] フィールド	この電子メールアドレスは、必要に応じてサービス リクエストとリクエスト承認のステータスをグループ所有者に通知するために使用されます。
[名] フィールド	連絡先の名。
[姓] フィールド	連絡先の姓。
[電話] フィールド	連絡先の電話番号。
[住所] フィールド	連絡先の住所。
[Group Share Policy（グループ共有ポリシー）] ドロップダウン リスト	このグループ内のユーザのグループ共有ポリシーを選択します。 このドロップダウン リストにデータが取り込まれるのは、グループ共有ポリシーを作成した場合だけです。 このポリシーの作成の詳細については、グループ共有ポリシーの作成, （147 ページ）を参照してください。
[ユーザへのリソース割り当てを許可] チェックボックス	オンにすると、ユーザにこのグループのリソースが割り当てられ、それらのリソースを所有できます。 またこれらのユーザは、グループに属するリソースを表示できます。 ただし、ユーザ間でリソースを共有することはできません。

ステップ 5 [追加] をクリックします。

次の作業

さらにグループを追加する場合は、この手順を繰り返します。 追加するグループごとに、リソース制限を編集し、タグを管理し、ロゴおよびアプリケーション ラベルをカスタマイズできます。

MSP 組織の作成

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザとグループ] の順に選択します。

ステップ 2 [MSP組織（MSP Organizations）] タブをクリックします。
このタブ名は目安にすぎません。 サービス プロバイダー機能を有効にしている場合は、第1 レベルと第 2 レベルの組織の名前を指定します。 これらの名前は、インターフェイスのタブとして表示されます。

ステップ 3 [追加] をクリックします。

ステップ 4 [MSP組織の追加（Add MSP Organizations）] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

フィールド名	説明
[名前] フィールド	MSP 組織の名前。
[説明] フィールド	MSP 組織の説明（必要な場合）。
[コード] フィールド	グループの短い名前またはコード名。 この名前は、VM とホスト名テンプレートで使用されます。
[コストセンター] フィールド	コストセンターの名前または番号（必要な場合）。 この名前または番号は、グループが関連付けられているコスト センターを表します。 この名前は、VMware システム ポリシー VM の命名規則で使用できます。 命名規則にコストセンターを使用する方法の詳細については、ポリシーの管理, （141 ページ）を参照してください。
[連絡先の電子メール] フィールド	この電子メールは、必要に応じてサービス リクエストおよびリクエスト承認のステータスを MSP 管理者に通知する目的で使用されます。
[名] フィールド	連絡先の名。
[姓] フィールド	連絡先の姓。
[電話] フィールド	連絡先の電話番号。
[住所] フィールド	連絡先の住所。

ステップ 5 [追加] をクリックします。

次の作業

この MSP 組織内で顧客組織を作成できます。 追加する MSP 組織ごとに、リソース制限を編集し、タグを管理し、ロゴおよびアプリケーション ラベルをカスタマイズできます。

顧客組織の作成

MSP 組織内で顧客組織を作成するには、この手順に従います。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザとグループ] の順に選択します。

ステップ 2 [顧客組織（Customer Organizations）] タブをクリックします。
このタブ名は目安にすぎません。 サービス プロバイダー機能を有効にしている場合は、第1 レベルと第 2 レベルの組織の名前を指定します。 これらの名前は、インターフェイスのタブとして表示されます。 サービス プロバイダー機能を無効にしている場合は、[顧客組織（Customer Organizations）] タブのみが表示されます。

ステップ 3 [追加] をクリックします。

ステップ 4 [グループの追加] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

フィールド名	説明
[名前] フィールド	グループまたは顧客組織の名前。
[説明] フィールド	グループまたは顧客組織の説明（必要な場合）。
[MSPグループ名（MSP Group Name）] フィールド	ドロップダウンリストから MSP 組織名を選択します。 このリストには、現在管理できるすべてのグループが含まれています。 たとえば、システムのグローバル管理者である場合、このリストには管理対象のすべての組織が表示されます。 しかし、MSP 管理者の場合は、このリストには管理者権限がある組織が表示されます。
[コード] フィールド	グループの短い名前またはコード名。 この名前は、VM とホスト名テンプレートで使用されます。

フィールド名	説明
[コストセンター] フィールド	（任意）コストセンターの名前または番号（必要な場合）。この名前または番号は、グループが関連付けられているコストセンターを表します。この名前は、VMware システム ポリシー VM の命名規則で使用できます。 命名規則にコストセンターを使用する方法の詳細については、ポリシーの管理, （141 ページ）を参照してください。
[連絡先の電子メール] フィールド	この電子メールは、必要に応じてサービス リクエストおよびリクエスト承認のステータスをグループ所有者に通知する目的で使用されます。
[名] フィールド	連絡先の名。
[姓] フィールド	連絡先の姓。
[電話] フィールド	連絡先の電話番号。
[住所] フィールド	連絡先の住所。
[グループ共有ポリシー] ドロップダウン リスト	このグループのユーザのグループ共有ポリシーを選択します。 このドロップダウン リストにデータが取り込まれるのは、グループ共有ポリシーを作成した場合だけです。このポリシーの作成の詳細については、グループ共有ポリシーの作成, （147 ページ）を参照してください。
[ユーザへのリソース割り当てを許可] チェックボックス	オンにすると、このグループのユーザは、そのユーザに割り当てられたリソースを持つことができ、これらのリソースを所有できます。また、これらのユーザは、グループに属するリソースを確認できます。しかし、ユーザ間でリソースを共有することはできません。

ステップ 5 [追加] をクリックします。

次の作業

さらに顧客組織を追加する場合は、この手順を繰り返します。追加する顧客組織ごとに、リソース制限を編集し、タグを管理し、ロゴおよびアプリケーション ラベルをカスタマイズできます。

パスワード ポリシー

パスワードポリシーはすべてのユーザに適用され、すべてのユーザタイプに関して、ユーザを追加するか、パスワードを変更する際に適用されます。 このポリシーによって、次のパスワード制限が適用されます。

- パスワードの長さ
- パスワードをユーザ名と同じにすることができるかどうか
- 現在のパスワードを新しいパスワードとして再設定できるかどうか
- パスワードで使用できない正規表現

パスワード ポリシーの作成

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザとグループ] の順に選択します。

ステップ 2 [パスワードポリシー] ペインで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[パスワードの最小長] ドロップダウン リスト	パスワードの最小文字数を選択します。
[パスワードの最大長] ドロップダウン リスト	パスワードの最大文字数を選択します。
[文字クラスの最小数] ドロップダウン リスト	大文字、小文字、数字、特殊文字などの文字クラスの最小数を選択します。
[パスワードでのログイン名の使用を許可しない] チェックボックス	ログイン ID と同じパスワードの使用を禁止するには、このチェックボックスをチェックします。
[前のパスワードを許可しない] チェックボックス	以前のパスワードの使用を禁止し、新しいパスワードが古いパスワードと同一にならないようにするには、このチェックボックスをオンにします。
[正規表現と一致するパスワードを許可しない] フィールド	パスワードでの使用を禁止する正規表現（1 行に 1 つずつ）。 たとえば .*abc.* は、指定するパスワードには文字列「abc」が含まれていてはならないことを指定します。

ステップ 3 [送信] をクリックします。

グループ予算ポリシー

チャージバック機能を使用して、リソースが計上されます。 グループまたは顧客の組織ごとのリソース使用に対して、エンティティを予算ポリシーに関連付けます。

グループまたは顧客の組織を予算の監視機能付きで設定して、グループまたは顧客の組織が、プロビジョニングされた予算内で収まるようにすることも、予算を超過できるように設定することもできます。

グループ予算ポリシーの表示および編集

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザとグループ] の順に選択します。

ステップ 2 [ユーザグループ] タブを選択します。

ステップ 3 リストからグループを選択します。

ステップ 4 [予算ポリシー] をクリックします。

ステップ 5 [予算ポリシー] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[予算の監視の有効化] チェックボックス	グループによる予算の使用状況をモニタするには、このチェックボックスをオンにします。 このグループのすべての予算エントリを無視するには、このチェックボックスをオフにします。
[予算超過を許可] チェックボックス	グループ メンバーに対しプロビジョニング済み予算の超過を許可する場合は、オンにします。 予算をすべて消化した場合に、新しい予算が追加されるまで、すべてのリクエストを却下するには、このチェックボックスをオフにします。

ステップ 6 [保存] をクリックします。

リソース制限値

リソース使用率を管理するために、グループ、顧客組織またはテナントのリソース制限値を設定できます。 次の制限値を指定できます。

- 仮想リソース
- オペレーティング システム リソース
- 物理リソース

（注） オペレーティング システム リソースと物理リソースの制限に関する設定は、パブリック クラウドではサポートされません。

Cisco UCS Director でサービス プロバイダー機能を有効にしている場合は、リソース制限値を設定するときに次の事項に留意する必要があります。

- 親組織レベルに設定された制限値によって、親組織内の顧客グループとコンテナに対し設定できる制限値が決まります。

  たとえば、親組織であるテナント 1 に対しリソース制限値 8 を設定した場合、テナント 1 内のすべての顧客グループに指定される累積制限値は 8 を超えてはいけません。

- 特定の顧客グループにリソース制限値を追加していないが、そのグループ内のコンテナに対し制限値を指定している場合は、親組織内の別の顧客グループに制限値を設定する前にリソース制限値の合計を考慮する必要があります。

  たとえば、親組織であるテナント 1 があり、その中に 3 つの顧客グループ、グループ A、グループ B、およびグループ C があると仮定します。 グループ A にはコンテナ C1 と C2 があり、グループ B にはコンテナ C3 と C4 があります。 テナント 1 に制限値 10 を、グループ A に制限値 2 を、グループ B 内のコンテナ 1 および 2 に制限値 2 を設定しました。 さらに具体的に言うと、グループ B には制限値を設定していませんが、その中のコンテナには制限値を指定しました。 このシナリオでは、グループ C に制限値を設定する場合、指定する制限値はグループ A とグループ B 内のコンテナに指定された制限値の合計を超えてはいけません。

- すべての顧客グループとその中のコンテナに設定された制限値の合計が親組織に設定されたリソース制限値を超えることはできません。
- 特定の顧客グループにリソース制限値を追加していないが、そのグループ内のコンテナに対し制限値を指定している場合は、親組織に制限値を設定する前にリソース制限値の合計を考慮する必要があります。

サービス プロバイダー機能を無効にしている場合は、親組織が 1 つしかないので次の原則が適用されます。

- 親組織に対し制限値を設定している場合は、すべての顧客グループに指定する制限値の合計が親のリソース制限値を超えてはいけません。

たとえば、親組織の中に 2 つの顧客グループ、グループ A とグループ B があると仮定します。 親組織に制限値 10 を、グループ A に 5 を設定したとします。 グループ B に設定する制限値は、グループ A に設定した制限値とともに追加する場合、親組織に設定した制限値 10 を超えてはいけません。

-

リソース制限の表示

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [サマリー] の順に選択します。

ステップ 2 表示するグループをクリックします。

ステップ 3 [リソース制限] を選択して、選択したグループのリソースの現在の制限、使用状況、保留中の SR の使用、およびステータスを表示します。

リソース制限の編集

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザとグループ] の順に選択します。

ステップ 2 組織またはカスタマー グループのリソース制限を編集する場合は、[顧客組織（Customer Organization）] タブまたは [MSP組織（MSP Organization）] タブを選択します。

重要 これらの名前は目安にすぎません。 サービスプロバイダー機能を有効にしている場合は、第1 レベルと第 2 レベルの組織の名前を指定します。 これらの名前は、インターフェイスのタブとして表示されます。

ステップ 3 ユーザ グループのリソース制限を編集するには、[ユーザグループ（User Groups）] タブを選択します。

ステップ 4 グループをテーブルから選択し、[リソース制限の編集（Edit Resources Limits）] をクリックします。 [リソース制限] ダイアログボックスが表示されます。

ステップ 5 [リソース制限] ダイアログボックスで、[リソースの制限の有効化] チェックボックスをオンにして、以下のフィールドに値を入力します。

フィールド名	説明
[グループ] フィールド	選択したグループ名。

フィールド名	説明
[リソースの制限の有効化（Enable Resource Limits）] チェック ボックス	リソース制限を有効にする場合は、このチェックボックスをオンにします。リソース制限を無効にする場合は、このチェックボックスをオフにします。 チェックボックスをオンにすると、グループに対するリソース制限を設定するためのオプションが示され、ゼロ以外のリソース制限がすべて適用されます。
[アクティブなVMの最大数（Maximum Active VM Count）] フィールド	アクティブな VM の最大数。
[VMの最大合計数（Maximum Total VM Count）] フィールド	VM の合計数。
[VDCの最大合計数（Maximum Total VDC Count）] フィールド	VDC の合計数。 VM のプロビジョニング時に、ユーザが指定する VDC の数がこのフィールドに指定した数を超過すると、エラー メッセージが表示されます。
[プロビジョニング済みVCPUの制限（Provisioned vCPUs Limit）] フィールド	プロビジョニング済み vCPU の最大数。
[プロビジョニング済みメモリの制限(GB)（Provisioned Memory (GB) Limit）] フィールド	プロビジョニング済みメモリの制限（GB）。
[プロビジョニング済みCPUの制限(GHz)（Provisioned CPU (GHz) Limit）] フィールド	プロビジョニング済み CPU の制限（GHz）
[プロビジョニング済みディスクの制限(GB)（Provisioned Disk (GB) Limit）] フィールド	プロビジョニング済みディスクの制限（GB）。
[予約済みCPUの制限(GHz)（Reserved CPU (GHz) Limit）] フィールド	予約済み CPU の制限（GHz）。
[予約済みメモリの制限(GB)（Reserved Memory (GB) Limit）] フィールド	予約済みメモリの制限（GB）。
[スナップショットの制限(GB)（Maximum Snapshot (GB) Limit）] フィールド	最大のスナップショット制限（GB）。

フィールド名	説明
[非アクティブなVMのCPUとメモリのカウント（Count CPU and Memory for Inactive VMs）] チェック ボックス	グループの非アクティブな VM CPU またはメモリ データをリソース制限の計算に含める場合は、このチェックボックスをオンにします。非アクティブな VM CPU またはメモリ データをリソース計算から除外するには、このチェックボックスをオフにします。
[OS リソース制限] （注） OS のリソース制限および物理リソースの制限の設定は、パブリック クラウドではサポートされません。	
[CentOS] フィールド	CentOS（Community Enterprise Operating System）サーバの最大数。
[Windows Server 2003] フィールド	Windows 2003 サーバの最大数。
[Windows Server 2008] フィールド	Windows 2008 サーバの最大数。
[Windows Server 2012] フィールド	Windows 2012 サーバの最大数。
[Windows 7] フィールド	Windows 7 マシンの最大数。
[Windows XP] フィールド	Windows XP マシンの最大数。
[Red Hat] フィールド	Red Hat マシンの最大数。
[Ubuntu] フィールド	Ubuntu マシンの最大数。
[FreeBSD] フィールド	FreeBSD マシンの最大数。
[その他のLinux（Other Linux）] フィールド	その他の Linux OS の最大数。
[その他（Other）] フィールド	その他の OS の最大数。
[物理リソース制限]	
[vFilerの最大数（Maximum vFiler Count）] フィールド	vFiler の最大数。
[物理ストレージの最大容量(GB)（Maximum Physical Storage Space (GB)）] フィールド	ストレージの最大容量。
[物理サーバの最大数（Maximum Physical Server Count）] フィールド	サーバの最大数。

フィールド名	説明
[物理サーバの最大メモリ(GB)（Maximum Physical Server Memory (GB)）] フィールド	サーバの最大メモリ容量。
[物理サーバの最大CPU数（Maximum Physical Server CPU Count）] フィールド	サーバ CPU の最大数。

ステップ 6 [保存] をクリックします。

管理プロファイルの設定

管理者プロファイルの作成

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザとグループ] の順に選択します。

ステップ 2 [ログインユーザ] タブを選択します

ステップ 3 [追加] をクリックします。

ステップ 4 [ユーザの追加] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

フィールド名	説明
[ユーザタイプ] のドロップダウン リスト	ユーザ タイプに [システム管理] を選択します。システム管理者には、すべての権限が与えられています。
ログイン名	ログイン名。 デフォルトは [管理者] です。
パスワード	管理者アカウントのパスワード。
パスワードの確認	確認のために管理者アカウントのパスワードを再入力します。
ユーザの連絡先メール	管理者の電子メール アドレス。
名	管理者の名。
姓	管理者の姓。

フィールド名	説明
電話	管理者の電話番号。
住所	管理者の住所。

ステップ 5 [追加] をクリックします。

管理者パスワードの変更

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザとグループ] の順に選択します。

ステップ 2 [ログイン名] の列で、[管理者] を選択します。

ステップ 3 [パスワードの変更] をクリックします。

ステップ 4 [パスワードの変更] ダイアログボックスで、管理ユーザの新しいパスワードを入力し、確認します。

ステップ 5 [保存] をクリックします。

現在のオンライン ユーザの表示

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザとグループ] の順に選択します。

ステップ 2 オンライン ユーザのリストを表示するには、[現在のオンラインユーザ] タブを選択します。 ユーザ名、IP アドレス、セッションの開始時刻、最終データ アクセス、およびクライアントを確認できます。

ユーザ アクセス プロファイルの管理

マルチロール アクセス プロファイル

1 人のユーザを複数のロールに割り当てることができます。これは、1 つのユーザ アクセス プロファイルとしてシステム内で反映されます。 たとえば、あるユーザが、グループ管理者、および全ポリシーの管理者として Cisco UCS Director にログインしようとした場合、両方のタイプのアクセスが適切であれば、いずれのログインも可能です。

アクセス プロファイルは、ユーザごとに表示できるリソースも定義します。 デフォルトでは、1 人のユーザが作成されたときに 1 つのアクセス プロファイルが作成されます。 デフォルトでは、ユーザは自分のリソース、およびグループのリソースを参照できます。 ユーザはプロファイルを作成して、自分のリソースを参照することも、グループで共有しているリソースのみを参照することもできます。

（注） プロファイルの 1 つを、デフォルトのユーザ アクセス プロファイルとして設定できます。

（注） [プロファイルの管理] 機能を使用して、ユーザ アクセス プロファイルに対して追加、ログイン、編集、または削除を行うことができます。

ユーザ アクセス プロファイルの作成

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザとグループ] の順に選択します。

ステップ 2 [ログインユーザ] タブを選択します

ステップ 3 リストからユーザを選択します。

ステップ 4 [プロファイルの管理] をクリックします。

ステップ 5 [プロファイルの管理（Manage Profile）] ウィンドウで、[追加]（+）をクリックします。

ステップ 6 [アクセスプロファイルへのエントリの追加] ダイアログ ボックスで、次のフィールドに値を入力します。

フィールド名	説明
[名前] フィールド	プロファイル名。
[説明] フィールド	プロファイルの説明です。

フィールド名	説明
[タイプ] ドロップダウン リスト	ユーザ ロールのタイプを選択します。
[顧客組織（Customer Organizations）] ドロップダウンリスト	このユーザプロファイルを適用する組織を選択します。
[ユーザがアクセスできるすべてのグループのリソースを表示します（Show Resources From All Other Groups the User Has Access）] チェックボックス	ユーザがアクセスできるか、ユーザがその一部であるすべての他のグループからのリソースを表示できるようにするには、このチェックボックスをオンにします。
[共有グループ（Shared Groups）] フィールド	[選択（Select）] をクリックして、ユーザ プロファイルを適用するグループを選択します。 ユーザは、選択されたグループに関連付けられたすべてのリソースにアクセスできます。
[デフォルトプロファイル] チェックボックス	デフォルトのユーザ アクセス プロファイルである場合は、このチェックボックスをオンにします。デフォルトでない場合は、このチェックボックスをオフにします。

ステップ 7 [送信] をクリックします。

次の作業

必要に応じて、追加のユーザ プロファイルを作成します。

ユーザ アクセス プロファイルの編集

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザとグループ] の順に選択します。
ステップ 2 [ログインユーザ] タブを選択します。
ステップ 3 リストからユーザを選択します。
ステップ 4 [プロファイルの管理] をクリックします。
ステップ 5 [プロファイルの管理] ウィンドウで、リストからユーザを選択します。
ステップ 6 [編集] をクリックします。
ステップ 7 [アクセスプロファイルエントリの編集] ダイアログボックスで、必要に応じて、[名前]、[説明]、[タイプ]、[グループ]、または [デフォルトプロファイル] フィールドを編集します。
ステップ 8 [送信] をクリックします。

ユーザ アクセス プロファイルの削除

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザとグループ] の順に選択します。
ステップ 2 [ログインユーザ] タブを選択します。
ステップ 3 リストからユーザを選択します。
ステップ 4 [プロファイルの管理] をクリックします。
ステップ 5 [プロファイルの管理] ウィンドウで、リストからユーザを選択します。
ステップ 6 [プロファイルの管理] ダイアログボックスで、[削除] をクリックします。

プロファイルへのログイン

手順

ステップ 1 [Cisco UCS Director ログイン] ダイアログボックスの [ユーザ名] フィールドに、ユーザ名を「ユーザ名: アクセス プロファイル名」の形式で入力します。
（注） 例：Alex:
GrpAdmin

ステップ 2 [パスワード] フィールドにパスワードを入力します。

ステップ 3 [ログイン] をクリックします。

プロファイルの削除

デフォルトプロファイルは、システムで作成した最初のプロファイルです。デフォルトプロファイルを別のプロファイルに変更できます。新しいデフォルトプロファイルを使用し、ユーザ名とパスワードを入力してログインします。

デフォルト プロファイルの変更

手順

ステップ 1 ウィンドウ右上（[ログアウト] の左側）で、ユーザ名をクリックします。

ステップ 2 [ユーザ情報] ウィンドウの [アクセスプロファイル] タブを選択します。

ステップ 3 ユーザ プロファイルを選択し、[デフォルトプロファイルとして設定] をクリックします。

（注） プロファイルを追加または編集するときにも、プロファイルをデフォルトとして設定できます。

認証および LDAP 統合

ローカル認証に対してフォールバックがある設定、フォールバックがない設定、および LDAP に対してフォールバックがある設定が可能です。また、フォールバックを行わない VeriSign ID 保護（VID）認証を設定できます。

名称	説明
[ローカル認証]	認証は、ローカルのみ（Cisco UCS Director）で実行され、LDAP サーバ経由では実行されません。
[ローカルが最初、LDAPにフォールバック]	認証は最初にローカル サーバ（Cisco UCS Director）で実行されます。ユーザがローカルサーバにない場合、LDAP サーバが確認されます。

名称	説明
[LDAPが最初、ローカルにフォールバック]	認証は最初に LDAP サーバで実行されます。ユーザが LDAP サーバにない場合、ローカルサーバ（Cisco UCS Director）が確認されます。
[VeriSign ID保護]	VIP 認証サービス（2 要素認証）が有効化されます。

認証の環境設定

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザとグループ] の順に選択します。

ステップ 2 [認証の環境設定] タブを選択します。

ステップ 3 [認証の環境設定] ペインで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[認証の環境設定] ドロップダウン リスト	認証の環境設定を選択します。 次のいずれかを選択できます。 • [ローカル認証] このオプションを選択した場合は、ステップ 4 に進みます。 • [ローカルが最初、LDAPにフォールバック] • [LDAPが最初、ローカルにフォールバック] この LDAP 関連オプションのいずれかを選択するときには、LDAP サーバを設定する必要があります。詳細については、LDAP サーバの設定, （66 ページ）を参照してください。 • [VeriSign ID保護] このオプションを選択した場合は、ステップ 5 に進みます。

ステップ 4 ローカル認証の場合、[保存] をクリックします。
この認証の環境設定では、LDAP ユーザは Cisco UCS Director にログインできません。

ステップ 5 [VeriSign ID保護] を選択した場合は、次の手順を実行します。

a) VIP 証明書をアップロードするには、[参照] をクリックします。
証明書を見つけて選択し、[アップロード] をクリックします。

b) [パスワード] を入力します。

ステップ 6 [保存] をクリックします。

LDAP 統合

LDAP 統合を使用して、LDAP サーバのグループおよびユーザを Cisco UCS Director と同期することができます。 LDAP 認証により、同期されたユーザを LDAP サーバで認証することができます。 LDAP ユーザおよびグループは、自動または手動で同期できます。 LDAP 同期はシステム タスクとしても実行できます。 手動または自動で新しい組織単位（OU）が LDAP ディレクトリに追加され、同期プロセスが実行されると、直近に追加された LDAP ユーザおよびグループが Cisco UCS Director に表示されます。

重要 グループ、またはドメイン ユーザのグループに属していないユーザは、[Users with No Group（グループに属していないユーザ）] として LDAP に表示されます。 これらのユーザは、Cisco UCS Director のドメイン ユーザのグループの下に追加されます。

ローカルに存在している、または Cisco UCS Director で外部から同期されているユーザおよびグループは選択できません。

異なる LDAP サーバ アカウントに所属し、同じ名前を持った LDAP ユーザを追加できます。 ログイン ユーザ名を区別するために、ドメイン名が末尾に追加されます。 たとえば、abc@vxedomain.com などです。 このルールは、ユーザ グループにも適用されます。

単一の LDAP アカウントが追加され、ユーザがユーザ名のみを指定してログインすると、Cisco UCS Director は最初にそのユーザがローカル ユーザまたは LDAP ユーザのどちらであるかを判別します。 ユーザがローカル ユーザおよび外部 LDAP ユーザの両方として識別された場合、ログイン段階でユーザ名がローカルユーザ名に一致すると、そのローカルユーザが Cisco UCS Director に対して認証されます。 あるいは、ユーザ名が外部ユーザの名前に一致すると、その LDAP ユーザが Cisco UCS Director に対して認証されます。

LDAP 統合の規則と制限事項

グループの同期規則

- 選択した LDAP グループが Cisco UCS Director にすでに存在しており、ソースのタイプが [ローカル（Local）] の場合、そのグループは同期中に無視されます。
- 選択した LDAP グループが Cisco UCS Director にすでに存在しており、グループ ソースのタイプが[外部] の場合、そのグループの説明および電子メール属性が Cisco UCS Director で更新されます。

ユーザの同期規則

- 選択した LDAP ユーザが Cisco UCS Director にすでに存在しており、ソースのタイプが [外部（External）] の場合、そのユーザは同期時に無視されます。 ユーザの名前、説明、電子メールおよびその他の属性が再度更新されることはありません。
- ユーザ アカウントが 2 つの異なる LDAP ディレクトリに作成されると、最初に同期された LDAP ディレクトリのユーザの詳細が表示されます。 もう一方の LDAP ディレクトリからのユーザの詳細は表示されません。
- 複数の LDAP ディレクトリが同期された後、LDAP 外部ユーザは、完全なドメイン名をユーザ名と共に指定して Cisco UCS Director にログインする必要があります。 たとえば、vxedomain.com\username のように指定します。 ただし、Cisco UCS Director に追加されている LDAP サーバ ディレクトリが 1 つしかない場合には、この規則は適用されません。

ユーザ同期の制限事項

- あるユーザが複数のグループ メンバーシップを持っていても、そのユーザは Cisco UCS Director では単一のグループ メンバーシップを持つことになります。

（注） LDAP 同期プロセスの後には、ユーザが正しいグループに割り当てられていることを確認してください。

LDAP 統合の管理

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザとグループ] の順に選択します。

ステップ 2 [LDAP 統合] タブをクリックして、LDAP サーバの同期のステータスを表示します。

ステップ 3 （任意） LDAP 統合を管理するため、サーバを選択し、必要に応じて次のボタンをクリックします。

名称	説明
[ベースDNの検索] ボタン	検索するドメインの識別名を選択できます。 LDAP 同期処理が完了すると、選択した組織のすべてのユーザとグループが Cisco UCS Director に取り込まれます。 このアクションは、自動同期プロセスであるとも見なされます。 （注） LDAP サーバ同期をシステム タスクとして開始できます。 詳細については、LDAP 同期システム タスクの実行, （71 ページ）を参照してください。

名称	説明
[LDAPの手動同期のリクエスト]	表示されるダイアログボックスでは、LDAPユーザおよびグループを取得するための基本検索条件または拡張検索条件を指定できます。

ステップ 4 （任意） [LDAP の手動サーバ同期の要求] を選択した場合は、次のフィールドに入力します。

名称	説明
[基本検索] チェックボックス	組織単位ごとの基本検索を可能にします。
[詳細検索] チェックボックス	詳細検索を可能にします。

重要 いずれかの検索オプションを使用する時点ですでにユーザおよびグループが Cisco UCS Director に存在する場合、検索を実行しても同じユーザとグループは読み込まれません。

ステップ 5 基本検索の場合は、[選択] をクリックして検索ベースを指定します。

ステップ 6 検索ベース DN を選択し、[選択] をクリックします。 ステップ 9 に進みます。

ステップ 7 詳細検索の場合は、[詳細なフィルタ オプション] ペインで、[ユーザ フィルタ] と [グループ フィルタ] の属性名を追加または編集します。

ステップ 8 [次へ] をクリックします。

ステップ 9 [ユーザとグループの選択] ペインで、次のフィールドに入力します。

名称	説明
[LDAP グループ] フィールド	ユーザを同期する必要がある LDAP グループ。
[LDAP ユーザ] フィールド	同期する必要がある LDAP ユーザ。

ステップ 10 [送信] をクリックして、LDAP サーバを同期します。

LDAP サーバの設定

Cisco UCS Directorでは複数の LDAP サーバとアカウントを設定できます。

LDAP サーバ アカウントが追加されると直ちにこのアカウントのシステム タスクが自動的に作成され、データ同期を即時に開始します。 LDAP サーバ アカウントのすべてのユーザとグループがシステムに追加されます。 デフォルトでは、LDAP アカウントのすべてのユーザが自動的にサービス エンドユーザ プロファイルに割り当てられます。

はじめる前に

認証設定を次のいずれかに設定しておく必要があります。

- [ローカルが最初、LDAPにフォールバック]
- [LDAPが最初、ローカルにフォールバック]

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザとグループ] の順に選択します。

ステップ 2 [LDAP統合] タブを選択します。

ステップ 3 [追加] をクリックします。

ステップ 4 [LDAP サーバ設定] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[アカウント名] フィールド	アカウント名。 この名前は一意である必要があります。
[サーバタイプ] フィールド	LDAP サーバのタイプ。 この属性の種類は次のとおりです。 • OpenLDAP • MSAD - Microsoft Active Directory
[サーバ] フィールド	LDAP サーバの IP アドレスまたはホスト名。
[SSLの有効化] チェックボックス	LDAP サーバに対するセキュアな接続を有効にします。
[ポート] フィールド	ポート番号 SSL では 636 に、非セキュア モードでは 389 に自動的に設定されます。
[ドメイン名] フィールド	ドメイン名。 LDAPディレクトリのタイプとして [OpenLDAP] を選択した場合は、このドメイン名が、ユーザ名で指定されたドメインと一致している必要があります。 **重要** 完全なドメイン名を指定する必要があります。 たとえば、vxedomain.com などです。

名称	説明
[ユーザ名] フィールド	ユーザ名。 LDAPディレクトリのタイプとして[OpenLDAP]を選択した場合は、ユーザ名を次の形式で指定してください。 uid=users,ou=People,dc=ucsd,dc=com ここに指定する ou は、ディレクトリ階層でその他のすべてのユーザが配置される場所です。
[パスワード] フィールド	ユーザのパスワード。

ステップ 5 [次へ] をクリックします。

ステップ 6 [LDAP 検索ベース] ペインで [選択] をクリックし、LDAP 検索ベースのエントリを指定して、[選択] をクリックします。
このリストには、Cisco UCS Director で利用できるすべての組織単位（OU）が表示されます。

ステップ 7 [次へ] をクリックします。

ステップ 8 [LDAPユーザロールフィルタ（LDAP User Role Filter）] ペインで、（+）記号をクリックして、ユーザ ロール フィルタを追加します。

ステップ 9 [ユーザロールフィルタへのエントリの追加（Add Entry to User Role Filters）] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[属性名（Attribute Name）] フィールド	属性の名前。 これには、グループ名を指定できます。
[演算子（Operator）] ドロップダウンリスト	次のいずれかにできます。 • 次の値と等しい（Equal to） • 次で始まる（Starts with）
[属性値（Attribute Value）] フィールド	このフィールドで値を指定します [演算子（Operator）] フィールドと [属性値（Attribute Value）] フィールドの値に一致するすべてのユーザが、[ユーザロールのマップ（Map User Role）] ドロップダウンリストで選択するユーザ ロールに割り当てられます。

名前	説明
[ユーザロールのマップ（Map User Role）] ドロップダウンリスト	ユーザのマップ先とするユーザ ロールを選択します。 次のいずれかにできます。 • すべてのポリシー管理者 • 請求管理者 • コンピューティング管理者 • サービス エンド ユーザ • グループ管理者 • IS 管理者 • ネットワーク管理者 • オペレータ管理者 • ストレージ管理者

ステップ 10 [送信] をクリックします。

ステップ 11 [OK] をクリックします。
ユーザ ロール フィルタが [ユーザロールフィルタ（User Role Filters）] テーブルに追加されます。

（注） 複数のユーザ ロール フィルタが指定されている場合は、最初の行に指定されたフィルタが処理されます。

[ログインユーザ（Login Users）] タブでユーザのユーザ ロールを手動で更新すると、そのユーザには、グループをマップしたユーザ ロールが適用されなくなります。

次の作業

LDAP に認証の環境設定を設定していない場合は、認証の環境設定を変更するように指示されます。 認証の環境設定の変更に関する詳細については、認証の環境設定, （63 ページ）を参照してください。

LDAP サーバのサマリー情報の表示

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザとグループ] の順に選択します。

ステップ 2 [LDAP統合] タブを選択します。

ステップ 3 表から LDAP アカウント名を選択します。

ステップ 4 [表示] をクリックします。
[View LDAP Account Information（LDAP アカウント情報の表示）] ダイアログボックスに、LDAP アカウントのサマリー情報が表示されます。

ステップ 5 [閉じる] をクリックします。

LDAP サーバの接続のテスト

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザとグループ] の順に選択します。

ステップ 2 [LDAP統合] タブを選択します。

ステップ 3 テーブルから LDAP のアカウント名を選択します。

ステップ 4 [テスト接続] をクリックします。

ステップ 5 [Test LDAP Connectivity（LDAP 接続のテスト）] ダイアログボックスで、[閉じる] をクリックします。

LDAP 検索ベースDN エントリの追加

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザとグループ] の順に選択します。
ステップ 2 [LDAP統合] タブを選択します。
ステップ 3 テーブルから LDAP のアカウント名を選択します。
ステップ 4 [ベースDNの検索] をクリックします。
ステップ 5 [LDAP 検索ベース] ダイアログ ボックスで、[選択] をクリックして検索エントリを選択します。
ステップ 6 [選択] をクリックします。
ステップ 7 [送信] をクリックします。
ステップ 8 [OK] をクリックします。

LDAP 同期システム タスクの実行

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [システム] の順に選択します。
ステップ 2 [システムタスク] を選択します。
ステップ 3 [フィルタ] フィールドに LDAP と入力します。
ステップ 4 [システムのタスク] 表から [LDAPSyncTask] を選択します。
ステップ 5 [今すぐ実行] をクリックします。
ステップ 6 （任意） [タスクの管理] をクリックして、同期処理を有効または無効にします。

次の作業

同期プロセスの結果が Cisco UCS Director に表示されます。 [LDAP 統合] ペインで LDAP アカウントを選択し、[結果] をクリックすると、同期プロセスの概要が表示されます。

LDAP サーバの詳細の変更

設定済みの LDAP サーバに対し変更できるのは次の詳細情報のみです。

- ポート番号と SSL 設定
- ユーザ名とパスワード
- 検索ベース DN の選択内容

- マップされているユーザ ロール

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザとグループ] の順に選択します。

ステップ 2 [LDAP統合] タブをクリックして、LDAP アカウントを選択します。

ステップ 3 [変更] をクリックします。

ステップ 4 [LDAPサーバ設定の変更] ペインで、次のフィールドを編集します。

名前	説明
[SSLの有効化] チェックボックス	LDAP サーバへのセキュアな接続をイネーブルにします。
[ポート] フィールド	ポート番号 SSL の場合は 636 に、非セキュア モードの場合は389 に自動的に設定されます。
[ユーザ名] フィールド	ユーザ名。 LDAPディレクトリのタイプとして [OpenLDAP] を選択した場合は、ユーザ名を次の形式で指定してください。 uid=users,ou=People,dc=ucsd,dc=com ここに指定する ou は、ディレクトリ階層でその他のすべてのユーザが配置される場所です。
[パスワード] フィールド	ユーザのパスワード。

ステップ 5 [次へ] をクリックします。

ステップ 6 [LDAP検索ベース] ペインで、[選択] をクリックして LDAP 検索ベースのエントリを指定し、[選択] をクリックします。

ステップ 7 [次へ] をクリックします。

ステップ 8 [LDAPユーザロールフィルタ（LDAP User Role Filter）] ペインで、（+）記号をクリックして、ユーザ ロール フィルタを追加します。

ステップ 9 [ユーザロールフィルタへのエントリの追加（Add Entry to User Role Filters）] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[属性名（Attribute Name）] フィールド	属性の名前。 これには、グループ名を指定できます。

名前	説明
[演算子（Operator）] ドロップダウンリスト	次のいずれかにできます。 • 次の値と等しい（Equal to） • 次で始まる（Starts with）
[属性値（Attribute Value）] フィールド	このフィールドで値を指定します [演算子（Operator）] フィールドと [属性値（Attribute Value）] フィールドの値に一致するすべてのユーザが、[ユーザロールのマップ（Map User Role）] ドロップダウンリストで選択するユーザ ロールに割り当てられます。
[ユーザロールのマップ（Map User Role）] ドロップダウンリスト	ユーザのマップ先とするユーザ ロールを選択します。 次のいずれかにできます。 • すべてのポリシー管理者 • 請求管理者 • コンピューティング管理者 • サービス エンド ユーザ • グループ管理者 • IS 管理者 • ネットワーク管理者 • オペレータ管理者 • ストレージ管理者

ステップ 10 [送信] をクリックします。

ステップ 11 [OK] をクリックします。
ユーザ ロール フィルタが [ユーザロールフィルタ（User Role Filters）] テーブルに追加されます。

（注） 複数のユーザ ロール フィルタが指定されている場合は、最初の行に指定されたフィルタが処理されます。

LDAP サーバ情報の削除

LDAP サーバ アカウントを削除すると、次の動作が開始されます。

- LDAP ユーザに割り当てられていたリソースの割り当てが解除されます。
- LDAP ユーザに割り当てられていた VM の割り当てが解除されます。
- LDAP グループに割り当てられていたリソースの割り当てが解除されます。
- LDAP グループに割り当てられていた VM の割り当てが解除されます。
- LDAP ユーザに割り当てられていた VM 共有ポリシーの割り当てが解除されます。
- LDAP ユーザおよびグループに適用されていたタグがクリアされます。
- ユーザおよびグループが、データベースから直ちに削除されます。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザとグループ] の順に選択します。

ステップ 2 [LDAP統合] タブを選択します。

ステップ 3 テーブルから LDAP のアカウント名を選択します。

ステップ 4 [削除] をクリックします。

ステップ 5 [LDAPアカウントを削除する（Delete LDAP Account）] ダイアログボックスで、[削除（Delete）] をクリックします。

ステップ 6 [OK] をクリックします。
これにより、Cisco UCS Director 内の LDAP アカウントの削除が開始されます。 LDAP アカウント内のユーザ数およびグループ数によって、この削除プロセスが完了するまでに数分かかる場合があります。 この間、LDAP アカウントが Cisco UCS Director に表示され続ける場合があります。 [更新] をクリックして、アカウントが削除されたことを確認します。

シングル サインオン

Cisco UCS Director はワン ログインを使用してシングル サインオンを提供します。 シングル サインオンは、ユーザがアプリケーションにアクセスするために、パスワードを複数回入力することを不要にします。 シングル サインオンが有効な場合、ユーザはポータルにログインして Cisco UCS Director にアクセスできます。

（注） シングル サインオンは、ワン ログイン証明書を登録した後、Cisco UCS Director で使用可能になります。

シングル サインオンの有効化

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザとグループ] の順に選択します。

ステップ 2 [シングルサインオン] タブを選択します。

ステップ 3 [シングルサインオン] ペインで、[シングルサインオンの有効化] チェックボックスをオンにします。

ステップ 4 [アップロードするファイルの選択] フィールドで、ワン ログイン証明書ファイルを参照し、選択します。

ステップ 5 [アップロード] をクリックします。

ステップ 6 アップロードが完了したら、[送信] をクリックします。

顧客組織のブランディングについて

Cisco UCS Director は、次のレベルでのポータルのブランディングとカスタマイズをサポートしています。

- グローバル レベル：これはグローバル管理者によって変更可能なシステム レベルのブランディングです。
- MSP 組織レベルまたはテナント レベル：このレベルでのブランディングは、管理者または MSP 管理者によって変更できます。
- 顧客組織レベル：顧客組織は通常 MSP 組織にグループ化されます。 したがって MSP 管理者またはグローバル管理者がブランディングの詳細を変更できます。

MSP組織レベルのブランディング サポートの導入に伴い、ユーザが確認するブランディングの変更内容に適用される特定のルールがあります。 適用される設定は、次によって異なります。

- ユーザ ロール：ユーザがエンド ユーザか、グループ管理者か、または MSP 管理者か。
- ユーザが属する顧客組織とそれに対するブランディング設定。
- MSP 組織のブランディング設定。

次の表に、Cisco UCS Director でのブランディング動作を示します。

表 *2*：***Cisco Cisco UCS Director*** でのブランディング動作

MSP 組織レベルのブランディング設定	顧客組織レベルのブランディング設定	**MSP** 管理者	グループ管理者	エンド ユーザ
はい	はい	MSP 組織レベルで設定したブランディングの詳細が表示されます。	顧客組織レベルで設定したブランディングの詳細が表示されます。	このユーザが属する顧客組織レベルで設定したブランディングの詳細が表示されます。
いいえ	はい	グローバルブランディングの詳細が表示されます。	顧客組織レベルで設定したブランディングの詳細が表示されます。	このユーザが属する顧客組織レベルで設定したブランディングの詳細が表示されます。
はい	いいえ	MSP 組織レベルで設定したブランディングの詳細が表示されます。	この顧客組織が属する MSP 組織レベルで設定したブランディングの詳細が表示されます。	顧客組織が属する MSP 組織レベルで設定したブランディングの詳細が表示されます。
いいえ	いいえ	グローバルブランディングの詳細が表示されます。	グローバルブランディングの詳細が表示されます。	グローバルブランディングの詳細が表示されます。

ユーザ グループのブランディング

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザとグループ] の順に選択します。

ステップ 2 [ユーザグループ] タブを選択します。

ステップ 3 ブランディングするグループを選択します。

ステップ 4 [ブランディング] をクリックします。

ステップ 5 [グループブランディング] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

フィールド名	説明
[ロゴイメージ] チェックボックス	ロゴ イメージをアップロードするには、このチェックボックスをオンにします。 ステップ 6 に進みます。
[アプリケーションラベル] チェックボックス	アプリケーション ヘッダーに表示するアプリケーション ラベルをカスタマイズするには、このチェックボックスをオンにします。 ステップ 8 に進みます。
[ログアウト時のURL転送] チェックボックス	ログアウト時に特定の URL に転送するには、このチェックボックスをオンにします。 ステップ 9 に進みます。
[カスタムリンク] チェックボックス	カスタム リンクをブランディングするには、このチェックボックスをオンにします。 ステップ 10 に進みます。

ステップ 6 [アップロードするファイルの選択] フィールドで、ロゴ イメージ ファイルを参照して選択します。

（注） ロゴイメージの形式が JPG、PNG、または GIF であることを確認します。 最適なイメージ サイズは幅 200 ピクセル、高さは 100 ピクセルです。 ダウンロード時間を短縮するため、イメージ サイズを小さくしておくことをお勧めします。

ステップ 7 [アップロード] をクリックします。

ステップ 8 （任意） アプリケーション ラベルとして、[ラベル1] および [ラベル2] フィールドに少なくとも 1 つのアプリケーションのラベルを入力します。

ステップ 9 （任意） [URL] フィールドに、ログアウト時にユーザを転送する URL を入力します。

ステップ 10 （任意） 少なくとも最初の 2 つのフィールドに値を入力してください。

名前	説明
[カスタムリンク1のラベル] フィールド	カスタム リンク 1 のラベル。
[カスタムリンク1のURL] フィールド	カスタム リンク 1 の URL。
[カスタムリンク2のラベル] フィールド	カスタム リンク 2 のラベル。
[カスタムリンク2のURL] フィールド	カスタム リンク 2 の URL。

ステップ 11 [送信] をクリックします。

顧客組織のブランディング

Cisco UCS Director で顧客組織のロゴおよびアプリケーション ラベルをカスタマイズできます。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザとグループ] の順に選択します。

ステップ 2 [顧客組織（Customer Organizations）] タブまたは [MSP組織（MSP Organizations）] タブを選択します。
これらの名前は目安にすぎません。 サービス プロバイダー機能を有効にしている場合は、第1 レベルと第 2 レベルの組織の名前を指定します。 これらの名前は、インターフェイスのタブとして表示されます。 サービス プロバイダー機能を無効にしている場合は、[顧客組織（Customer Organizations）] タブのみが表示されます。

ステップ 3 ブランディングする顧客組織を選択します。

ステップ 4 [ブランディング] をクリックします。

ステップ 5 [グループブランディング] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

フィールド名	説明
[ロゴイメージ] チェックボックス	ロゴ イメージをアップロードするには、このチェックボックスをオンにします。 ステップ 6 に進みます。
[アプリケーションラベル] チェックボックス	アプリケーション ヘッダーに表示するアプリケーションラベルをカスタマイズするには、このチェックボックスをオンにします。 ステップ 8 に進みます。
[ログアウト時のURL転送] チェックボックス	ログアウト時に特定の URL に転送するには、このチェックボックスをオンにします。 ステップ 9 に進みます。
[カスタムリンク] チェックボックス	カスタム リンクをブランディングするには、このチェックボックスをオンにします。 ステップ 10 に進みます。

ステップ 6 [アップロードするファイルの選択] フィールドで、ロゴ イメージ ファイルを参照して選択します。

（注） ロゴイメージの形式がJPG、PNG、またはGIFであることを確認します。 最適なイメージ サイズは幅 200 ピクセル、高さは 100 ピクセルです。 ダウンロード時間を短縮するため、イメージ サイズを小さくしておくことをお勧めします。

ステップ 7 [アップロード] をクリックします。

ステップ 8 （任意） アプリケーション ラベルとして、[ラベル1] および [ラベル2] フィールドに少なくとも 1 つのアプリケーションのラベルを入力します。

ステップ 9 （任意） [URL] フィールドに、ログアウト時にユーザを転送する URL を入力します。

ステップ 10 （任意） 少なくとも最初の 2 つのフィールドに値を入力してください。

名前	説明
[カスタムリンク1のラベル] フィールド	カスタム リンク 1 のラベル。
[カスタムリンク1のURL] フィールド	カスタム リンク 1 の URL。
[カスタムリンク2のラベル] フィールド	カスタム リンク 2 のラベル。
[カスタムリンク2のURL] フィールド	カスタム リンク 2 の URL。

ステップ 11 [送信] をクリックします。

ログイン ページのブランディング

ログイン ページは、ドメイン名に関連付けられているロゴを示すように設定できます。 エンドユーザがそのドメインからログインすると、ログイン ページでそのカスタム ロゴが表示されます。 ロゴの最適なイメージのサイズは幅 890 ピクセル、高さ 470 ピクセルで、余白に 255 ピクセルが割り当てられています。 シスコは、より高速なダウンロードを実現するために、イメージサイズを小さくすることを推奨しています。

（注） グループまたは顧客組織のログイン ページは、最初にブランディングで設定される（有効にされる）必要があります。

カスタム ドメイン ロゴの設定

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザとグループ] の順に選択します。

ステップ 2 [ログインページブランディング] タブを選択します。

ステップ 3 [追加] をクリックします。

ステップ 4 [ドメインブランディング] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[ドメイン名] フィールド	ブランディングするドメイン名。
[アップロードするファイルの選択] フィールド	アップロードするロゴ ファイル。 （注） ロゴの最適なイメージ サイズは、幅 890 ピクセル、高さ 470 ピクセル、余白 255 ピクセルです。 ダウンロード時間を短縮するため、イメージ サイズを小さくしておくことをお勧めします。
[カスタムドメインロゴ] チェックボックス	指定されたドメイン名からのログイン ページ ブランディングを有効にするには、このチェックボックスをオンにします。

ステップ 5 [送信] をクリックします。

第 4 章

システム管理設定の管理

この章は、次の内容で構成されています。

- 送信メール サーバの設定，82 ページ
- 電子メール テンプレートの使用，82 ページ
- システム パラメータの設定（任意），85 ページ
- ライセンスの更新，87 ページ
- ライセンス使用率の確認，88 ページ
- ライセンス使用率履歴の表示，88 ページ
- リソース使用率データの表示，89 ページ
- アプリケーション カテゴリの編集，89 ページ
- ポータルのカスタマイズ，90 ページ
- レポートのカスタマイズ，96 ページ
- 詳細な制御の有効化，97 ページ
- サービス プロバイダー機能の有効化，98 ページ
- ユーザ メニュー，99 ページ
- ユーザ権限の設定，100 ページ
- システムのタスク，100 ページ
- アイコンの管理，105 ページ
- タグ ライブラリ，108 ページ
- サポート情報，114 ページ

送信メール サーバの設定

Cisco UCS Director から送信されるすべての電子メールで、SMTP サーバが必要です。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [システム] の順に選択します。

ステップ 2 [電子メール設定] タブを選択します。

ステップ 3 [電子メール設定] ペインで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[送信電子メールサーバ（SMTP）] フィールド	送信 SMTP サーバのアドレス。
[送信SMTPポート] フィールド	送信 SMTP サーバ ポートの番号。
[送信SMTPユーザ] フィールド	ユーザ ID。
[送信SMTPパスワード] フィールド	ユーザのパスワード。
[アドレス] フィールド	ユーザの電子メール アドレス。
[CloupiaサーバIPアドレス] フィールド	Cisco UCS Director 仮想アプライアンスの IP アドレスまたはDNS名。 このフィールドは、ユーザのワークフロー処理に対して、電子メールで正しいリンクを作成するために使用します。 [テストメールの送信] チェックボックス：現行の電子メール設定をテストするには、このチェックボックスをオンにします。

ステップ 4 [保存] をクリックします。

電子メール テンプレートの使用

Cisco UCS Director には通知メカニズムがあり、VM のプロビジョニングなど、特定のイベントが発生した場合に管理者に送信される電子メールを設定できます。 また、すべてのタスクについて承認が必要な場合には、1 人の管理者、またはグループの管理者へ電子メール通知を送信できます。

（注） 電子メールの通知に対して複数の受信者を指定できます。 カンマを区切り文字として使用して、複数の電子メール アドレスを区切ります。

Cisco UCS Director には、異なるシナリオに対応する、HTML 形式の電子メール テンプレートのセットがあります。 電子メールテンプレートを使用して実行できるタスクには、たとえば次のものがあります。

- 新しい電子メール テンプレートの追加
- 既存の電子メールテンプレートの編集：電子メールテンプレートについて、件名とメッセージの詳細、または書式設定とプレゼンテーションのフィールドを編集できます。 テンプレート内の Java 関連の情報は変更しないでください。
- 電子メールテンプレートのプレビュー：電子メールのコンテンツをプレビュー表示して、電子メール テンプレートをさらに変更するかどうかを判断できます。
- 電子メール テンプレートをデフォルトに設定：デフォルトの電子メール テンプレートに基づいて電子メール通知が送信されるように設定できます。
- 電子メール テンプレートの削除：追加したテンプレートを削除できます。 ただし、次のいずれかの条件にあてはまる場合は、テンプレートを削除することはできません。
  - テンプレートを追加してデフォルトのテンプレートに設定した。
  - システムによって提供されたテンプレートである。

電子メール テンプレートの追加

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [システム] の順に選択します。

ステップ 2 [電子メールテンプレート] タブをクリックします。

ステップ 3 [追加]（+）をクリックします。

ステップ 4 [テンプレートの追加] ダイアログボックスで、次のフィールドに入力します。

名称	説明
[電子メール テンプレート名] フィールド	電子メール テンプレートの名前。
[テンプレートの説明] フィールド	電子メール テンプレートの説明。
[テンプレートのタイプ] ドロップダウン リスト	追加する電子メールテンプレートのタイプを選択します。 このドロップダウン リストには、システムで生成されたテンプレートが表示されます。

名称	説明
[件名（Subject）] フィールド	電子メール テンプレートの件名行。
[デフォルトの件名にリセットします（Reset to Default Subject）] チェック ボックス	このチェック ボックスをオンにすると、入力した件名行が削除され、システムにより提供された件名行が [件名（Subject）] フィールドに読み込まれます。
[本文（Body）] フィールド	電子メールのコンテンツ、フォントのサイズと色、通知トリガーなど、電子メールテンプレートを定義する HTML コード。
[デフォルトの本文にリセットします（Reset to Default Body）] チェック ボックス	このチェックボックスをオンにすると、システムが提供する電子メールテンプレートで使用されている HTML コードが、[スクリプト] フィールドに入力されます。 HTML コードが入力された後で、コードに対する変更を維持するには、このチェックボックスをオフにする必要があります。

ステップ 5 [送信] をクリックします。

次の作業

さらに変更を加えるかどうかを判断するには、電子メール テンプレートをプレビューで表示します。

電子メール テンプレートのプレビュー

Cisco UCS Director で新しい電子メール テンプレートを作成すると、電子メール コンテンツのプレビューを表示して、さらに変更が必要かどうかを判断できます。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [システム] の順に選択します。
ステップ 2 [電子メールテンプレート] タブをクリックします。
ステップ 3 テーブルから電子メール テンプレートを選択します。
ステップ 4 [テンプレートのプレビュー] をクリックします。
ステップ 5 [レポートの起動] ダイアログ ボックスで [送信] をクリックします。

（注） 電子メール テンプレートのプレビュー モードでは、静的な情報だけが表示されます。顧客名などの動的な情報やリソースは表示されません。

次の作業

必要に応じて、電子メール テンプレートに戻ってさらに変更を加えることができます。

デフォルトの電子メール テンプレートの設定

通常は、システム テンプレートがデフォルトの電子メール テンプレートに設定されています。特定のシナリオで複数のテンプレートを追加した場合は、いずれかのテンプレートをデフォルトのテンプレートとして選択できます。 デフォルトとして設定したテンプレートは通知に使用されます。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [システム] の順に選択します。

ステップ 2 [電子メールテンプレート] タブをクリックします。

ステップ 3 テーブルから電子メール テンプレートを選択します。

ステップ 4 [デフォルトの電子メール テンプレートとして設定] をクリックします。

システム パラメータの設定（任意）

システム パラメータの設定

システム パラメータを編集する必要があるのは、デフォルト値を変更する必要がある場合だけです。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [システム] の順に選択します。

ステップ 2 [システムパラメータ] タブを選択します。

ステップ 3 [システム] ペインで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[削除したVMのデータを保持する日数] フィールド	ユーザが定義した、システムでVMデータを保持する日数。

名称	説明
[イベントを保持する日数] フィールド	ユーザが定義した、システムですべてのイベントを保持する日数。 （注） 指定された期間よりも古いイベントは削除されます。
[傾向データを保持する日数] フィールド	ユーザが定義した、システムでインベントリの傾向データまたは履歴データ（CPU、ストレージ、メモリ使用状況など）を保持する日数。 （注） このデータはレポートに使用されます。
[計測データを保持する日数] ドロップダウン リスト	ユーザが定義した、システムでVM計測レコードを保持する日数。 （注） このデータは、VMとリソースに固有です。
[URLからのVMロックコントロールのダウンロード] フィールド	指定された URL からの VM ロック コントロール。 （注） このファイルはXML形式である必要があります。
[通貨] ドロップダウン リスト	使用する通貨の種類を選択します。 使用可能な通貨は、[US]、[EURO]、[GBP]、[KRW]、[CAD]、[CHF]、[CLP]、[NR]、[JPY]、[AUD]、[NZD]、[SGD]、[HKD]、[MYR]、[MXN]、[BRL]、[AED]、[DKK]、[SEK]、[KWD]、[CYN]、[RUB]、[ZAR]、および [その他] です。
[通貨] フィールド	通貨の名前（1 つのみ）を入力します。 （注） このフィールドは、通貨として[その他]が選択されている場合に表示されます。
[通貨の精度（小数点以下の桁数）] ドロップダウン リスト	通貨の小数点以下の精度を選択します。 使用可能な小数点以下の精度は 0 から 5 です。
[資金残高確認間隔（分）] ドロップダウン リスト	資金の残高を確認する間隔を選択します。

ステップ 4 [保存] をクリックします。

インフラストラクチャ システム パラメータの設定（任意）

仮想および物理システムインフラストラクチャリソースのポーリングに関するパラメータを設定できます。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [システム] の順に選択します。

ステップ 2 [インフラストラクチャシステムパラメータ] タブを選択します。

ステップ 3 エントリ ボックスに、システム インフラストラクチャのトレンド データを保持する日数を入力します。 デフォルトは 30 日です。

ステップ 4 [保存] をクリックします。

ライセンスの更新

製品認証キー（PAK）を使用して、ライセンスを更新することができます。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ライセンス] の順に選択します。

ステップ 2 [ライセンスキー] タブを選択します。

ステップ 3 [ライセンスの更新] オプションをクリックします。
[PAK の更新] ダイアログボックスが表示されます。

ステップ 4 [参照] をクリックして PAK ライセンス ファイルにナビゲートし、ファイルを選択します。

ステップ 5 PAK ライセンス ファイルをアップロードするには、[アップロード] をクリックします。

（注） ライセンス ファイルをアップロードしない場合は、チェックボックスをオンにして、ライセンス テキストをライセンス テキスト フィールドにコピー アンド ペーストします。

ステップ 6 [送信] をクリックします。
ライセンスが更新されます。

ライセンス使用率の確認

[ライセンス使用率] ページに、使用中のライセンス、および各ライセンスの詳細（ライセンスの期限、使用可能な数、ステータス、コメントなど）が表示されます。 ライセンスの監査もこのページから実行できます。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ライセンス] の順に選択します。

ステップ 2 [ライセンス使用率] タブを選択します。

ステップ 3 Cisco UCS Director アプライアンスを選択します。

ステップ 4 （任意）ライセンス監査を実行するには、[ライセンス監査の実行] をクリックします。

ステップ 5 [ライセンス監査の実行] ダイアログボックスで、[送信] をクリックします。 このプロセスは、実行に数分かかります。

ライセンス使用率履歴の表示

ネットワーク リソースの利用状況を把握するため、ライセンス取得済みネットワーク コントローラ、ストレージ コントローラ、サーバ、サーバおよびデスクトップ VM、およびスモール ポッドとミディアム ポッドの数を時間の経過に伴い追跡できます。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ライセンス] の順に選択します。

ステップ 2 [ライセンス使用率履歴] タブを選択します。
次のリソース カテゴリのライセンス使用率履歴がタイムスタンプとともに表示されます。

- ネットワーク コントローラ
- ストレージ コントローラ
- サーバ
- サーバ VM
- デスクトップ VM
- スモール ポッド
- ミディアム ポッド

リソース使用率データの表示

ご使用の環境でのリソースの使用状況を確認できます。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ライセンス] の順に選択します。

ステップ 2 [リソース使用率のデータ] タブを選択します。
使用可能なレポート カテゴリを次に示します。

- リソース名：Cisco UCS Director に関連付けられている利用可能なリソースの名前。
- リソース数：利用可能な各リソースの数。

アプリケーション カテゴリの編集

Cisco UCS Director を使用してプロビジョニングされた VM はすべて、そのタイプに基づいて分類されます。 VM タイプは、Web サーバ、データベース、アプリケーション サーバ、またはその他です。 Cisco UCS Director には、検出された VM のための別個のカテゴリもあります。

使用または編集できるアプリケーション カテゴリを以下に示します。

- 検出された VM
- 汎用 VM
- Web サーバ
- アプリケーション サーバ
- データベース
- アプリケーション - CPU 集約型
- アプリケーション - メモリ集約型
- アプリケーション - ディスク集約型
- アプリケーション -ネットワーク集約型
- その他のアプリケーション 1
- その他のアプリケーション 2
- その他のアプリケーション 3

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [システム] の順に選択します。

ステップ 2 [アプリケーションカテゴリ] タブを選択します。

ステップ 3 アプリケーション カテゴリを選択します。

ステップ 4 [編集] をクリックします。

ステップ 5 [カテゴリの編集] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[カテゴリID] フィールド（表示専用）	システムによりカテゴリに割り当てられた数値。
[カテゴリラベル] フィールド	カテゴリ タイプ。
[カテゴリコード] フィールド	VM およびホストの名前。
[説明] フィールド（表示専用）	ポリシーの説明。
[有効になっているカテゴリ] チェックボックス（表示専用）	デフォルトではこのチェックボックスはオンになっています。
[デフォルトのスマート割り当てアルゴリズム] ドロップダウン リスト	アルゴリズムを選択します。

ステップ 6 [送信] をクリックします。

ポータルのカスタマイズ

組織でセルフサービス ポータルをカスタマイズできます。ブランディングおよびユーザインターフェイス関連の変更に対して、ロゴ、ログイン ページ、ホームページなどをカスタマイズできます。

ログイン ページと背景イメージのカスタマイズ

カスタム イメージをアップロードして、ログイン ページと背景イメージを変更できます。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザインターフェイス設定] の順に選択します。

ステップ 2 [ログインページ] をクリックします。

ステップ 3 [カスタマイズ可能なログインページの使用（Use customizable Login page）] チェックボックスをオンにします。

ステップ 4 [ロゴイメージ（Logo Images）] ペインで、[追加（Add）] をクリックして次のフィールドに値を入力します。

フィールド	説明
[イメージラベル（Image Label）] フィールド	イメージの名前。
[説明] フィールド	アップロードするイメージの説明。
[アップロードするファイルの選択] フィールド	イメージ ファイルを検索して選択するには、[参照（Browse）] をクリックします。 **重要** 最適なイメージは、幅 200 ピクセル、高さ 100 ピクセルの PNG 形式です。
[アップロード（Upload）] オプション	イメージをアップロードするには、このオプションをクリックします。 このオプションは、イメージを参照し選択した後にのみ有効になります。
[送信（Submit）] オプション	イメージのアップロード後、[送信（Submit）] をクリックします。

ステップ 5 [背景画像（Background Images）] ペインで、項目を選択するか、[追加（Add）] をクリックして次のフィールドに値を入力します。

フィールド	説明
[イメージラベル（Image Label）] フィールド	イメージの名前。
[説明] フィールド	アップロードするイメージの説明。
[アップロードするファイルの選択（Select a file for Upload）] フィールド	イメージ ファイルを検索して選択するには、[参照（Browse）] をクリックします。 **重要** 最適なイメージは、幅 890 ピクセル、高さ 470 ピクセル、余白 255 ピクセルです。 また、イメージはPNG形式である必要があります。

フィールド	説明
[アップロード（Upload）] オプション	イメージをアップロードするには、このオプションをクリックします。 このオプションは、イメージを参照し選択した後にのみ有効になります。

ステップ 6 [送信] をクリックします。

アプリケーション ロゴのカスタマイズ

カスタムイメージをアップロードしてホームページのアプリケーション ロゴをカスタマイズできます。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザインターフェイス設定] の順に選択します。

ステップ 2 [アプリケーションロゴ] タブを選択します。

ステップ 3 [イメージ（Images）]ペインで、[追加（Add）] をクリックしてリストされていない新規イメージを追加し、次のフィールドに値を入力します。

フィールド	説明
[イメージラベル（Image Label）] フィールド	イメージの名前。
[説明] フィールド	アップロードするイメージの説明。
[アップロードするファイルの選択] フィールド	イメージ ファイルを検索して選択するには、[参照（Browse）] をクリックします。 **重要** サポートされるイメージの形式は、PNG、JPG、および GIF です。 最適なイメージ サイズは幅 100 ピクセル、高さは 50 ピクセルです。
[アップロード（Upload）] オプション	イメージをアップロードするには、このオプションをクリックします。 このオプションは、イメージを参照し選択した後にのみ有効になります。

ステップ 4 [送信] をクリックします。

ファビコンのカスタマイズ

ページがブックマークされている場合に、ブラウザのアドレス バーやそのページ名の横に表示されるお気に入りアイコン（ファビコン）をカスタマイズできます。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザインターフェイス設定] の順に選択します。

ステップ 2 [ファビコン] タブを選択します。

ステップ 3 [イメージラベル（Image Label）]列で、[追加（Add）] をクリックしてリストされていない新規イメージを追加し、次のフィールドに値を入力します。

フィールド	説明
[イメージラベル（Image Label）] フィールド	イメージの名前。
[説明] フィールド	アップロードするイメージの説明。
[アップロードするファイルの選択] フィールド	イメージ ファイルを検索して選択するには、[参照（Browse）] をクリックします。 **重要** サポートされるイメージの形式は PNG です。 最適なイメージ サイズは 16x16 ピクセルです。
[アップロード（Upload）] オプション	イメージをアップロードするには、このオプションをクリックします。 このオプションは、イメージを参照し選択した後にのみ有効になります。

ステップ 4 [送信] をクリックします。

アプリケーション ヘッダーのカスタマイズ

顧客ロゴの横のセルフサービス ポータル ラベルをカスタマイズするには、既存のラベルを変更します。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザインターフェイス設定] の順に選択します。

ステップ 2 [アプリケーションヘッダー] タブを選択します。

ステップ 3 [アプリケーションヘッダー] ペインで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[ヘッダー全体の非表示] チェックボックス	ヘッダーセクションを非表示にするには、このチェックボックスをオンにします。 オンにすると、ロゴイメージ、アプリケーション名、リンク（[ログアウト] など）を含むヘッダーが非表示になります。
[製品名] フィールド	製品名の続き。
[製品名の2行目] フィールド	製品名の続き。
[[バージョン情報]ダイアログの有効化] チェックボックス	ヘッダーで [バージョン情報] リンクを有効にするには、このチェックボックスをオンにします。 ヘッダーで [バージョン情報] リンクを無効にするには、このチェックボックスをオフにします。
[管理者ポータル]	
[カスタムリンク1のラベル] フィールド	管理者ポータルのカスタム リンク 1 のラベル。
[カスタムリンク1のURL] フィールド	管理者ポータルのカスタム リンク 1 の URL。
[カスタムリンク2のラベル] フィールド	管理者ポータルのカスタム リンク 2 のラベル。
[カスタムリンク2のURL] フィールド	管理者ポータルのカスタム リンク 2 の URL。
エンド ユーザ ポータル	
[カスタムリンク1のラベル] フィールド	エンド ユーザ ポータルのカスタム リンク 1 のラベル。
[カスタムリンク1のURL] フィールド	エンド ユーザ ポータルのカスタム リンク 1 の URL。
[カスタムリンク2のラベル] フィールド	エンド ユーザ ポータルのカスタム リンク 2 のラベル。

名称	説明
[カスタムリンク2のURL] フィールド	エンド ユーザ ポータルのカスタム リンク 2 の URL。

ステップ 4 [保存] をクリックします。

日付表示のカスタマイズ

さまざまな日付表示の形式がサポートされています。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザインターフェイス設定] の順に選択します。
ステップ 2 [日付の表示] タブを選択します。
ステップ 3 日付形式を編集します。
ステップ 4 必要に応じて、[タイムゾーンの非表示] をクリックし、タイム ゾーンがユーザ インターフェイスに表示されないようにします。
ステップ 5 [保存] をクリックします。

カラー テーマのカスタマイズ

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザインターフェイス設定] の順に選択します。
ステップ 2 [カラーテーマ] タブを選択します。
ステップ 3 ドロップダウン リストから使用可能なテーマ スタイルを選択します。
ステップ 4 [保存] をクリックします。

ログアウト時のリダイレクト先のカスタマイズ

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザインターフェイス設定] の順に選択します。

ステップ 2 [ログイン時のリダイレクト先] タブを選択します。

ステップ 3 URL を入力します。

ステップ 4 [保存] をクリックします。

レポートのカスタマイズ

レポートのカスタマイズでは、カスタム ラベルを作成したり、使用可能なレポートを非表示にしたりできます。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザインターフェイス設定] の順に選択します。

ステップ 2 [レポートのカスタマイズ] タブを選択します。

ステップ 3 レポートを選択します。

ステップ 4 [編集] をクリックします。

ステップ 5 ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[レポートを非表示] チェックボックス	レポートを非表示にするには、このチェックボックスをオンにします。 レポートを表示するには、このチェックボックスをオフにします。
[新しいラベル] フィールド	レポートの新しいラベル（必要な場合）。

ステップ 6 [保存] をクリックします。

詳細な制御の有効化

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [システム] の順に選択します。

ステップ 2 [詳細な制御] タブを選択します。

ステップ 3 次の手順を実行します。

名称	説明
[パフォーマンスモニタリング（Performance Monitoring）] チェック ボックス	仮想インフラストラクチャのモニタリング、物理インフラストラクチャのモニタリング、および外部クラウドのモニタリングを有効にするには、このチェックボックスをオンにします。 必要に応じて、このカテゴリのチェックボックスをすべてオンにします。
[リソース メーター] チェックボックス	VM メーター機能のモニタリングを有効にするには、このチェックボックスをオンにします。 （注） VM メーター機能が無効になっている場合、チャージバックは作動しません。
[イベントのモニタリング] チェックボックス	仮想および物理インフラストラクチャのイベントを有効にするには、このチェックボックスをオンにします。
[自動サポート（Auto Support）] チェック ボックス	自動サポートを有効にする場合は、このチェック ボックスをオンにします。
[ヒート マップ レポート コンピューティング] チェックボックス	仮想インフラストラクチャのヒート マップ レポートの生成を有効にするには、このチェックボックスをオンにします。
[自動評価] チェックボックス	仮想評価のレポートを生成するには、このチェックボックスをオンにします。

名称	説明
[適応プロビジョニング インデックス] チェックボックス	さまざまなホストパラメータについてホストのロードインデックスを有効にし、4 時間ごとに計算するには、このチェックボックスをオンにします。 これらのインデックスは、カタログの適応プロビジョニングで使用されます。インデックスの数が小さいと、ホストがプロビジョニング対象として選択される可能性が高くなります。このプロセスは、特定の VDC のコンピューティング ポリシーに従って機能します。
[VDCポリシーに基づいて非アクティブなVMを削除（Delete Inactive VMs Based on VDC Policy）] チェック ボックス	管理者が指定した時間が経過した後、VDC の非アクティブな（電源がオフになっている）VM を有効化して削除するには、このチェックボックスをオンにします。このプロパティは、VDC の [非アクティブなVMを削除するまでの期間] フィールドに関連付けられます。 （注） デフォルトでは、このプロパティボックスはオフになっています。
[システム タスクのリモート実行] チェックボックス	管理のためにリモート実行を有効にするには、このチェックボックスをオンにします。

ステップ 4 [送信] をクリックします。

サービス プロバイダー機能の有効化

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [システム] の順に選択します。

ステップ 2 [サービスプロバイダー機能（Service Provider Feature）] タブを選択します。

ステップ 3 次の手順を実行します。

名前	説明
[Enable Service Provider Feature (Requires System Restart)（サービス プロバイダー機能の有効化（システムの再起動が必要））] チェックボックス	Cisco UCS Director でサービス プロバイダーを有効にするには、このチェックボックスをオンにします。
[組織名（第1レベル）（Organization Name (First Level)）] フィールド	この機能を有効にする親組織の名前。
[組織名（第2レベル）（Organization Name (Second Level)）] チェック ボックス	この機能を有効にする子組織の名前。

ステップ 4 [送信] をクリックします。

ユーザ メニュー

個々のユーザ ロールに応じてカスタマイズしたメニュー操作を有効にすることができます。

（注） 使用できるメニュー設定はユーザ権限によって異なります。 たとえば、読み取りおよび書き込み権限が付与されている場合にのみ、メニューの操作を表示したり実行したりできます。

ユーザ メニューの設定

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [システム] の順に選択します。

ステップ 2 [メニュー設定] タブを選択します。

ステップ 3 ドロップダウン リストから、ユーザ ロールを選択します。

ステップ 4 チェックボックスをオン/オフにしてロールに対するメニューの許可を設定するか、[デフォルトにリセット] チェックボックスをオンにします。

ステップ 5 [送信] をクリックします。

ユーザ権限の設定

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [システム] の順に選択します。

ステップ 2 [ユーザの権限] タブを選択します。

ステップ 3 ドロップダウン リストから、ユーザ ロールを選択します。

ステップ 4 [許可されている操作] ダイアログボックスで、選択したユーザ ロールの読み取り/書き込み操作を確認できます。

ステップ 5 チェックボックスをオン/オフにして個々のロールの読み取り/書き込み操作の許可を設定するか、[デフォルトにリセット] チェックボックスをオンにします。

ステップ 6 [送信] をクリックします。

システムのタスク

[システムのタスク（System Tasks）] タブには、現在 Cisco UCS Director で利用可能なすべてのシステム タスクが表示されます。 ただし、このシステム タスクのリストは、Cisco UCS Director で作成したアカウントのタイプにリンクされています。 たとえば、初めてログインした場合は、一連の汎用システム関連のタスクまたは VMware 関連タスクだけがこのページに表示されます。ラック アカウントや Cisco UCS Manager アカウントなどのアカウントを追加した時点から、これらのアカウントに関連するシステムのタスクがこのページに読み込まれます。

以下は、[システムのタスク（System Tasks）] ページから完了できるタスクです。

- 使用可能なシステム タスクの参照：[展開（Expand）] および [折りたたむ（Collapse）] オプションを使用して、このページで使用可能なすべてのシステム タスクを表示できます。 タスクは Cisco UCS Director で使用可能なアカウントに従って分類されます。 例：Cisco UCS タスク、NetApp タスクなど。
- システム タスクの無効化と有効化：アプライアンスで実行しているプロセスまたはタスクが複数ある状況において、システム タスクの無効化を選択することができます。 無効にすると、手動で有効にするまで、システム タスクは実行されません。 これは他のレポートに入力されるデータに影響します。 たとえば、インベントリ収集のシステム タスクを無効にすると、このデータが必要なレポートに正確なデータが表示されない場合があります。 この場合、インベントリ収集プロセスを手動で実行するか、システム タスクを有効にする必要があります。

  詳細については、システム タスクの有効化または無効化, （105 ページ）を参照してください。

サーバが 1 台しかないシングル ノード設定では、すべてのシステム タスクがこのサーバで実行されます。 複数のサーバが設定されているマルチノード設定では、デフォルトですべてのシステム タスクがプライマリ サーバで実行されます。 ただし、セカンダリ サーバで実行するシステム タスクを指定できます。 次は、このタスクを実行する推奨手順です。

1. セカンダリ サーバがノードとして Cisco UCS Director で使用できることを確認します。 サーバが使用できない場合、サーバをノードとして追加する必要があります。 詳細については、サービス ノードの作成, （103 ページ）を参照してください。
2. 使用可能なサーバからノード プールを作成します。 詳細については、ノード プールの作成, （101 ページ）を参照してください。
3. システム タスク ポリシーを作成し、ノード ポリシーと関連付けます。 詳細については、システム タスク ポリシーの作成, （101 ページ）を参照してください。
4. ノードプールをシステム タスク ポリシーと関連付けます。 詳細については、システム タスク ポリシーへのノード プールの割り当て, （102 ページ）を参照してください。
5. システム タスクを選択し、システム タスク ポリシーと関連付けます。 詳細については、システム タスクへのシステム ポリシーの割り当て, （104 ページ）を参照してください。

ノード プールの作成

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [システム] の順に選択します。

ステップ 2 [サービスノード] タブを選択します。

ステップ 3 [サービスノードプール] アイコンをクリックします。 [サービスノードプール] ダイアログボックスが表示されます。

ステップ 4 +（正符号）アイコンをクリックします。 [サービスノードプールにエントリを追加] ダイアログボックスが表示されます。

ステップ 5 [名前] フィールドに、ノード プール名を入力します。

ステップ 6 （任意）[説明] フィールドに、ノード プール名の説明を入力します。

ステップ 7 [送信] をクリックします。 ノード プールが作成されます。

システム タスク ポリシーの作成

複数のシステム タスクを 1 つのシステム タスク ポリシーとしてグループ化して、どのシステム タスクがどのノードで実行されるかを後で決定できます。

（注） 新しいシステム タスク ポリシーは、デフォルトのシステム タスク ポリシーに加えて、1 つ以上のポリシーが必要であると管理者が判断したときに作成されます。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [システム] の順に選択します。

ステップ 2 [システムタスクポリシー] タブを選択します。

ステップ 3 [追加] アイコンをクリックします。 [追加] ダイアログ ボックスが表示されます。

ステップ 4 [名前] フィールドに、システム タスク ポリシーに指定する名前を入力します。

ステップ 5 （任意） [説明] フィールドに、システム タスク ポリシーの説明を入力します。

ステップ 6 [ノードプール] ドロップダウン リストから、このシステム タスク ポリシーが属するノード プールを選択します。

ステップ 7 [送信] をクリックします。 選択したノードプールは、新しく作成されたシステムタスクポリシーに属するようになりました。

システム タスク ポリシーへのノード プールの割り当て

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [システム] の順に選択します。

ステップ 2 [システムタスクポリシー] タブを選択します。

ステップ 3 既存のシステム タスク ポリシーを [名前] 列から選択して、[編集] アイコンをクリックします。 [編集] ダイアログボックスが表示されます。

（注） デフォルトのシステム タスク ポリシーが使用されている場合、このポリシーにサービス ノードを割り当てることができます。 デフォルトとは異なるポリシーを設定する場合は、システム タスク ポリシーの作成, （101 ページ）の項を参照してください。

ステップ 4 このシステム タスク ポリシーが属するノード プールを [ノードプール] ドロップダウン リストから選択します。

ステップ 5 [送信] をクリックします。 選択したノードプールは、このシステムタスクのポリシーに属することになります。

サービス ノードの作成

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [システム] の順に選択します。

ステップ 2 [サービスノード] タブを選択します。

ステップ 3 [追加]（+）ボタンをクリックします。

ステップ 4 [サービスノード] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[ノード名] フィールド	サービス ノードの名前を入力します。
[ロール] フィールド	サービスはこのノードのロールとして記述されます。
[サービスノードプール] ドロップダウン リスト	[default-service-node-pool] が選択されています。
[DNS名] フィールド	サービス ノードの DNS 名または IP アドレスを入力します。 （注） このフィールドには、プライマリ ノードの IP アドレスは使用できません。 有効なサービス ノード DNS 名または IP アドレスが入力されていることを確認します。
[説明] フィールド	サービス ノードの説明。
[プロトコル] ドロップダウン リスト	[http]（デフォルト）または [https] を選択します。
[ポート] フィールド	Hypertext Transfer Protocol（HTTP）のデフォルトの TCP ポートは、デフォルトでは 80 が入力されます。 必要に応じて異なる TCP ポートを入力します。

名称	説明
[ユーザ名] フィールド	デフォルトでは、ユーザ名 infraUser が入力されます。 infraUser は、デフォルトで作成されるユーザ アカウントです。 メニュー バーからこのユーザ アカウントを検索するには、[管理] > [ユーザとグループ] を選択します。 [ログインユーザ] タブを選択し、[ログイン名] 列で infraUser ユーザ アカウントを見つけます。 （注） InfraUser ユーザ名は UCS Director システム自体にログインするデフォルトの管理者ユーザではありません。 別のユーザ名をこのフィールドに追加できます。 サービス ノードでの認証に、このユーザの API キーが使用されます。

ステップ 5 [送信] をクリックします。

システム タスクへのシステム ポリシーの割り当て

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [システム] の順に選択します。

ステップ 2 [システムタスク] タブを選択します。

ステップ 3 システム タスクを含むフォルダを選択します。 フォルダの矢印をクリックして、タスクを展開します。

（注） 128 のシステム タスクが使用可能です。

ステップ 4 タスクを選択し、[タスクの管理] アイコンをクリックします。 [タスクの管理] ダイアログボックスが表示されます。

ステップ 5 [タスク実行] ドロップダウン リストから [有効化] を選択します。

ステップ 6 [システムタスクポリシー] ドロップダウン リストからシステム ポリシーを選択します。

ステップ 7 [送信] をクリックします。 選択したシステム ポリシーにシステム タスクが割り当てられます。

システム タスクの実行

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [システム] の順に選択します。

ステップ 2 [システムタスク] タブを選択します。

ステップ 3 リストからタスクを選択します。

ステップ 4 [今すぐ実行] をクリックします。 選択されたタスクによってその情報が更新されます。

システム タスクの有効化または無効化

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [システム] の順に選択します。

ステップ 2 [システムタスク] タブを選択します。

ステップ 3 システムタスクを含むフォルダを選択します。 フォルダの矢印をクリックして、タスクを展開します。

（注） 128 のシステム タスクが使用可能です。

ステップ 4 タスクを選択し、[タスクの管理] アイコンをクリックします。 [タスクの管理] ダイアログボックスが表示されます。

ステップ 5 システム タスクを無効にするには、[タスクの実行（Task Execution）] ドロップダウンリストから [無効（Disable）] を選択します。

ステップ 6 システム タスクを有効にするには、[タスクの実行（Task Execution）] ドロップダウンリストから [有効（Enable）] を選択します。

ステップ 7 [送信] をクリックします。

アイコンの管理

Cisco UCS Director は、カタログ アイコンのカスタマイズと管理をサポートします。 各アイコンセットには多くのイメージが含まれます。 各アイコンセット内のイメージはカタログ作成フォームで使用できるアイコンに対応しています。

4 組の事前設定されたアイコン セットは次のとおりです。

- コンテナ カタログ アイコン セット
- カタログ フォルダ アイコン セット
- 高度なカタログ アイコン セット
- 標準カタログ アイコン セット
- VDI カタログ アイコン セット

アイコンの追加

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザインターフェイス設定] の順に選択します。

ステップ 2 [アイコン管理] タブを選択します。

ステップ 3 アイコン セット カテゴリを選択します。

ステップ 4 [アイコンイメージ] をクリックします。

ステップ 5 [アイコンイメージの管理（Manage Icon Images）] ダイアログボックスで、[追加（Add）]（+）をクリックします。

ステップ 6 [アイコンイメージへのエントリの追加（Add entry to Icon Images）] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[イメージラベル（Image Label）] フィールド	イメージの新しいラベル。 このラベルは、カタログの作成中にアイコンのドロップダウン リストに表示するために使用されます。
[説明] フィールド	イメージの説明。
[アップロードするファイルの選択（Select a file for Upload）] フィールド	[参照（Browse）] をクリックしてファイルを特定してから、[アップロード（Upload）] をクリックします。

ステップ 7 [送信（Submit）] をクリックします。
イメージが、[アイコンイメージの管理（Manage Icon Images）] ダイアログボックスにリストされます。

ステップ 8 [閉じる（Close）] をクリックします。

次の作業

カタログを作成または変更する際には、このアイコンを選択できます。

アイコンの編集

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザインターフェイス設定] の順に選択します。

ステップ 2 [アイコン管理] タブを選択します。

ステップ 3 アイコンのカテゴリを選択します。

ステップ 4 [アイコンイメージ] をクリックします。

ステップ 5 [アイコンイメージの管理] ウィンドウで、編集するアイコン イメージを選択します。

ステップ 6 [編集]（鉛筆）をクリックします。

ステップ 7 [アイコンイメージエントリの編集] ダイアログボックスで、[説明] を編集します。

ステップ 8 [参照] をクリックしてイメージを参照し、アップロードする代わりのファイルを選択します。

ステップ 9 [アップロード] をクリックします。

ステップ 10 アップロードが終了したら、[送信] をクリックします。

アイコンの削除

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザインターフェイス設定] の順に選択します。

ステップ 2 [アイコン管理] タブを選択します。

ステップ 3 [アイコンイメージの管理] ウィンドウでアイコンのイメージを選択し、[削除] アイコンをクリックします。

ステップ 4 [削除]（X）をクリックします。

アイコンのプレビュー

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザインターフェイス設定] の順に選択します。

ステップ 2 [アイコン管理] タブを選択します。

ステップ 3 [アイコンイメージ] をクリックします。

ステップ 4 [アイコンイメージの管理] ウィンドウで、プレビューするアイコン イメージを選択します。

ステップ 5 [情報] アイコンをクリックしてイメージをプレビューします。

タグ ライブラリ

タグ付けは、オブジェクトにラベルを割り当てるときに行います。 管理者は、Cisco UCS Director のリソース グループやユーザ グループなどのオブジェクトにタグ付けするかどうかを決定できます。 コンピューティング、ストレージ、ネットワーク、仮想などのカテゴリにタグを割り当てることができます。 また、選択したカテゴリのアカウントの特定のタイプにタグを適用することもできます。 リソース グループでのタグの適用と削除の方法については、『*Cisco UCS Director APIC Management Guide, Release 5.1*』のセクション「*Managing Tags of a Resource Group*」を参照してください。

タグが作成されると、定義された適用可能なルールに基づいて、タグがフィルタ処理され、オブジェクト レポートに表示されます。 タグは、リソース グループなどのオブジェクトに関連付けることができます。 タグに関連付けたリソースのエンティティを表示するには、タグを選択し、[詳細の表示] をクリックします。 別の方法として、タグをダブルクリックすることもできます。

（注） リソース エンティティがタグに関連付けられていない場合、テーブルは空になります。

タグの作成

レポート ページで 1 つ以上のオブジェクトに割り当てることができるタグを作成するには、[タグ ライブラリ] タブの [作成] アイコンを使用します。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ポリシー] > [タグ ライブラリ] を選択します。

ステップ 2 [タグ ライブラリ] タブで、[作成] をクリックします。

ステップ 3 [タグの作成] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[名前] フィールド	タグの名前。
[説明] フィールド	タグの説明。
[タイプ] ドロップダウン リスト	タグ タイプとして [整数] または [文字列] を選択します。
[可能なタグ値] フィールド	タグに設定可能な値。

ステップ 4 [次へ] をクリックします。

ステップ 5 [適用可能なルール] 画面で、次のフィールドに入力します。

名称	説明
[エンド ユーザに表示] フィールド	タグがエンドユーザに表示されるようにするには、このチェックボックスをオンにします。

名称	説明
[タグ付け可能なエンティティ] フィールド	タグの適用が必要なエンティティを選択します。 エンティティを追加するには、以下の手順に従ってください。 **1** + アイコンをクリックします。 **2** [カテゴリ] ドロップダウン リストからカテゴリを選択します。 次のいずれかを設定できます。 • Virtual_Compute • Virtual_Storage • Virtual_Network • Physical_Compute • Physical_Storage • Physical_Network • 管理 **3** タグ付け可能なエンティティを選択します。 **4** [送信] をクリックします。 （注） タグは、セットになったタグ付け可能なエンティティに応じてそれぞれのカテゴリの下に表示されます。

ステップ 6 [送信] をクリックします。

タグの編集

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ポリシー] > [タグ ライブラリ] を選択します。

ステップ 2 [タグ ライブラリ] タブで、編集が必要なタグを選択します。

ステップ 3 [編集] をクリックします。

ステップ 4 [タグの編集] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[名前] フィールド	表示のみ。 タグの名前。 追加すると、その名前は変更できません。
[説明] フィールド	タグの説明。
[タイプ] ドロップダウン リスト	表示のみ。 タグのタイプ。
[可能なタグ値] フィールド	表示のみ。 タグに設定可能な値。

ステップ 5 [次へ] をクリックします。

ステップ 6 [適用可能なルール] 画面で、次のフィールドに入力します。

名称	説明
[エンド ユーザに表示] フィールド	タグがエンドユーザに表示されるようにするには、このチェックボックスをオンにします。
[タグ付け可能なエンティティ] フィールド	タグの適用が必要なエンティティを選択します。 編集アイコンを使用して既存のエンティティを変更できます。 エンティティを追加するには、以下の手順に従ってください。 **1** + アイコンをクリックします。 **2** [カテゴリ] ドロップダウン リストからカテゴリを選択します。 この属性の種類は次のとおりです。 • Virtual_Compute • Virtual_Storage • Virtual_Network • Physical_Compute • Physical_Storage • Physical_Network • 管理 **3** タグ付け可能なエンティティを選択します。 **4** [送信] をクリックします。

ステップ 7 [送信] をクリックします。

タグの複製

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ポリシー] > [タグ ライブラリ] を選択します。

ステップ 2 [タグ ライブラリ] タブで、複製が必要なタグを選択します。

ステップ 3 [複製] をクリックします。

ステップ 4 [タグの複製] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[名前] フィールド	タグの名前。
[説明] フィールド	タグの説明。
[タイプ] ドロップダウン リスト	タグ タイプとして [整数] または [文字列] を選択します。
[使用できるタグ値] フィールド	タグに使用できる値。

ステップ 5 [次へ] をクリックします。

ステップ 6 [適用性ルール] 画面で、次のフィールドに入力します。

名称	説明
[エンド ユーザに表示] フィールド	タグがエンドユーザに表示されるようにするには、このチェックボックスをオンにします。

名称	説明
[タグ付け可能なエンティティ] フィールド	タグ付けが必要なエンティティを選択します。 エンティティを追加するには、以下の手順に従ってください。 **1** + アイコンをクリックします。 **2** [カテゴリ] ドロップダウン リストからカテゴリを選択します。 次のいずれかを設定できます。 • Virtual_Compute • Virtual_Storage • Virtual_Network • Physical_Compute • Physical_Storage • Physical_Network • 管理 **3** タグ付け可能なエンティティを選択します。 **4** [送信] をクリックします。

ステップ 7 [送信] をクリックします。

タグの削除

（注） リソースまたはエンティティに関連付けられたタグは削除できません。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ポリシー] > [タグ ライブラリ] を選択します。
ステップ 2 [タグ ライブラリ] タブで、削除する必要のあるタグを選択します。
ステップ 3 [削除] をクリックします。
ステップ 4 [タグ] ダイアログボックスで、[削除] をクリックしてタグの削除を確認します。

サポート情報

Cisco UCS Director サポートは、ライセンス ステータス、データベース テーブル、バージョン、リソース使用状況、ログ、トラブルシューティング用のデバッグ プロセスを含む、基本および高度なシステム情報を提供します。

サポート情報の表示

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [サポート情報] の順に選択します。

ステップ 2 [システム情報] タブを選択します。

ステップ 3 [System Information and Logs Link Page（システム情報およびログ リンク ページ）] リンクをクリックします。 Cisco UCS Director の [Product System Information（製品システム情報）] ウィンドウが表示されます。

システム情報の表示

基本システム情報には、バージョン、稼動時間、サービス ステータス、システム ライセンス ステータス、使用状況、計算アカウント ステータス、計算サーバ ステータス、ストレージ アカウント ステータス、システム カタログ、ネットワーク デバイス ステータス、およびクラウド ステータスが含まれます。

高度なシステム情報には、基本システム情報、データベーステーブルサマリー、製品構成、最上位プロセス情報、およびプロセッサ、メモリ、ディスク、ログ ファイル、ネットワーク、ログインに関する情報が含まれます。 システム タスク ステータス、クラウド インベントリ、およびモニタリング ステータスを表示することもできます。

ログの表示

ドロップダウン リストからログファイルの 1 つを選択できます。 [ログの表示] をクリックすると、ログの最後の数行が表示されます。

ログのダウンロード

[すべてのログのダウンロード] をクリックして、すべてのログ ファイルを Zip 形式でダウンロードできます。

デバッグ ログの開始

デバッグ ログでは、最大で 30 分間のデバッグ ログをログ ファイルに記録できます。

手順

ステップ 1 [デバッグ ログの開始] をクリックします。

ステップ 2 デバッグが完了したら、[デバッグ ログを停止] をクリックします。

ステップ 3 ファイルをダウンロードするには、[HH.MM.SS]（時間）から、[デバッグ ログのダウンロード] をクリックします。

第 5 章

統合設定の管理

この章は、次の内容で構成されています。

- 構成管理データベースの統合，117 ページ
- 計測データのエクスポート，118 ページ
- 変更レコード，119 ページ
- システムログ，119 ページ
- ストレージおよび OVF のアップロード，120 ページ
- 複数言語のサポート，121 ページ

構成管理データベースの統合

構成管理データベース（CMDB）は、システムの変更を追跡および管理するために使用されます。CMDB には通常、仮想マシン（VM）、サービス リクエスト、グループなどのリソースに対する追加、削除、または変更のイベント タイプが表示されます。

CMBD 統合の設定

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [統合] の順に選択します。

ステップ 2 [CMDB統合設定] タブを選択し、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[FTPサーバにエクスポート] チェックボックス	FTP サーバに変更記録をエクスポートするには、このチェックボックスをオンにします。

名称	説明
[エクスポート形式] ドロップダウン リスト	エクスポート形式の種類（CSV または XML）を選択します。
[FTPサーバ] フィールド	FTP サーバのアドレス。
[FTPポート] フィールド	FTP サーバ ポート番号。
[FTPユーザ] フィールド	FTP ユーザ ID。
[FTPパスワード] フィールド	FTP ユーザ パスワード。
[FTPエクスポート頻度] ドロップダウン リスト	変更記録をFTPサーバにエクスポートする頻度を選択します。
[FTPファイル名] フィールド	エクスポートされる変更記録のファイル名。ファイルがターゲットFTPサーバにエクスポートされるたびに、次の変数を使用して新しいファイル名を作成できます。 MONTH、WEEK、DAY、YEAR、HOUR、MIN、SEC、MLLIS 例：XYZ-$DAY-$HOUR-$MIN-$SEC
[FTPのテスト] チェックボックス	FTP の設定をテストするには、このチェックボックスをオンにします。

ステップ 3 [保存] をクリックします。

計測データのエクスポート

計測データのエクスポートを設定することにより、VM リソースの使用率や、リソース アカウンティングの詳細などのトレンド データを、サーバへエクスポートできます。

計測データのエクスポートの設定

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [統合] の順に選択します。

ステップ 2 [計測データのエクスポートの設定] タブを選択し、CMDB の設定に使用されるフィールドに値を入力します。

ステップ 3 [保存] をクリックします。

変更レコード

変更レコードの表示

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [システム] の順に選択します。

ステップ 2 [レコードの変更] タブを選択します。

（注） 最大 1,000 件のレコードを表示できます。

システムログ

システム ログ（syslog）情報を設定されたサーバに転送できます。 各システム メッセージは重大度と最小の重大度レベルに関連付けられます。

システム ログの設定

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [統合] の順に選択します。

ステップ 2 [syslog] タブを選択します。

ステップ 3 [Syslog転送の有効化] チェックボックスをオンにし、次のサーバ フィールドに値を入力します。

フィールド	説明
[Syslog転送の有効化] チェックボックス	syslog を有効にするには、このチェックボックスをオンにします。
[重大度の最小値] ドロップダウン リスト	選択した重大度の最小値よりも重大度が低いシステム メッセージはフィルタリングされて syslog サーバに転送されません。
[プライマリSyslogサーバ]	
[サーバのアドレス] フィールド	プライマリ サーバのアドレス。
[プロトコル] ドロップダウン リスト	プロトコル（UDP または TCP）を選択します。
[ポート] フィールド	ポート番号
[syslogメッセージフォーマット] ドロップダウン リスト	メッセージの形式（XML またはプレーン テキスト）を選択します。
[セカンダリsyslogサーバ]	
[サーバのアドレス] フィールド	セカンダリ サーバのアドレス。
[プロトコル] ドロップダウン リスト	プロトコル（UDP または TCP）を選択します。
[ポート] フィールド	ポート番号
[syslogメッセージフォーマット] ドロップダウン リスト	メッセージの形式（XML またはプレーン テキスト）を選択します。

ステップ 4 [保存] をクリックします。

ストレージおよび OVF のアップロード

管理者、グループ管理者、またはエンドユーザがアップロードしたファイルの保管場所を設定できます。 アップロードされたファイルをローカルに保存するか、または外部 NFS 共有マウントポイントを保存先として設定することができます。 管理者は、ネットワーク ファイル システム（NFS）の場所を設定します。

ファイル アップロード機能を使用して、管理者、グループ管理者、またはエンドユーザ（サービス エンドユーザ ポータル）は、オープン仮想化フォーマット（OVF）ファイルをローカル ストレージまたは外部 NFS 共有マウント ポイントにアップロードすることもできます。 NFS の場所

は、管理者が設定します。 詳細については、OVF ファイル アップロード ガイドを参照してください。

複数言語のサポート

Cisco UCS Director は、複数の言語の同時表示および入力をサポートしています。 すべての入力フィールドで、ユーザが選択した言語でのテキスト入力をサポートしています。

第 6 章

物理インフラストラクチャの管理

この章は、次の内容で構成されています。

- 物理インフラ ストラクチャの管理について，123 ページ
- 接続のテスト，132 ページ
- デバイス検出の有効化，133 ページ

物理インフラ ストラクチャの管理について

Cisco UCS Director を使用すると、物理インフラストラクチャと仮想インフラストラクチャの両方を管理できます。Cisco UCS Director は、新しく作成された物理アカウントのすべてのコンポーネントを検出します。 通常、検出プロセスには約 5 分かかります。 ポッドを追加したり、デフォルト ポッドを使うことができます。 物理アカウントはデフォルト ポッド、または追加したポッドに関連付けることができます。

（注） 最初にいずれかのタイプのインフラストラクチャ（物理または仮想）に追加できます。 Cisco UCS Director の物理アカウントは仮想（クラウド）アカウントに依存しません。

サイトの追加

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [物理アカウント] の順に選択します。

ステップ 2 [サイト管理] タブを選択します。

ステップ 3 [追加]（+）をクリックします。

ステップ 4 [サイトの追加（Add Site）] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[サイト名] フィールド	サイトの記述名。
[説明] フィールド（任意）	サイトの説明（ロケーション、重要性など）。
[連絡先の名前] フィールド	このサイトの担当者の名前。

ステップ 5 [送信] をクリックします。

Pod の追加

手順

ステップ 1 メニューバーで [管理] > [物理アカウント] の順に選択します。

ステップ 2 [POD] タブをクリックします。

ステップ 3 [追加] をクリックします。

ステップ 4 [PODの追加] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[名前] フィールド	Pod の記述名です。
[サイト] ドロップダウン リスト	Podを追加するサイトを選択します。 環境にサイトがない場合は、このステップを省略できます。

名前	説明
[タイプ] ドロップダウン リスト	追加する Pod のタイプを選択します。 次のサポートされたタイプのいずれかを指定できます。 • [FlexPod] • [VersaStack] • [汎用] • [ExpressPodミディアム] • [VSPEX] • [ExpressPodスモール] • [Vblock] 汎用タイプ以外のPodには、特定の物理コンポーネントおよび仮想コンポーネントにのみ対応しています。 汎用ポッドには特定のポッド ライセンスは必要ありません。 また、汎用ポッドには、任意のタイプの物理コンポーネントまたは仮想コンポーネントを追加できます。 Podの実行に必要な個々のデバイス ライセンスを含む、バンドルされた Pod ライセンス（FlexPod、Vblock、VSPEX）の詳細については、『Cisco UCS Director Installation and Upgrade Guides』を参照してください。
[説明] フィールド	（任意）Pod の説明です。
[住所] フィールド	Podの物理ロケーションです。 たとえば、このフィールドにはPodの市区町村、またはその他の内部的な識別子を入力します。
[PODを非表示] チェックボックス	統合チェック ビューにポッドを表示したくない場合に、このチェックボックスをオンにして、ポッドを非表示にします。 Pod からアカウントの追加または削除は引き続き実行できます。 たとえば、このチェックボックスを使用して、物理要素や仮想要素の存在しないポッドが統合ビューに表示されないようにすることができます。

ステップ 5 [追加] をクリックします。

次の作業

Pod にアカウントを 1 つ以上追加します。

物理的なアカウントの追加

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [物理アカウント] の順に選択します。

ステップ 2 [物理アカウント] タブを選択します。

ステップ 3 [追加]（+）をクリックします。

ステップ 4 [アカウントの追加] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[POD] ドロップダウン リスト	物理アカウントが属する Pod を選択します。
[カテゴリ] ドロップダウン リスト	カテゴリ タイプを選択します（[コンピューティング] または [ストレージ]）。 [ストレージ] を選択した場合は、ステップ 6 に進みます。
[アカウントタイプ] ドロップダウン リスト	この物理アカウントのアカウント タイプを次から選択します。 • UCSM • HP ILO • Ciscoラックサーバ(CIMC) • IPMI

ステップ 5 [送信（Submit）] をクリックします。

ステップ 6 [アカウントの追加] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[認証タイプ] ドロップダウン リスト	このアカウントに使用する認証タイプを次から選択します。 • [ローカルで認証済み]：ローカルで認証されたユーザ アカウントとは、ファブリック インターコネクトを介して直接認証されたユーザ アカウントのことであり、管理者権限または AAA（認証、認可、アカウンティング）権限を持っていれば誰でも有効/無効にすることができます。 • [リモートで認証済み]：リモートで認証されたユーザ アカウントとは、LDAP、RADIUS、TACACS+ のいずれかを介して認証されたユーザアカウントのことです。
[サーバ管理] ドロップダウン リスト	次のオプションのうちいずれかを選択して、このアカウントによってサーバを管理する方法を選択します。 • [すべてのサーバ] • [選択済みのサーバ]
[アカウント名] フィールド	追加する物理的なアカウントに割り当てる固有の名前。
[サーバのアドレス] フィールド	サーバの IP アドレス。
[クレデンシャルポリシーの使用（Use Credential Policy）] チェック ボックス	手動で情報を入力する代わりに、このアカウントのクレデンシャル ポリシーを使用する場合は、このチェック ボックスをオンにします。
[クレデンシャルポリシー（Credential Policy）] ドロップダウンリスト	[クレデンシャルポリシーの使用（Use Credential Policy）] チェック ボックスをオンにした場合は、このドロップダウンリストから使用するクレデンシャル ポリシーを選択します。 このフィールドが表示されるのは、クレデンシャル ポリシーの使用を選択した場合のみです。

名称	説明
[ユーザID] フィールド	このアカウントにアクセスするためのユーザ名。 このフィールドは、クレデンシャルポリシーの使用を選択した場合には表示されません。
[パスワード] フィールド	ユーザ名に関連付けられたパスワードです。 このフィールドは、クレデンシャルポリシーの使用を選択した場合には表示されません。
[通信タイプ] ドロップダウン リスト	アカウントで使用する通信タイプを選択します。 次のいずれかになります。 • HTTP • HTTPS このフィールドは、クレデンシャルポリシーの使用を選択した場合には表示されません。
[ポート] フィールド	サーバ ポート番号。 このフィールドは、クレデンシャルポリシーの使用を選択した場合には表示されません。
[説明] フィールド	アカウントの説明。
[連絡先の電子メール] フィールド	アカウントの連絡先の電子メール アドレス。
[ロケーション] フィールド	ロケーション。
[サービスプロバイダー] フィールド	サービス プロバイダーの名前（既存する場合）。

ステップ 7 このアカウントがストレージである場合、適切なアカウント タイプとして、[NetApp ONTAP]、[NetApp OnCommand]、[EMC VNX]、[EMC VMAX Solutions Enabler] または [WHIPTAIL] の中から選択します。

ステップ 8 [追加] をクリックします。

マルチドメイン マネージャ アカウントの追加

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [物理アカウント] の順に選択します。

ステップ 2 [マルチドメインマネージャ] タブを選択します。

ステップ 3 [追加]（+）をクリックします。

ステップ 4 [アカウントの追加] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[アカウント名] フィールド	このマルチドメイン マネージャ アカウントが属するアカウント名を選択します。
[説明] フィールド	（任意）アカウントについての説明。
[アカウントタイプ] ドロップダウン リスト	このマルチドメイン マネージャ アカウントのアカウント タイプを次から選択します。 • PNSC：Cisco Prime ネットワーク サービス コントローラ アカウント。 • UCS Central：Cisco UCS Central アカウント。
[サーバのアドレス] フィールド	マルチドメイン マネージャ アカウントを管理するサーバの IP アドレスを入力します。
[アカウント名] フィールド	追加する物理的なアカウントに割り当てる固有の名前。
[サーバのアドレス] フィールド	サーバの IP アドレス。
[ユーザID] フィールド	このアカウントにアクセスするためのユーザ名。
[パスワード] フィールド	ユーザ名に関連付けられたパスワードです。

名称	説明
[通信タイプ] ドロップダウン リスト	アカウントで使用する通信タイプを選択します。 次のいずれかになります。 • http • https
[ポート] フィールド	サーバポート番号。 デフォルトのポートは443です。
[連絡先の電子メール] フィールド	（任意）アカウントの連絡先電子メールアドレス。
[ロケーション] フィールド	（任意）ロケーション。

ステップ 5 [送信] をクリックします。

ネットワーク要素の追加

ロードバランシングをサポートする仮想サーバを作成するには、最初にCisco UCS Directorにネットワーク要素を追加する必要があります。 F5 ロード バランサをネットワーク要素として Cisco UCS Director に追加すると、[管理対象ネットワーク要素] タブに表示されます。

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [物理アカウント] の順に選択します。

ステップ 2 [管理するネットワーク機器] タブを選択します。

ステップ 3 [ネットワーク機器の追加] をクリックします。

ステップ 4 [ネットワーク機器の追加] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[POD] ドロップダウン リスト	ネットワーク要素が属するポッドを選択します。

名称	説明
[Device Category（デバイス カテゴリ）] ドロップダウン リスト	このネットワーク要素のデバイス カテゴリを選択します。 たとえば [F5 ロード バランサ] を選択します。
[デバイスIP] フィールド	このデバイスの IP アドレス。
[プロトコル] ドロップダウン リスト	使用されるプロトコルを選択します。 リストには次の内容が含まれます。 • telnet • ssh • http • https （注） F5 ロードバランサデバイスを使用する場合、選択できるのは http と https だけです。
[ポート] フィールド	使用するポート番号。
[ログイン] フィールド	ログイン名。
[パスワード] フィールド	ログイン名に関連付けられるパスワード。

ステップ 5 [送信] をクリックします。

F5 ロード バランサを追加すると、システム タスクのインベントリ収集がトリガーされます。 [システムのタスク] タブで設定されるポーリング間隔はインベントリ収集の頻度を指定します。

次の作業

仮想サーバに変更を加えるには、サーバを選択して [変更] ボタンをクリックします。 仮想サーバを削除するには、サーバを選択して [削除] ボタンをクリックします。

DHCP ロギングのイネーブル化

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [物理アカウント] の順に選択します。

ステップ 2 [ネットワークサービスエージェント] タブを選択します。

ステップ 3 [組み込みネットワークサービス] をクリックします。

ステップ 4 [組み込みネットワークサービス] ダイアログボックスで、[DHCPロギングを有効にする] チェックボックスをオンにします。

接続のテスト

管理対象ネットワーク要素および物理的なアカウントに対して接続をテストできます。

管理対象ネットワーク機器の接続テスト

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [物理アカウント] の順に選択します。

ステップ 2 [管理するネットワーク機器] タブを選択します。

ステップ 3 接続をテストするポッドを選択します。

ステップ 4 [テスト接続] をクリックします。

物理アカウントへの接続のテスト

ポッドをアカウントに追加した後は、いつでも接続をテストできます。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [物理アカウント] の順に選択します。

ステップ 2 テストするアカウントタイプに対応するタブをクリックします。
たとえば、[物理アカウント] タブまたは [マルチドメイン マネージャ] タブをクリックします。

ステップ 3 テーブルで、接続のテスト対象となるアカウントの行をクリックします。

ステップ 4 [テスト接続] をクリックします。

ステップ 5 接続テストが完了したら、[閉じる] をクリックします。

次の作業

接続が失敗した場合は、ユーザ名やパスワードを含め、アカウントの構成を検証します。 ユーザ名とパスワードが正しい場合は、ネットワーク接続に問題があるかどうかを確認します。

デバイス検出の有効化

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [物理アカウント] の順に選択します。

ステップ 2 デバイスの検出を検証するアカウントをクリックします。

ステップ 3 [検出されたデバイス（Discovered Devices）] タブを選択します。

ステップ 4 [設定の検出（Setup Discovery）] をクリックします。

ステップ 5 [設定の検出（Setup Discovery）] ダイアログボックスで、[検出を有効にする（Enable Discovery）] チェック ボックスをオンにして検出を有効にします。

ステップ 6 [設定の検出] ダイアログボックスで、[IPアドレス範囲] フィールドに入力し、ご使用の環境で次のフィールドのデフォルト値が適切かどうかを判断します。

名称	説明
[検出を有効にする（Enable Discovery）] チェック ボックス	このチェックボックスは、対象のアカウントに対するデバイス検出を有効にするためにデフォルトでオンになっています。
[IP範囲（IP Range）] フィールド	デバイス検出の IP アドレス範囲。 （例：10.1.1.1-10.1.1.12）
[TCPタイムアウト(ミリ秒単位)（TCP Timeout (ms)）] フィールド	TCP のタイムアウト（ms）（デフォルト値は 2000 ms）。
[SNMPタイムアウト(ミリ秒単位)（SNMP Timeout (ms)）] フィールド	SNMP のタイムアウト（ms）（デフォルト値は 1500 ms）。
[SNMPコミュニティストリング（SNMP Community Strings）] フィールド	SNMP コミュニティ ストリング（デフォルトは [パブリック]）。

ステップ 7 [送信] をクリックします。

第 7 章

仮想インフラストラクチャの管理

この章は、次の内容で構成されています。

- VMware の管理について，135 ページ
- クラウドの検出および接続の確認，138 ページ
- vCenter プラグインの表示，139 ページ

VMware の管理について

Cisco UCS Director は、vCenter（ESX 3.5、ESX/ESXi 4.x および 5.x）で VMware をサポートします。 Cisco UCS Director は自動的にすべての既存の仮想マシン（VM）と新しく追加したクラウドのアカウントのイメージを検出します。 通常、検出プロセスは約 5 分かかります。 VMware クラウドおよび PowerShell エージェントを追加できます。

（注） 「クラウド」という用語は 1 つの vCenter インストール環境を指します。

クラウドの作成

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [仮想アカウント] の順に選択します。

ステップ 2 [仮想アカウント] タブを選択します。

ステップ 3 [追加]（+）をクリックします。

ステップ 4 [クラウドの追加] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[クラウドタイプ] ドロップダウン リスト	[VMware] を選択します。 （注） 次のフィールドは、[VMware] を選択した場合に表示されます。 他のクラウド タイプでは、そのクラウド タイプに固有のフィールドが表示されます。
[クラウド名] フィールド	クラウドの名前。 この名前に一重引用符を含めることはできません。 （注） Cisco UCS Director 内では各クラウドに固有の名前を付ける必要があります。 クラウドの追加後は、すべてのレポートでこのクラウド名によって表されます。
[サーバのアドレス] フィールド	vCenter サーバのアドレス。
[サーバのユーザID] フィールド	vCenter サーバのユーザ名。
[サーバのパスワード] フィールド	vCenter サーバのパスワード。
[サーバアクセスポート] フィールド	サーバ ポート番号。
[VMwareデータセンター] フィールド	vCenter アカウントのデータセンター名。 この名前を使用して、指定されているポッドのリソースを検出、監視、管理できます。 vCenter アカウント全体がCisco UCS Director によって管理される場合は、このフィールドを空白にします。
[サーバアクセスURL] フィールド	サーバ アクセス用の URL。
[説明] フィールド	クラウドの説明。
[連絡先の電子メール] フィールド	クラウドの連絡先の電子メール アドレス。
[ロケーション] フィールド	ロケーション。
[POD] ドロップダウン リスト	コンバージド インフラストラクチャ ポッドを選択します。 ポッドの名前を選択すると、VMware クラウドのアカウントが、コンバージドインフラストラクチャ スタックに表示されます。

名称	説明
[サービスプロバイダー] フィールド	サービス プロバイダーの名前。

ステップ 5 [追加] をクリックします。

Cisco PowerShell エージェント インストーラのダウンロード

PowerShell エージェントは Windows Server 2008 R2 または Windows Server 2012 64 ビット仮想マシンにインストールされます。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [仮想アカウント] の順に選択します。

ステップ 2 [PowerShellエージェント] タブを選択します。

ステップ 3 [インストーラのダウンロード] をクリックします。

ステップ 4 [エージェント インストーラのダウンロード] ダイアログボックスで、示されているインストール要件をシステムが満たしているかどうかを確認します。 要件を満たしている場合は [送信] をクリックします。

ステップ 5 要件を満たしている場合は [送信] をクリックします。
[PSASetup. exe を開く] ダイアログボックスに、実行可能ファイルを保存するよう伝えるメッセージが表示されます。

ステップ 6 [ファイルの保存] をクリックします。
ファイルはシステムのダウンロード ロケーションに保存されます。

ステップ 7 PSASetup. exe ファイルを Windows Server 2008 R2 または Windows Server 2012 64 ビット仮想マシン（VM）にインストールします。

PowerShell エージェントの作成

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [仮想アカウント] の順に選択します。

ステップ 2 [PowerShellエージェント] タブを選択します。

ステップ 3 [追加]（+）をクリックします。

ステップ 4 [エージェントの追加] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[エージェント名（Agent Name）] フィールド	エージェントの名前。
[エージェントアドレス（Agent Address）] フィールド	エージェントのアドレス。
[エージェントのアクセスポート（Agent Access Port）] フィールド	エージェントのアクセス ポート番号。
[アクセスキー（Access Key）] フィールド	アクセス キー。
[説明] フィールド	エージェントの説明。

クラウドの検出および接続の確認

接続のテスト

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [仮想アカウント] の順に選択します。

ステップ 2 [仮想アカウント] タブを選択します。

ステップ 3 テストする VMware アカウントを選択します。

ステップ 4 [接続のテスト] をクリックします。

（注） 1 つ以上のクラウドのアカウントをCisco UCS Directorに追加後、[サマリー] タブを使用してクラウドとそのデータが収集されたことを確認できます。

ステップ 5 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 6 [サマリー] タブを選択します。

（注） 自動検出とデータの入力が完了するまでに数分かかる場合があります。 クラウド名を選択すると、そのステータスの詳細が表示されます。

vCenter プラグインの表示

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [仮想アカウント] の順に選択します。

ステップ 2 [プラグイン] タブを選択します。 このタブには、Cisco UCS Director に追加された vCenter に必要なすべてのプラグインが表示されます。

第 8 章

ポリシーの管理

この章は、次の内容で構成されています。

- ポリシー，141 ページ
- コンピューティング ポリシー，142 ページ
- データ コレクション ポリシー，145 ページ
- グループの共有ポリシーについて，147 ページ
- ストレージ ポリシー，148 ページ
- ネットワーク ポリシー，155 ページ
- システム ポリシー，161 ページ
- エンド ユーザ セルフサービス ポリシーについて，165 ページ

ポリシー

Cisco UCS Director は、管理者が設定する事前定義済みポリシーを使用して、割り当てられたリソース プールから仮想マシン（VM）がプロビジョニングされるセルフサービス ポータルを提供します。

ポリシーは、システム リソースの可用性に基づいて、新しい VM がインフラストラクチャ内でプロビジョニングされる場所と方法を規定する規則のグループです。

Cisco UCS Director では、VM をプロビジョニングするために次のポリシーをセットアップする必要があります。

- コンピューティング
- 格納形式
- ネットワーク
- システム

重要　VMのプロビジョニングのポリシーをセットアップする前にクラウドアカウントが存在している必要があります。

コンピューティング ポリシー

コンピューティング ポリシーは、グループまたはワークロードの要件を満たし、プロビジョニング中に使用されるコンピューティング リソースを決定します。

管理者として、コンピューティング ポリシーのさまざまな条件を組み合わせて高度なポリシーを定義できます。

（注）　条件の組み合わせによっては、セルフ サービス プロビジョニング中にホスト マシンが存在しない状況が発生する可能性があるため、コンピューティング ポリシーのすべてのフィールドについて十分に理解しておくことを推奨します。

コンピューティング ポリシーの作成

手順

ステップ 1　メニュー バーで、[ポリシー] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2　[VMwareコンピューティングポリシー] タブを選択します。

ステップ 3　[追加]（+）をクリックします。

ステップ 4　[コンピューティングポリシーの追加]ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[ポリシー名] フィールド	ポリシーの名前。 （注）　この名前は、カタログの定義で使用されます
[ポリシーの説明] フィールド	ポリシーの説明。
[クラウド名] ドロップダウン リスト	リソース割り当てを行うクラウドを選択します。

名称	説明
[ホストノードまたはクラスタスコープ] ドロップダウン リスト	導入のスコープを選択します。 （注） すべてのオプションを使用するか、選択したオプションを含めるか、または選択したオプションを除外するかを指定して、導入のスコープを絞り込むことができます。 選択した内容に基づいて、必要なホストまたはクラスタを選択できる新しいフィールドが表示されます。
[リソースプール] ドロップダウン リスト	リソース プールを選択します。
[ESXタイプ] ドロップダウン リスト	ESX のインストール タイプ（ESX、ESXi、または両方）を選択します。
[ESXバージョン] ドロップダウン リスト	ESX のバージョンを選択します。
[条件の最小値] チェックボックス	満たしている必要がある 1 つ以上の条件のチェックボックスをオンにします。 これらの条件を満たしていないホストは検討から除外されます。 複数の条件を選択した場合は、選択した条件すべてを満たしている必要があります。
導入オプション	
[テンプレートのオーバーライド] チェックボックス	テンプレートのプロパティをオーバーライドするには、このチェックボックスをオンにします。 CPU とメモリのカスタム設定を入力できるオプションも用意されています。
[vCPU数] フィールド	vCPU のカスタム数。 VM に対して指定する vCPU の数は、選択されているホスト ノードまたはクラスタのスコープの総コア数を超えてはいけません。 （注） このオプションは、[テンプレートのオーバーライド] チェックボックスをオンにした場合に表示されます。
[CPU予約(MHz)] フィールド	VM の CPU 予約。 予約は、指定した vCPU の数によって異なります。 （注） このオプションは、[テンプレートのオーバーライド] チェックボックスをオンにした場合に表示されます。

名称	説明
[CPUの制限(MHz)] フィールド	VM に対する CPU の制限。 CPU の制限は、選択されたホスト ノードまたはクラスタのスコープに基づいています。
[CPU共有] ドロップダウン リスト	CPU 共有（[低]、[ノーマル]、または [高]）を選択します。 CPU 共有により、VM 間で競合が発生した場合に、どの VM が CPU リソースを取得するかが決定します。 （注） このオプションは、[テンプレートのオーバーライド] チェックボックスをオンにした場合に表示されます。
[メモリ] フィールド	VM のカスタム メモリ。 （注） このオプションは、[テンプレートのオーバーライド] チェックボックスをオンにした場合に表示されます。
[メモリ予約(MB)] フィールド	VM のメモリ予約。 予約は、指定したメモリによって異なります。 （注） このオプションは、[テンプレートのオーバーライド] チェックボックスをオンにした場合に表示されます。
[メモリ制限(MB)] フィールド	VM に対するメモリの制限。 メモリの制限は、選択されたホスト ノードまたはクラスタのスコープに基づいています。 （注） このオプションは、[テンプレートのオーバーライド] チェックボックスをオンにした場合に表示されます。
[メモリ共有] ドロップダウン リスト	メモリ共有（[低]、[ノーマル]、または [高]）を選択します。メモリ共有により、VM 間で競合が発生した場合に、どの VM がメモリ リソースを取得するかが決定します。 （注） このオプションは、[テンプレートのオーバーライド] チェックボックスをオンにした場合に表示されます。
サイズ変更オプション	
[VM のサイズ変更を許可] チェックボックス	プロビジョニング前の VM サイズの変更や、既存の VM のサイズの変更を許可するには、このチェックボックスをオンにします。

名称	説明
[vCPU の許容値] フィールド	VM のプロビジョニング中、または既存の VM のサイズの変更中に使用する vCPU の範囲。 8 よりも大きい範囲は、VM のプロビジョニングまたはサイズ変更中に表示されます。 選択したクラウド（vCenter）が 5 以上であり、かつ VM バージョン 8 を使用している場合のみ。 このボックスで指定された値だけが表示されます。 （注） このオプションは、[VM のサイズ変更を許可] チェックボックスをオンにした場合に表示されます。
[メモリの許容値（MB 単位）] フィールド	VM のプロビジョニング中、または既存の VM のサイズの変更中に使用するメモリの範囲。 例：512、768、1024、1536、2048、3072、4096 など。 このボックスで指定された値だけが表示されます。 （注） このオプションは、[VM のサイズ変更を許可] チェックボックスをオンにした場合に表示されます。

ステップ 5 [追加] をクリックします。

データ コレクション ポリシー

データ コレクション ポリシーを作成して、各 VMware アカウントについて vCenter から取得できるパラメータ量を制御することができます。 データ コレクション ポリシーで指定される各パラメータは収集され、Cisco UCS Director の特定のトレンド レポートで使用されます。

（注） VMware は、サポートされている唯一の仮想アカウント タイプです。 VMware アカウントが追加されると、最初にデフォルトで default-data-collection-policy に関連付けられます。

仮想アカウントのデータ コレクション ポリシーの設定

手順

ステップ 1 メニューバーで、[ポリシー]>[仮想/ハイパーバイザポリシー]>[サービスの提供] を選択します。

ステップ 2 [データコレクションポリシー] タブを選択します。

ステップ 3 [追加]（+）をクリックします。

ステップ 4 [追加] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[名前] フィールド	データ コレクション ポリシーの名前。 （注） この名前は、カタログの定義中に使用されます。
[説明] フィールド	ポリシーの説明
[アカウントタイプ] ドロップダウン リスト	VMware 仮想アカウントが選択されます。
[リソース] ウィンドウ	vCenter パラメータを含むデータ収集グループを選択します。たとえば、CPU などです。データ収集グループを編集するには、鉛筆アイコンをクリックします。データ収集を有効または無効にするには、[リソースエントリの編集] ダイアログボックスの [コレクションを有効にする] チェックボックスをオンまたはオフにします。

ステップ 5 [送信] をクリックします。

仮想アカウントのデータ コレクション ポリシーの関連付け

手順

ステップ 1 メニューバーで、[ポリシー]>[仮想/ハイパーバイザポリシー]>[サービスの提供] を選択します。

ステップ 2 [データコレクションポリシーの関連付け] タブを選択します。

ステップ 3 仮想（VMware）アカウントを選択して [編集] をクリックします。

ステップ 4 [編集] ダイアログボックスで、[ポリシー] ドロップダウン リストから、「仮想アカウントのデータ コレクション ポリシーの設定」の項で設定したデータ コレクション ポリシーを選択します。

ステップ 5 [送信] をクリックします。 VMware アカウントにデータ コレクション ポリシーが関連付けられました。

グループの共有ポリシーについて

グループの共有ポリシーによって、ユーザはリソースと、他のユーザと共有するものを高度に制御できるようになります。 このポリシーでは、ユーザは現在自分だけに割り当てられているリソースを表示し、またユーザが属するすべてのグループに割り当てられているリソースを表示できます。

グループを作成する場合は、グループの共有ポリシーを定義して、どのグループが読み取り/書き込み権限を持つかを決定できます。 後にユーザがこのグループに追加されると、リソースに対するそのユーザのアクセス権は、グループに適用されるグループの共有ポリシーによって決定されます。

グループ共有ポリシーの作成

手順

ステップ 1 メニュー バーで [管理] > [グループ共有ポリシー] を選択します。

ステップ 2 [グループ共有ポリシー] タブをクリックします。

ステップ 3 [追加]（+）をクリックします。

ステップ 4 [ポリシーの追加] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[ポリシー名] フィールド	グループ共有ポリシーの名前。
[ポリシーの説明] フィールド	ポリシーの説明。

名前	説明
[MSP グループ共有ポリシー] チェックボックス	1 つ以上の MSP 組織にこのポリシーを適用する場合、このボックスをオンにします。
[MSP 組織] フィールド	[選択] をクリックして、このポリシーで定義されたリソースに対して読み取り/書き込み権限のある MSP 組織を選択します。 このフィールドは [MSP グループ共有ポリシー（MSP Group Share Policy）] チェックボックスがオンの場合のみ使用可能です。
[顧客組織] フィールド	[選択] をクリックして、このポリシーで定義されたリソースに対して読み取り/書き込み権限のある組織を選択します。

ステップ 5 [送信] をクリックします。

次の作業

ユーザ グループを編集してこのグループ共有ポリシーを指定できます。 それらのグループ内のユーザは、権限に基づいて、リソースに対する読み書き権限を継承します。

ストレージ ポリシー

ストレージ ポリシーは、データストアの範囲、使用するストレージの種類、容量、遅延などの最小条件といったリソースを定義します。

ストレージ ポリシーでは、複数ディスクの追加ディスク ポリシーを設定し、サービス リクエストの作成中に使用するデータストアを選択することもできます。

（注） Cisco UCS Director は、VM のプロビジョニングのためのサービス リクエストの作成中にデータストアを選択することをサポートしています。 サービス リクエストの作成中にエンド ユーザのデータストアの選択を有効または無効にするオプションがあります。 リストされるデータストアは、サービス リクエストの作成中に VDC に関連付けられたストレージ ポリシーで指定される範囲条件に依存します。

サービス リクエストの作成中にデータストアの選択機能を使用するには、VM のプロビジョニングに使用されるテンプレートに [システム] ディスク タイプが割り当てられている必要があります。 これは、単一または複数のディスクを含むテンプレートに適用されます。

複数ディスク VM のストレージ ポリシー

Cisco UCS Director は、複数データストア上の複数ディスクでの VM のプロビジョニングをサポートしています。

ディスクはシステム、データ、データベース、スワップ、ログという 5 つのタイプに分類されます。 最初にシステムディスク ポリシーが設定され、他のディスクは必要に応じて設定できます。 各ディスク タイプに対して個別にディスク ポリシーを設定することも、各ディスクに対してデフォルトのシステム ディスク ポリシーを選択することもできます。

（注） 複数のディスクを含むテンプレートに対するストレージ ポリシーの作成の詳細については、「複数ディスクの VM プロビジョニング」の章を参照してください。

ストレージ ポリシーの追加と設定

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ポリシー] > [仮想/ハイパーバイザポリシー] > [ストレージ] を選択します。

ステップ 2 [VMwareストレージポリシー] タブを選択します。

ステップ 3 [追加]（+）をクリックします。

ステップ 4 [ストレージリソース割り当てポリシーの追加] ダイアログボックスで、次のフィールドを入力します。

名称	説明
[ポリシー名] フィールド	リソース割り当てが発生するクラウドを選択します。
[ポリシーの説明] フィールド	導入のスコープを限定する場合は、すべてのデータストア、選択したデータストアのみ、もしくは、選択した以外のデータストアを導入するのかを選択します。
[クラウド名] ドロップダウン リスト	リソース割り当てが発生するクラウドを選択します。
システム ディスク スコープ	

名称	説明
[リンク済み複製の使用] チェックボックス	リンク済み複製を使用するには、チェック ボックスをオンにします。 リンク済み複製かフル複製かは、ストレージポリシーのリンク済み複製の選択によって異なります。
[ストレージプロファイル（Storage Profile）] ドロップダウンリスト	関連付けられたストレージプロファイルを使用してVMをプロビジョニングするにはストレージ プロファイルを選択します。
[データストア/データストアクラスタ範囲（Data Stores/Data Store Clusters Scope）] ドロップダウンリスト	展開の範囲を狭める場合は、すべてを使用するか、選択済みのデータストアを含めるか、選択済みのデータストアを除外するか、選択済みのデータストアクラスタを含めるか、または選択済みのデータストア クラスタを除外するかを選択します。
[選択済みのデータストアクラスタ] フィールド	展開の範囲が狭くなると、ストレージプロファイルに関連付けられたデータストアを選択できます。
[DRSルールタイプ（DRS Rule Type）] ドロップダウンリスト	[選択済みのデータストアクラスタを含める（Include Selected Datastore Clusters）] または [選択済みのデータストアクラスタを除外する（Exclude Selected Datastore Clusters）] が選択されている場合は、DRS ルール タイプを選択します。 次のいずれかにできます。 • [VMDKを同時に維持する（Keep VMDKs Together）]：フィルタリングされたクラスタで既存のルールを選択する必要があります。 新しくプロビジョニングされた VM は VM のアンチアフィニティ ルールに追加されます。 • [VMDKを分ける（Separate VMDKs）]：新しくプロビジョニングされたVMに複数のディスクが含まれている場合、新しいVMアフィニティ ルールはデータストア クラスタで作成されます。

名称	説明
[ルールの選択（Select Rule）] フィールド	[選択済みのデータストアクラスタを含める（Include Selected Datastore Clusters）] または [選択済みのデータストアクラスタを除外する（Exclude Selected Datastore Clusters）] が選択されている場合は、ルールを適用する VM を選択します。
[共有データストアのみの使用（Use Shared Data Store Only）] チェック ボックス	共有データストアのみを使用するには、このチェックボックスをオンにします。
ストレージ オプション	
[ローカルストレージの使用] チェックボックス	ローカル ストレージを使用するには、このチェックボックスをオンにします。 デフォルトでは、このフィールドはオンです。
[NFSの使用] チェックボックス	NFS ストレージを使用するには、このチェックボックスをオンにします。 デフォルトでは、このフィールドはオンです。
[SANの使用] チェックボックス	SAN ストレージを使用するには、このチェックボックスをオンにします。 デフォルトでは、このフィールドはオンです。
[フィルタ条件（Filter Conditions）] チェックボックス	一致する必要がある 1 つ以上の条件を選択してチェックボックスをオンにします。 これらの基準に一致しないすべてのデータストアは、考慮事項から除外されます。 複数の条件を選択する場合、すべての条件が一致する必要があります。
[テンプレートのオーバーライド] チェックボックス	テンプレートのプロパティをオーバーライドするには、このチェックボックスをオンにします。 シン プロビジョニングの使用やカスタム ディスク サイズなど、カスタム設定を入力するオプションが提供されます。

名称	説明
[シンプロビジョニングの使用] チェックボックス	VM ストレージのプロビジョニングの際にシンプロビジョニングを使用するには、このチェックボックスをオンにします。 シンプロビジョニングは、物理ストレージ容量の動的割り当てをイネーブルにし、VMストレージの使用率が向上します。 （注） このオプションは、[テンプレートのオーバーライド] がオンのときに表示されます。
[手動ディスクサイズ（Manual Disk Size）]	カスタムディスク サイズは、VM のプロビジョニングに使用されるテンプレートのディスク サイズをオーバーライドします。 （注） このオプションは、[テンプレートのオーバーライド] がオンのときに表示されます。
VM ライフサイクルのサイズ変更オプション	
[ディスクのサイズ変更を許可（Allow Resizing of Disk）] チェック ボックス	プロビジョニングする前に、VM のディスク サイズを選択するオプションをエンドユーザに表示する場合はチェック ボックスをオンにします。
[ディスクの許容値(GB単位)] フィールド	このオプションは、[All Resizing of Disk（ディスクのサイズ変更を許可）] がオンの場合に表示されます。 VM のプロビジョニング中に選択したディスク サイズ値のカスタム範囲。 たとえば、1、5、10、50、100、500、1024、5120、10240 などです。
[スコープからのデータストアの選択をユーザに許可します] チェックボックス	エンドユーザにサービス要求の作成中にデータストアを選択するよう求めるオプションを提供するには、このチェックボックスをオンにします。

ステップ 5 [次へ] をクリックします。

ステップ 6 [追加のディスクポリシー] ペインで、設定するディスク タイプを選択します。

ステップ 7 ディスク タイプを編集するには、[編集]（鉛筆）をクリックします。

（注） デフォルトでは、ディスクのディスク ポリシーは、[システムディスクポリシー] と同じです。

ステップ 8 ディスク ポリシーを設定するには、[ポリシー項目の編集] ダイアログボックスで、[システムディスクポリシーと同じ] チェックボックスをオフにします。

ステップ 9 [送信] をクリックします。

ステップ 10 [エントリの編集] ダイアログボックスで、追加のディスク ポリシーを設定します。

ステップ 11 [送信] をクリックします。

（注） 追加ディスク ポリシーを使用して作成されるストレージポリシーを使用するには、VM のプロビジョニングに使用される VDC とポリシーを関連付ける必要があります。

設定された追加ディスク ポリシーをポリシーで使用する場合は、複数ディスク テンプレートのカタログ作成中に、[単一データストアのすべてのディスクをプロビジョニングします（Provision all disks in a single database）] チェック ボックスを必ずオフにしてください。 カタログの作成方法の詳細については、カタログの管理, （187 ページ）を参照してください。

仮想ストレージ カタログ

ストレージ ポリシーをカスタマイズするために仮想ストレージ カタログを使用できます。 仮想ストレージ カタログを使用して、複数のストレージ ポリシーを選択し、カスタム ストレージのエントリ名を指定できます。

ストレージ カタログは、カタログの作成中にそれを有効化することにより、カタログにマッピングします。 カタログを使用してサービス要求を出すとき、[ストレージ階層] を選択することができます。

仮想ストレージ カタログの設定

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ポリシー] > [仮想/ハイパーバイザポリシー] > [ストレージ] を選択します。

ステップ 2 [仮想ストレージのカタログ] タブを選択します。

ステップ 3 [追加]（+）をクリックします。

ステップ 4 [仮想ストレージのカタログ] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[カタログ名] フィールド	カタログの名前。 この名前は、カタログ カスタム アクションの定義中に使用されます。

名称	説明
[カタログの説明] フィールド	カタログの説明。
[クラウド名] ドロップダウン リスト	クラウド アカウントを選択します。
[エントリ数の選択] ドロップダウン リスト	エントリ数を選択します。 指定できる範囲は 1 ～ 10 です。 選択した内容に応じて、次のダイアログボックスにストレージエントリ オプションが表示されます。

ステップ 5 [次へ] をクリックします。

ステップ 6 [エントリの追加] ペインで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[ストレージ エントリ #1]	
[ストレージエントリ名] フィールド	ストレージ エントリの名前。
[ストレージポリシー] ドロップダウン リスト	ストレージ ポリシーを選択します。
[ストレージ エントリ #2]	
[ストレージエントリ名] フィールド	2 番目のポリシーのストレージ エントリ名。
[ストレージポリシー] ドロップダウン リスト	ストレージ ポリシーを選択します。

ステップ 7 [送信] をクリックします。

次の作業

- カタログの作成中に仮想ストレージ カタログをマッピングできます。
  「カタログの管理」の項を参照してください。
- サービス リクエストの作成中にストレージ階層オプションを表示できます。
  「セルフサービス プロビジョニングの使用法」を参照してください。

ネットワーク ポリシー

ネットワーク ポリシーには、ネットワーク設定、DHCP、スタティック IP などのリソースが含まれ、このポリシーを使用してプロビジョニングされた VM に対して複数の vNIC を追加するためのオプションが含まれています。

スタティック IP プール ポリシーの追加

ネットワーク ポリシーで使用できるスタティック IP プール ポリシーを設定できます。（オプション）

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ポリシー] > [仮想/ハイパーバイザポリシー] > [ネットワーク] を選択します。

ステップ 2 [スタティックIPプールポリシー] タブを選択します。

ステップ 3 [追加]（+）をクリックします。

ステップ 4 [静的IPプールポリシー情報] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[ポリシー名] フィールド	ネットワーク ポリシーの名前。
[ポリシーの説明] フィールド	ポリシーの説明。

ステップ 5 [静的IPプール] セクションの [追加（+）] をクリックして、複数スタティック IP プールを追加して設定します。

ステップ 6 [静的IPプールへのエントリの追加] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[静的IPプール] フィールド	スタティック IP プール。 例：10.5.0.1 - 10.5.0.50、10.5.0.100、10.5.1.20 -10.5.1.70
[サブネットマスク] フィールド	プールのサブネット マスク。 255.255.255.0 などです。
[ゲートウェイIPアドレス] フィールド	ネットワーク内のデフォルト ゲートウェイの IP アドレス。

ステップ 7 [送信] をクリックします。

ステップ 8 [スタティックIPポリシー情報] ダイアログボックスで [送信] をクリックします。

ネットワーク ポリシーの追加

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ポリシー] > [仮想/ハイパーバイザポリシー] > [ネットワーク] の順に選択します。

ステップ 2 [VMwareネットワークポリシー] タブを選択します。

ステップ 3 [追加]（+）をクリックします。

ステップ 4 [ネットワークポリシーの情報] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[ポリシー名] フィールド	ネットワーク ポリシーの名前。
[ポリシーの説明] フィールド	ネットワーク ポリシーの説明。
[クラウド名] ドロップダウン リスト	ポリシーが適用されるクラウドアカウントを選択します。
[エンドユーザにオプションのNICの選択を許可] チェックボックス	サービス リクエストの導入設定の作成中にvNICを選択できるようにするには、このチェックボックスをオンにします。

ステップ 5 複数の vNIC を追加して設定するには、[VMネットワーク] セクションで [追加]（+）をクリックします。 これらの vNIC は、このポリシーを使用してプロビジョニングされる VM に適用できます。

（注） VM アクションを使用してプロビジョニングまたは検出された VM の vNIC を追加または交換するには、vNIC を設定する必要があります。

ステップ 6 [VMネットワークへのエントリの追加] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[NICエイリアス] フィールド	新しい NIC の名前。

名称	説明
[必須] チェックボックス	[ネットワークポリシー] ダイアログボックスの [エンドユーザにオプションのNICの選択を許可] チェックボックスがオンの場合、このチェックボックスはあらかじめ選択されています。[ネットワークポリシー] ダイアログボックスが選択されておらず、かつこのチェックボックスがオンでない場合は、[NICエイリアス] フィールドはオプションです。 （注） 少なくとも 1 つの NIC で [必須] オプションが選択されている必要があります。 [必須] フィールドが選択されている NIC は VM のプロビジョニングで使用されます。VM サービス リクエストの作成中にはユーザのオプションはありません。
[エンドユーザによるポートグループ選択を許可] チェックボックス	プロビジョニング中にエンド ユーザがポートグループを選択できるようにするには、このチェックボックスをオンにします。
[テンプレートからアダプタをコピーする] チェックボックス	カスタム設定が不要な場合は、このチェックボックスをオンにします。 カスタム設定の場合はオフにします。
[アダプタのタイプ] ドロップダウン リスト	アダプタ タイプを選択します。 テンプレートで使用可能なアダプタ タイプと同じタイプがユーザに必要な場合は、このオプションをオンにします。 （注） [テンプレートからアダプタをコピーする] オプションが選択されている場合は、このオプションは表示されません。

ステップ 7 [ポートグループ] セクションで、[追加]（+）をクリックします。 [ポートグループへのエントリの追加] ダイアログボックスが表示されます。

ステップ 8 [選択] をクリックして、ポート グループ名を選択します。

ステップ 9 [IPアドレスのタイプの選択] ドロップダウン フィールドで、[DHCP]（デフォルト）または [固定] を選択します。

a) [固定] を選択すると、[エントリの追加] ダイアログボックスが表示されます。 [IP プール ポリシー]（デフォルト）または [インライン IP プール] を選択します。

[IP プール ポリシー] を選択した場合は、[スタティック IP プールを選択する] をクリックします。 [選択] ダイアログボックスで、事前設定されたスタティック IP プールのリストから選択します。 事前設定されたスタティック IP プールが存在しない場合、詳細については「スタティック IP ポリシーの追加」を参照してください。

b) [インライン IP プール] を選択する場合は、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[静的IPプール] フィールド	スタティック IP プール。 10.5.0.1 - 10.5.0.50、10.5.0.100、10.5.1.20-10.5.1.70 などです。
[サブネットマスク] フィールド	プールのサブネット マスク。 255.255.255.0 などです。
[ゲートウェイIPアドレス] フィールド	このネットワークのデフォルト ゲートウェイの IP アドレス。

ステップ 10 [送信] をクリックします。

ステップ 11 [VMネットワークへのエントリの追加] ダイアログボックスで、[送信] をクリックします。

ステップ 12 [ネットワークポリシーの情報] ダイアログボックスで、[送信] をクリックします。

ネットワーキング プロビジョニング ポリシー

ネットワーク プロビジョニング ポリシーは、オーケストレーション ワークフローのタスクで使用されます。 このポリシーは、レイヤ 2 のネットワーク設定、およびネットワーク内のスイッチに対するアクセス コントロール リスト（ACL）を定義します。

ネットワーク プロビジョニング ポリシーの設定

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ポリシー] > [仮想/ハイパーバイザポリシー] > [ネットワーク] を選択します。

ステップ 2 [ネットワークプロビジョニングポリシー] タブを選択します。

ステップ 3 [追加] をクリックします。

ステップ 4 [ポリシーの追加] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
一般情報	

名称	説明
[ポリシー名] フィールド	ポリシーの名前。
[ポリシーの説明] フィールド	ポリシーの説明。
[L2ネットワーク設定（VLAN）]	
[プライベートVLANの使用] チェックボックス	オンにすると、次のフィールドにデータが自動的に取り込まれます。 • [プライベートVLANタイプ]：コミュニティ • [プライマリVLAN ID]：0 • [セカンダリVLANの範囲 - 開始ID]：500 • [セカンダリVLANの範囲 - 終了ID]：1000
[VLAN範囲 - 開始ID] フィールド	VLAN の範囲の開始 ID。 500 はデフォルトの範囲開始 ID です。
[VLAN範囲 - 終了ID] フィールド	VLAN の範囲の終了 ID。 1000 はデフォルトの範囲終了 ID です。
[基本プロファイル名] フィールド	VLAN ベース プロファイル名。 1 つ以上のネストされたプロファイル割り当てを含むプロファイルです。
アクセス コントロール リスト	
[ACLタイプ] ドロップダウン リスト	[シンプル] が現時点のデフォルトであり、唯一のオプションです。 ICMP を VLAN で許可する場合は、このチェックボックスをオンにします。

名称	説明
[TCPポートへの着信トラフィックを許可]フィールド	[選択] ボタンをクリックします。 [項目の選択] ダイアログボックスが表示されます。 使用可能なオプションは次のとおりです。 • FTP • SSH • Telnet • SMTP • POP3 • HTTP • HTTPS • MySQL 選択するオプションの横のチェックボックスをオンにするか、または[すべてオン]ボタンをクリックします。 以前の入力をクリアするには、[すべてオフ] ボタンをクリックします。
[UDPポートへの着信トラフィックを許可] フィールド	[選択] ボタンをクリックします。 [項目の選択] ダイアログボックスが表示されます。 使用可能なオプションは次のとおりです。 • SNMP • Syslog 選択するオプションの横のチェックボックスをオンにするか、または[すべてオン]ボタンをクリックします。 以前の入力をクリアするには、[すべてオフ] ボタンをクリックします。

ステップ 5 [送信] をクリックします。

VLAN プール ポリシー

VLANプールポリシーはポッドに対するVLANの範囲を定義します。 このポリシーは、ポリシーで指定された定義済み範囲からフリーの VLAN ID を生成するためにオーケストレーション ワークフローで使用されます。

VLAN プール ポリシーの設定

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ポリシー] > [仮想/ハイパーバイザポリシー] > [ネットワーク] を選択します。

ステップ 2 [VLANプールポリシー] タブを選択します。

ステップ 3 [追加]（+）をクリックします。

ステップ 4 [ポリシーの追加] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[POD] ドロップダウン リスト	ポッドを選択します。
[ポリシー名] フィールド	ポリシー名。 このポリシー名はオーケストレーション ワークフローで使用されます。
[ポリシーの説明] フィールド	ポリシーの説明。
[VLAN範囲] フィールド	VLAN の範囲。 たとえば、1,3,5—15 などです。

ステップ 5 [送信] をクリックします。

システム ポリシー

システム ポリシーは、使用するテンプレート、タイム ゾーン、OS 情報など、システムに固有の情報を定義します。

システム ポリシーの設定

手順

ステップ 1 メニューバーで、[ポリシー]>[仮想/ハイパーバイザポリシー]>[サービスの提供] を選択します。

ステップ 2 [VMWareシステムポリシー] タブを選択します。

ステップ 3 [追加]（+）をクリックします。

ステップ 4 [システム ポリシー情報] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[ポリシー名] フィールド	ポリシーの名前。 この名前は、カタログの定義中に使用されます。
[ポリシーの説明] フィールド	ポリシーの説明。
[VM名のテンプレート] フィールド	使用する VM 名テンプレート。 Cisco UCS Director は VM 名の自動作成を可能にします。 VM名は、一連の変数名を使用して自動的に作成できます。 各変数は ${VARIABLE_NAME} のようにかっこで囲む必要があります。 例：vm-${GROUP_NAME}-SR${SR_ID}

ステップ 5 次に示すオプションの [VM名のテンプレート] 機能から選択します。

名称	説明
[エンドユーザVM名のプレフィクス] チェックボックス	VM プロビジョニングのためのサービス リクエストの作成中にユーザが VM 名プレフィクスを追加できるようにするには、このチェックボックスをオンにします。
[導入後に電源をオンにします] チェックボックス	このポリシーを使用して導入されたすべての VM の電源を自動的にオンにするには、このチェックボックスをオンにします。
[ホスト名のテンプレート] フィールド	一連の変数名を使用して自動的に作成できる VM ホスト名。 各変数は **${VARIABLE}** のようにかっこで囲む必要があります。

ステップ 6 [ホスト名のテンプレート] の変数名を選択します。 例：${VMNAME}

ステップ 7 次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[DNSドメイン] フィールド	VM に使用する IP ドメイン。
[Linuxタイムゾーン] ドロップダウン リスト	時間帯を選択します。
[DNSサフィックスリスト] フィールド	DNS ルックアップ用に設定する DNS サフィックス。 複数のサフィックスがある場合は、それぞれをカンマで区切ります。

名称	説明
[DNSサーバリスト] フィールド	DNS サーバの IP アドレスのリスト。 複数のサーバを区切るには、カンマを使用します。
[VMイメージのタイプ] ドロップダウン リスト	VM にインストールされているイメージの OS を選択します。 [WindowsおよびLinux] を選択するか、または[Linuxのみ] を選択します。
Windows	
[製品ID] フィールド	Windows 製品 ID またはライセンス キー。 製品 IDまたはライセンス キーはここに入力するか、または OS ラインセンス プールで入力できます。 OS ライセンス プールで入力したキーは、ここで入力するキーよりも優先されます。
[ライセンス所有者名] フィールド	Windows ライセンスの所有者名。
[組織] フィールド	VM で設定する組織名。
[ライセンスモード] ドロップダウン リスト	[シート別] または [サーバ別] を選択します。
[ライセンスユーザ数]	ライセンス ユーザまたは接続の数。
[WINSサーバリスト] フィールド	WINS サーバの IP アドレス。 複数の値はカンマで区切ります。
[自動ログイン] チェックボックス	自動ログインを有効にするには、このチェックボックスをオンにします。
[自動ログイン回数] フィールド	自動ログインの実行回数。
[管理者パスワード] フィールド	管理者アカウントのパスワード。
[ドメインまたはワークグループ] ドロップダウン リスト	[ドメイン] または [ワークグループ] を選択します。
[ワークグループ] フィールド	ワークグループの名前。 このオプションは、[ワークグループ] が [ドメインまたはワークグループ] ドロップダウン リストの値として選択されている場合に、表示されます。

名称	説明
[ドメイン] フィールド	Windows ドメインの名前。 （注） このオプションは、[ドメイン] が [ドメインまたはワークグループ] ドロップダウン リストの値として選択されている場合に、表示されます。
[ドメインユーザ名] フィールド	Windows ドメイン管理者のユーザ名。 （注） このオプションは、[ドメイン] が [ドメインまたはワークグループ] ドロップダウン リストの値として選択されている場合に、表示されます。
[ドメインパスワード] フィールド	Windows ドメイン管理者のパスワード （注） このオプションは、[ドメイン] が [ドメインまたはワークグループ] ドロップダウン リストの値として選択されている場合に、表示されます。
[Windowsタイムゾーン] ドロップダウン リスト	時間帯を選択します。
[VMアノテーションの定義] チェックボックス	VM のアノテーションを指定するには、このチェックボックスをオンにします。 アノテーションの一部としてメモおよびカスタム属性を指定できます。このチェックボックスをオンにした場合は、次のフィールドに値を入力します。 • [VMの注記] フィールド VM の説明を入力します。 • カスタム属性 [名前]、[タイプ]、および [値] を指定するには、[追加]（+）をクリックします。 （注） VM の注記として追加した情報は、[VM の詳細] ページでその VM に対して表示されます。

ステップ 8 [追加] をクリックします。

OS ライセンス

Cisco UCS Director は、ユーザが Windows OS ライセンスを追加するためのオプションを提供しています。 これらのライセンスは、カタログの作成時に Windows イメージにマッピングされます。 VMware システム ポリシーで Windows イメージに対して Windows OS ライセンスを提供する、またはカタログの作成時に OS バージョン フィールドからキーを選択する、というオプションがあります。

OS ライセンスの追加

手順

ステップ 1 メニューバーで、[ポリシー]>[仮想/ハイパーバイザポリシー]>[サービスの提供] を選択します。

ステップ 2 [OSライセンス] タブを選択します。

ステップ 3 [追加]（+）をクリックします。

ステップ 4 [ライセンスの詳細の追加] ページで、次のフィールドを入力します。

名称	説明
[Windowsのバージョン名] フィールド	Windows バージョン名。
[ライセンス] フィールド	Windows 製品 ID またはライセンス キー。 このフィールドは、KMS クライアント セットアップ キーを受け入れます。
[ライセンスの所有者名] フィールド	Windows ライセンスの所有者名。
[組織] フィールド	VM で設定する組織名。
[ライセンスモード] ドロップダウン リスト	シート単位またはサーバ単位を選択します。
[ライセンス取得済みのユーザ数] フィールド	ライセンス ユーザまたは接続の数。

ステップ 5 [送信] をクリックします。

エンド ユーザ セルフサービス ポリシーについて

エンド ユーザ セルフサービス ポリシーは、ユーザが vDC で実行できるアクションまたはタスクを制御します。 このポリシーを作成するには、最初にたとえば VMware などのアカウント タイプ

を指定します。 アカウント タイプを指定したら、続いてポリシーを作成します。 ポリシーを作成したら、同じアカウントタイプを使用して作成したvDCに、そのポリシーを割り当てる必要があります。 たとえば VMware 用のエンド ユーザ ポリシーを作成した場合は、VMware vDC を作成する場合にこのポリシーを指定できます。 他のアカウントタイプ用に作成したポリシーを表示したり割り当てたりすることはできません。

Cisco UCS Director では、エンド ユーザ セルフサービス ポリシーの作成に加えて、次のタスクを実行できます。

- [表示] — ポリシーの概要を表示します。
- [編集] — [エンド ユーザ ポリシー] ダイアログ ボックスが開き、説明またはエンド ユーザ セルフサービス オプションを変更できます。
- [複製] — [エンド ユーザ ポリシー] ダイアログ ボックスが開き、別のポリシーで指定したオプションを使用して新しくポリシーを作成できます。
- [削除] — システムからポリシーを削除します。 ただし、このポリシーに vDC を割り当てる必要はありません。

重要 vDC へのポリシーの割り当ては、ユーザが vDC で実行するタスクを制御できる唯一の方法です。 従来のバージョンでは、vDC の作成中にタスクを有効または無効にしていました。 最新リリースにアップグレードすると、以前に設定していた権限とオプションが vDC の名前を使用してエンド ユーザ ポリシーとして自動的にグループ化され、vDC に割り当てられます。

エンド ユーザ ポリシーの作成

手順

ステップ 1 メニューバーで、[ポリシー]>[仮想/ハイパーバイザポリシー]>[サービスの提供] を選択します。

ステップ 2 [エンド ユーザ セルフサービス ポリシー] タブを選択します。

ステップ 3 [追加]（+）をクリックします。

ステップ 4 [エンド ユーザ ポリシーの追加] ダイアログ ボックスで、ドロップダウン リストからアカウント タイプを選択します。

ステップ 5 [送信] をクリックします。

ステップ 6 [エンド ユーザ ポリシー] ダイアログボックスで、次のフィールドに入力します。

名称	説明
[ポリシー名] フィールド	ポリシーの名前。
[ポリシーの説明] フィールド	ポリシーの説明。

名称	説明
[エンド ユーザ セルフサービス オプション] フィールド	このポリシーによって割り当てられている vDC でユーザが実行できるタスクを選択します。 タスクのリストは、[アカウント タイプ] によって異なります。

ステップ 7 [送信] をクリックします。

次の作業

このエンド ユーザ ポリシーを vDC に割り当てます。 詳細については、仮想データセンターの追加, （170 ページ）を参照してください。

第 9 章

仮想データセンターの管理

この章は、次の内容で構成されています。

- 仮想データセンターの管理について，169 ページ
- VDC アクション，170 ページ
- 仮想データセンター サービス プロファイル，182 ページ

仮想データセンターの管理について

仮想データセンター（VDC）は、仮想リソース、動作の詳細、ルール、およびポリシーを組み合わせて特定のグループの要件を管理する環境です。

1 つのグループまたは組織で複数の VDC、イメージ、テンプレート、およびポリシーを管理できます。 組織は個々のグループに VDC レベルでクォータを割り当て、リソース制限を割り当てることができます。

また、VDC に固有の承認者を定義できます。 VDC の承認者は、ユーザからの VM プロビジョニングの要求を承認する必要があります。

（注） Cisco UCS Director にはデフォルトの VDC があり、検出されたすべての VM は、このデフォルト VDC の一部です。 検出された VM は Cisco UCS Director の外部で作成された VM か、または Cisco UCS Director がインストールされる前に vCenter ですでに作成されていた VM です。 Cisco UCS Director はこのような VM を自動的に検出し、デフォルト VDC に追加します。

サービス要求を使用してプロビジョニングされた VM は VDC に関連付けることができます。 サービス要求を作成するとき、この VM をプロビジョニングする VDC を選択できます。 VM のプロビジョニング時には、特定のグループで利用可能な VDC のリストを表示し、必要な VDC を選択できます。

VDC アクション

仮想データセンターの追加

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ポリシー] > [仮想/ハイパーバイザポリシー] > [仮想データセンター] を選択します。

ステップ 2 [VDC] タブを選択します。

ステップ 3 [追加]（+）をクリックします。

ステップ 4 [VDC の追加] ダイアログ ボックスで、ドロップダウン リストからアカウント タイプを選択します。
選択したアカウント タイプによって、[VDC の追加] ダイアログ ボックスに表示されるクラウド名のリストが決定されます。

ステップ 5 [送信] をクリックします。

ステップ 6 [VDCの追加] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[VDC名] フィールド	VDC の名前。 名前は、入力した後では編集できません。
[ロック済みのvDC] チェックボックス	今後の導入で VDC を使用できないようにするには、このチェックボックスをオンにします。この VDC 内の既存の VM に対するアクションは無効になります。 今後の導入で VDC を使用できるようにするには、このチェックボックスをオフにします。
[vDCの説明] フィールド	VDC に固有の説明。
[顧客組織（Customer Organizations）] ドロップダウンリスト	[選択（Select）] をクリックして、VDC がセットアップされているグループを選択します。
[顧客組織の追加（Add Customer Organization）] ボタン	新しい顧客組織を追加するには、このボタンをクリックします。
[クラウド名] ドロップダウン リスト	VDC の設定対象クラウドを選択します。 このドロップダウン リストに表示されるオプションは、指定したアカウントタイプによって決定されます。

名称	説明
承認者と連絡先	
[第1レベル承認者（First Level Approver(s)）] フィールド	第1レベルでサービスリクエストを承認する必要があるユーザ。 [選択（Select）]をクリックして、該当するユーザのチェック ボックスをオンにします。 複数のユーザを選択できます。
[第2レベル承認者（Second Level Approver(s)）] フィールド	第2レベルでサービスリクエストを承認する必要があるユーザ。 [選択（Select）]をクリックして、該当するユーザのチェック ボックスをオンにします。 複数のユーザを選択できます。
[すべてのユーザからの承認が必要（Approval Required from all users）] チェック ボックス	第1レベルおよび第2レベルの承認担当者として選択されたすべてのユーザからの承認を必要とする場合は、このチェックボックスをオンにします。
[承認依頼通知の数（Number of Approval Requests Reminders）] フィールド	サービスリクエストを承認するよう通知する電子メールを承認担当者に送信する回数。 デフォルトでは、サービスリクエストが承認または拒否されるまで、24時間ごとに1回通知電子メールを送信します。
[通知間隔（時間）（Reminder Interval (Hours)）] フィールド	承認担当者に通知電子メールを送信する時間間隔。 デフォルトでは、24時間ごとに1回通知電子メールを送信します。
[プロバイダーのサポート用電子メールアドレス] フィールド	連絡先またはユーザの電子メール アドレス。この VDC を使用した VM のプロビジョニングに関する通知を受信するユーザ。
[電子メールアドレスへの通知をコピー] フィールド	この VDC に関する通知をコピーする2番目の連絡先の電子メール。
ポリシー	
[システムポリシー] ドロップダウン リスト	VDC に適用できるシステム ポリシーを選択します。

名称	説明
[コンピューティングポリシー] ドロップダウンリスト	VDCに適用できるコンピューティング ポリシーを選択します。
[ネットワークポリシー] ドロップダウン リスト	VDC に適用できるネットワーク ポリシーを選択します。
[ストレージポリシー] ドロップダウン リスト	VDC に適用できるストレージ ポリシーを選択します。
[ISOイメージマッピングポリシー（ISO Image Mapping Policy）] ドロップダウンリスト	VDC に適用する ISO イメージのマッピング ポリシーを選択します。
[コストモデル] ドロップダウン リスト	VDCに適用できるコストモデルを選択します。
[サービスリクエストサマリーと電子メールページへのコストの表示を無効化] チェックボックス	この VDC の SR サマリーと電子メール ページでのコストの表示を無効にするには、このチェックボックスをオンにします。
[ユーザアクションポリシー] ドロップダウン リスト	VMのプロビジョニング後のオーケストレーション ワークフローを実行するために使用するポリシーを選択します。 選択されたワークフローは、VDC 内の VM に対するアクション ボタンとして表示されます。
[ストレージの効率性の有効化] チェックボックス	RCU を使用して VM を複製する場合は、チェックボックスをオンにします。 このオプションを使用できるのは一部の vDC タイプのみです。
[非アクティブなVMを削除するまでの期間] ドロップダウン リスト	非アクティブな VM を削除するまでの、非アクティブな状態の経過日数を選択します。 非アクティブ状態の VM とは、電源がオンの状態ではない VM です。 （注） この選択項目が想定どおりに機能するためには、[管理] > [システム] で [高度なコントロール] タブの下にある [VDC ポリシーに基づいて非アクティブな VM を削除する] チェックボックスがオンになっていることを確認します。 詳細については、「高度なコントロールの有効化」を参照してください。

名称	説明
エンド ユーザ セルフサービス ポリシー	vDC のセルフサービス ポリシーを選択します。このポリシーによって、VDC で実行できるタスクまたはアクションが定義されます。 （注） このドロップダウン リストには、作成する VDC に対応するアカウント タイプに関連するポリシーが表示されます。 vDC へのポリシーの割り当ては、ユーザが vDC で実行するタスクを制御できる唯一の方法です。 従来のバージョンでは、vDC の作成中にタスクを有効または無効にしていました。 最新リリースにアップグレードすると、以前に設定していた権限とオプションが vDC の名前を使用してエンド ユーザ ポリシーとして自動的にグループ化され、vDC に割り当てられます。

ステップ 7 [追加] をクリックします。

（注） VM のユーザは、次のタスクを実行できなくなりました。

- VM の移行
- スタック ビューの使用
- VM の割り当て

仮想データセンターの表示

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ポリシー] > [仮想/ハイパーバイザポリシー] > [仮想データセンター] を選択します。

ステップ 2 [すべてのユーザグループ]ペインで、表示する VDC が含まれている VDC グループを選択します。

ステップ 3 [VDC] タブを選択します。

ステップ 4 メインの表示ペインで、表示する VDC を選択します。

ステップ 5 [表示] をクリックして、[VDCの詳細] ページを開きます。

仮想データセンターの編集

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ポリシー] > [仮想/ハイパーバイザポリシー] > [仮想データセンター] を選択します。

ステップ 2 [すべてのユーザグループ] ペインで、編集する必要のある VDC グループを選択します。

ステップ 3 [VDC] タブを選択します。

ステップ 4 [編集] をクリックします。

ステップ 5 [vDC の編集] ダイアログボックスで、次のフィールドを編集します。

名称	説明
[VDC名] フィールド	VDC の名前。 名前は、入力した後では編集できません。
[ロック済みのvDC] チェックボックス	今後の導入で VDC を使用できないようにするには、このチェックボックスをオンにします。この VDC 内の既存の VM に対するアクションは無効になります。 今後の導入で VDC を使用できるようにするには、このチェックボックスをオフにします。
[vDCの説明] フィールド	VDC に固有の説明。
[顧客組織（Customer Organizations）] ドロップダウンリスト	[選択（Select）] をクリックして、VDC がセットアップされているグループを選択します。
[顧客組織の追加（Add Customer Organization）] ボタン	新しい顧客組織を追加するには、このボタンをクリックします。
[クラウド名] ドロップダウン リスト	VDC の設定対象クラウドを選択します。 このドロップダウン リストに表示されるオプションは、指定したアカウントタイプによって決定されます。

名称	説明
承認者と連絡先	
[第1レベル承認者（First Level Approver(s)）] フィールド	第1レベルでサービスリクエストを承認する必要があるユーザ。 [選択（Select）]をクリックして、該当するユーザのチェック ボックスをオンにします。 複数のユーザを選択できます。
[第2レベル承認者（Second Level Approver(s)）] フィールド	第2レベルでサービスリクエストを承認する必要があるユーザ。 [選択（Select）]をクリックして、該当するユーザのチェック ボックスをオンにします。 複数のユーザを選択できます。
[すべてのユーザからの承認が必要（Approval Required from all users）] チェック ボックス	第1レベルおよび第2レベルの承認担当者として選択されたすべてのユーザからの承認を必要とする場合は、このチェックボックスをオンにします。
[承認依頼通知の数（Number of Approval Requests Reminders）] フィールド	サービスリクエストを承認するよう通知する電子メールを承認担当者に送信する回数。 デフォルトでは、サービスリクエストが承認または拒否されるまで、24時間ごとに1回通知電子メールを送信します。
[通知間隔（時間）（Reminder Interval (Hours)）] フィールド	承認担当者に通知電子メールを送信する時間間隔。 デフォルトでは、24時間ごとに1回通知電子メールを送信します。
[プロバイダーのサポート用電子メールアドレス] フィールド	連絡先またはユーザの電子メール アドレス。この VDC を使用した VM のプロビジョニングに関する通知を受信するユーザ。
[電子メールアドレスへの通知をコピー] フィールド	この VDC に関する通知をコピーする2番目の連絡先の電子メール。
ポリシー	
[システムポリシー] ドロップダウン リスト	VDC に適用できるシステム ポリシーを選択します。

名称	説明
[コンピューティングポリシー] ドロップダウンリスト	VDCに適用できるコンピューティング ポリシーを選択します。
[ネットワークポリシー] ドロップダウン リスト	VDC に適用できるネットワーク ポリシーを選択します。
[ストレージポリシー] ドロップダウン リスト	VDC に適用できるストレージ ポリシーを選択します。
[ISOイメージマッピングポリシー（ISO Image Mapping Policy）] ドロップダウンリスト	VDC に適用する ISO イメージのマッピング ポリシーを選択します。
[コストモデル] ドロップダウン リスト	VDCに適用できるコストモデルを選択します。
[サービスリクエストサマリーと電子メールページへのコストの表示を無効化] チェックボックス	この VDC の SR サマリーと電子メール ページでのコストの表示を無効にするには、このチェックボックスをオンにします。
[ユーザアクションポリシー] ドロップダウン リスト	VMのプロビジョニング後のオーケストレーション ワークフローを実行するために使用するポリシーを選択します。 選択されたワークフローは、VDC 内の VM に対するアクション ボタンとして表示されます。
[ストレージの効率性の有効化] チェックボックス	RCU を使用して VM を複製する場合は、チェックボックスをオンにします。 このオプションを使用できるのは一部の vDC タイプのみです。
[非アクティブなVMを削除するまでの期間] ドロップダウン リスト	非アクティブな VM を削除するまでの、非アクティブな状態の経過日数を選択します。 非アクティブ状態の VM とは、電源がオンの状態ではない VM です。 （注） この選択項目が想定どおりに機能するためには、[管理] > [システム] で [高度なコントロール] タブの下にある [VDC ポリシーに基づいて非アクティブな VM を削除する] チェックボックスがオンになっていることを確認します。 詳細については、「高度なコントロールの有効化」を参照してください。

名称	説明
エンド ユーザ セルフサービス ポリシー	vDC のセルフサービス ポリシーを選択します。このポリシーによって、VDC で実行できるタスクまたはアクションが定義されます。 （注） このドロップダウン リストには、作成する VDC に対応するアカウント タイプに関連するポリシーが表示されます。 vDC へのポリシーの割り当ては、ユーザが vDC で実行するタスクを制御できる唯一の方法です。 従来のバージョンでは、vDC の作成中にタスクを有効または無効にしていました。 最新リリースにアップグレードすると、以前に設定していた権限とオプションが vDC の名前を使用してエンド ユーザ ポリシーとして自動的にグループ化され、vDC に割り当てられます。

ステップ 6 [保存] をクリックします。

仮想データセンターの削除

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ポリシー] > [仮想/ハイパーバイザポリシー] > [仮想データセンター] を選択します。

ステップ 2 [すべてのユーザグループ] ペインで、削除する必要のある VDC グループを選択します。

ステップ 3 [VDC] タブを選択します。

ステップ 4 メインの表示ペインで、削除する VDC を選択します。

ステップ 5 [削除] をクリックします。

仮想データセンターの複製

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ポリシー] > [仮想/ハイパーバイザポリシー] > [仮想データセンター] を選択します。

ステップ 2 [すべてのユーザグループ] ペインで、複製する必要がある VDC グループを選択します。

ステップ 3 [VDC] タブを選択します。

ステップ 4 メインの表示ペインで、複製する VDC を選択します。

ステップ 5 [複製] をクリックします。

ステップ 6 [VDCの複製] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[VDC名] フィールド	VDC の名前。 名前は、入力した後では編集できません。
[ロック済みのvDC] チェックボックス	今後の導入で VDC を使用できないようにするには、このチェックボックスをオンにします。この VDC 内の既存の VM に対するアクションは無効になります。 今後の導入で VDC を使用できるようにするには、このチェックボックスをオフにします。
[vDCの説明] フィールド	VDC に固有の説明。
[顧客組織（Customer Organizations）] ドロップダウンリスト	[選択（Select）] をクリックして、VDC がセットアップされているグループを選択します。
[顧客組織の追加（Add Customer Organization）] ボタン	新しい顧客組織を追加するには、このボタンをクリックします。
[クラウド名] ドロップダウン リスト	VDC の設定対象クラウドを選択します。 このドロップダウン リストに表示されるオプションは、指定したアカウントタイプによって決定されます。
承認者と連絡先	

名称	説明
[第1レベル承認者（First Level Approver(s)）] フィールド	第1レベルでサービスリクエストを承認する必要があるユーザ。 [選択（Select）]をクリックして、該当するユーザのチェック ボックスをオンにします。 複数のユーザを選択できます。
[第2レベル承認者（Second Level Approver(s)）] フィールド	第2レベルでサービスリクエストを承認する必要があるユーザ。 [選択（Select）]をクリックして、該当するユーザのチェック ボックスをオンにします。 複数のユーザを選択できます。
[すべてのユーザからの承認が必要（Approval Required from all users）] チェック ボックス	第1レベルおよび第2レベルの承認担当者として選択されたすべてのユーザからの承認を必要とする場合は、このチェックボックスをオンにします。
[承認依頼通知の数（Number of Approval Requests Reminders）] フィールド	サービスリクエストを承認するよう通知する電子メールを承認担当者に送信する回数。 デフォルトでは、サービスリクエストが承認または拒否されるまで、24時間ごとに1回通知電子メールを送信します。
[通知間隔（時間）（Reminder Interval (Hours)）] フィールド	承認担当者に通知電子メールを送信する時間間隔。 デフォルトでは、24時間ごとに1回通知電子メールを送信します。
[プロバイダーのサポート用電子メールアドレス] フィールド	連絡先またはユーザの電子メール アドレス。この VDC を使用した VM のプロビジョニングに関する通知を受信するユーザ。
[電子メールアドレスへの通知をコピー] フィールド	この VDC に関する通知をコピーする2番目の連絡先の電子メール。
ポリシー	
[システムポリシー] ドロップダウン リスト	VDC に適用できるシステム ポリシーを選択します。
[コンピューティングポリシー] ドロップダウン リスト	VDC に適用できるコンピューティングポリシーを選択します。

名称	説明
[ネットワークポリシー] ドロップダウン リスト	VDC に適用できるネットワーク ポリシーを選択します。
[ストレージポリシー] ドロップダウン リスト	VDC に適用できるストレージ ポリシーを選択します。
[ISOイメージマッピングポリシー（ISO Image Mapping Policy）] ドロップダウンリスト	VDC に適用する ISO イメージのマッピング ポリシーを選択します。
[コストモデル] ドロップダウン リスト	VDCに適用できるコストモデルを選択します。
[サービスリクエストサマリーと電子メールページへのコストの表示を無効化] チェックボックス	この VDC の SR サマリーと電子メール ページでのコストの表示を無効にするには、このチェックボックスをオンにします。
[ユーザアクションポリシー] ドロップダウン リスト	VMのプロビジョニング後のオーケストレーション ワークフローを実行するために使用するポリシーを選択します。 選択されたワークフローは、VDC 内の VM に対するアクション ボタンとして表示されます。
[ストレージの効率性の有効化] チェックボックス	RCU を使用して VM を複製する場合は、チェックボックスをオンにします。 このオプションを使用できるのは一部の vDC タイプのみです。
[非アクティブなVMを削除するまでの期間] ドロップダウン リスト	非アクティブな VM を削除するまでの、非アクティブな状態の経過日数を選択します。 非アクティブ状態の VM とは、電源がオンの状態ではない VM です。 （注） この選択項目が想定どおりに機能するためには、[管理] > [システム] で [高度なコントロール] タブの下にある [VDC ポリシーに基づいて非アクティブな VM を削除する] チェックボックスがオンになっていることを確認します。 詳細については、「高度なコントロールの有効化」を参照してください。

名称	説明
エンド ユーザ セルフサービス ポリシー	vDC のセルフサービス ポリシーを選択します。このポリシーによって、VDC で実行できるタスクまたはアクションが定義されます。 （注） このドロップダウン リストには、作成する VDC に対応するアカウント タイプに関連するポリシーが表示されます。 vDC へのポリシーの割り当ては、ユーザが vDC で実行するタスクを制御できる唯一の方法です。 従来のバージョンでは、vDC の作成中にタスクを有効または無効にしていました。 最新リリースにアップグレードすると、以前に設定していた権限とオプションが vDC の名前を使用してエンド ユーザ ポリシーとして自動的にグループ化され、vDC に割り当てられます。

ステップ 7 [保存] をクリックします。

仮想データセンターのアプリケーション カテゴリの管理

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ポリシー] > [仮想/ハイパーバイザポリシー] > [仮想データセンター] を選択します。

ステップ 2 [すべてのユーザグループ] ペインで、VDC が含まれている VDC グループを選択します。

ステップ 3 [VDC] タブを選択します。

ステップ 4 メインの表示ペインで、編集する VDC を選択します。

ステップ 5 [カテゴリの管理] をクリックします。

ステップ 6 [アプリケーションカテゴリの編集] ダイアログボックスで、システム ポリシー、コンピューティング ポリシー、ネットワーク ポリシー、またはストレージ ポリシーをオプションで変更するために該当するフィールドをすべて編集します。 コストモデルとスマート割り当てポリシーも変更できます。

ステップ 7 [保存] をクリックします。

仮想データセンター サービス プロファイル

この機能は VDC の追加に似ていますが、[VDCサービスプロファイル] で作成される VDC はオーケストレーション ワークフローの中で使用されます。 この機能を使用すると、ワークフロー タスク中の VDC 作成時に使用可能な、ゴールド、シルバー、およびブロンズ VDC を作成できます。

仮想データセンター サービス プロファイルの追加

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ポリシー] > [仮想/ハイパーバイザポリシー] > [仮想データセンター] を選択します。

ステップ 2 [vDCサービスプロファイル] タブを選択します。

ステップ 3 [追加]（+）をクリックします。

ステップ 4 [vDCサービスプロファイルの追加] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[vDCプロファイル名] フィールド	VDC プロファイルの名前。 名前は、入力した後では編集できません。
[ロック済みのvDC] チェックボックス	今後の導入で VDC を使用できないようにするには、このチェックボックスをオンにします。 この VDC 内の既存の VM に対するアクションは無効になります。 今後の導入で VDC を使用できるようにするには、このチェックボックスをオフにします。
[vDCの説明] フィールド	VDC に固有の説明。
[グループ] ドロップダウン リスト	VDC の設定対象グループを選択します。
[クラウド名] ドロップダウン リスト	VDC の設定対象クラウドを選択します。
承認者と連絡先	

名称	説明
[第1承認者のユーザ名] フィールド	第1レベルでサービスリクエストを承認する必要があるユーザ。 [選択（Select）]をクリックして、該当するユーザのチェック ボックスをオンにします。 複数のユーザを選択できます。
[第2承認担当者のユーザ名] フィールド	第2レベルでサービスリクエストを承認する必要があるユーザ。 [選択（Select）]をクリックして、該当するユーザのチェック ボックスをオンにします。 複数のユーザを選択できます。
[すべてのユーザからの承認が必要（Approval Required from all users）] チェック ボックス	第1レベルおよび第2レベルの承認担当者として選択されたすべてのユーザからの承認を必要とする場合は、このチェック ボックスをオンにします。
[承認依頼通知の数（Number of Approval Requests Reminders）] フィールド	サービスリクエストを承認するよう通知する電子メールを承認担当者に送信する回数。 デフォルトでは、サービスリクエストが承認または拒否されるまで、24時間ごとに1回通知電子メールを送信します。
[通知間隔（時間）（Reminder Interval (Hours)）] フィールド	承認担当者に通知電子メールを送信する時間間隔。 デフォルトでは、24時間ごとに1回通知電子メールを送信します。
[プロバイダーのサポート用電子メールアドレス] フィールド	連絡先またはユーザの電子メール アドレス。この VDC を使用した VM のプロビジョニングに関する通知を受信するユーザ。
[電子メールアドレスへの通知をコピー] フィールド	この VDC に関する通知をコピーする2番目の連絡先の電子メール。
ポリシー	
[システムポリシー] ドロップダウン リスト	VDC サービス プロファイルに適用できるシステム ポリシーを選択します。
[コンピューティングポリシー] ドロップダウン リスト	VDC サービス プロファイルに適用できるコンピューティング ポリシーを選択します。

名称	説明
[ネットワークポリシー] ドロップダウン リスト	VDC サービス プロファイルに適用できるネットワーク ポリシーを選択します。
[ストレージポリシー] ドロップダウン リスト	VDC サービス プロファイルに適用できるストレージ ポリシーを選択します。
[コストモデル] ドロップダウン リスト	VDC サービス プロファイルに適用できるコスト モデルを選択します。
[サービスリクエストサマリーと電子メールページへのコストの表示を無効化] チェックボックス	この VDC のサービス リクエスト サマリーと電子メール ページでのコストの表示を無効にするには、このチェックボックスをオンにします。
[ユーザアクションポリシー] ドロップダウン リスト	VMのプロビジョニング後のオーケストレーション ワークフローを実行するために使用するポリシーを選択します。 選択されたワークフローは、VDC 内の VM に対するアクション ボタンとして表示されます。
エンド ユーザ セルフサービス オプション	
[VMの電力管理] チェックボックス	この VDC に属している VM に対してすべての VM 電源管理アクションを実行できるようにするには、このチェックボックスをオンにします。
[VM のサイズ変更] チェックボックス	この VDC に属している VM に対して VM サイズ変更アクションを実行できるようにするには、このチェックボックスをオンにします。
[VMスナップショット管理] チェックボックス	この VDC の VM に対してすべてのストレージ スナップショット アクションを実行できるようにするには、このチェックボックスをオンにします。
[VMの削除] チェックボックス	この VDC の VM に対して VM 削除アクションを実行できるようにするには、このチェックボックスをオンにします。
[VMディスク管理] チェックボックス	この VDC の VM に対して VM ディスク管理を実行できるようにするには、このチェックボックスをオンにします。

名称	説明
[VMネットワーク管理] チェックボックス	このVDCに属しているVMに対してネットワーク管理を実行できるようにするには、このチェックボックスをオンにします。
[非アクティブなVMを削除するまでの期間] ドロップダウン リスト	非アクティブなVMを削除するまでの、非アクティブな状態の経過日数を選択します。非アクティブ状態のVMとは、電源がオンの状態ではないVMです。

ステップ 5 [追加] をクリックします。

第 10 章

カタログの管理

この章は、次の内容で構成されています。

- カタログ管理について，187 ページ
- カタログの公開，188 ページ
- 詳細カタログの公開について，194 ページ
- 詳細カタログの公開，195 ページ
- カタログの表示，197 ページ
- カタログの編集，197 ページ
- フォルダ内のカタログの並べ替え，203 ページ
- カタログの複製，204 ページ
- カタログの削除，204 ページ
- 展開するホストへのアクセス，205 ページ
- カタログ フォルダの並べ替え，206 ページ

カタログ管理について

事前定義されたカタログ項目を使用して仮想マシン（VM）のセルフプロビジョニングができます。 カタログは、システム管理者またはエンドユーザによって作成されます。 これは、VM がバインドされたクラウド名やグループ名などのパラメータを定義します。

カタログ管理に役立つものとして、Cisco UCS Director ではフォルダ内の類似カタログをグループ化できます。 カタログの作成時に、以前に作成された特定のフォルダを選択できます。 オプションで、そのカタログ用に新しいフォルダを作成できます。 フォルダはカタログが含まれている場合にのみ表示されます。

[カタログ] ページの [フォルダの管理] オプションでは、次のタスクを実行できます。

- フォルダの編集：ユーザが作成したフォルダの名前またはすべてのフォルダのフォルダアイコンを変更します。 デフォルト フォルダの名前は変更できません。
- フォルダの削除：Cisco UCS Director からフォルダを削除します。 このフォルダにカタログが含まれていると、これらのカタログはカタログ タイプに基づいてデフォルトで使用可能なフォルダに自動的に移動されます。

  デフォルトで使用可能なフォルダは削除できません。
- フォルダのリストの並び替え：フォルダが [カタログ] ページに表示される順序を変更します。 デフォルトでは、フォルダはアルファベット順に表示されます。

次のフォルダはデフォルトで使用可能であり、それらを編集または削除できません。

- 標準
- 詳細
- サービスコンテナ
- VDI

重要 Cisco UCS Director を最新バージョンにアップグレードした場合は、以前のバージョンで作成されたすべてのカタログはカタログ タイプに基づいて、使用可能なフォルダにデフォルトでグループ化されます。

カタログの公開

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ポリシー] > [カタログ] の順に選択します。

ステップ 2 [カタログ] タブを選択します。

ステップ 3 [追加]（+）をクリックします。

ステップ 4 [カタログの追加] ダイアログボックスで、追加するカタログ タイプを選択します。

ステップ 5 [送信] をクリックします。

ステップ 6 [カタログの作成] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[基本情報] ペイン	
[カタログ名] フィールド	カタログの名前。 （注） カタログを作成した後では、名前は変更できません。

名前	説明
[カタログの説明] フィールド	カタログの説明。
[カタログタイプ] ドロップダウン リスト	カタログのタイプ。 この属性の種類は次のとおりです。 • [標準]：クラウドリストにあるイメージを使用してVMプロビジョニングのためのカタログを作成する場合に使用します。 • [詳細]：カタログ項目などのオーケストレーション ワークフローを公開する場合に使用します。 • [サービスコンテナ]：カタログ項目としてアプリケーション コンテナを公開する場合に使用します。 • [VDI]：カタログ項目として Xen Desktop を公開する場合に使用します。
[カタログアイコン] ドロップダウン リスト	このカタログに関連付けるイメージのアイコンをリストから選択します。 このアイコンは、このカタログを使用してサービスリクエストを作成するときに表示されます。
[すべてのグループに適用] チェックボックス	すべてのグループがこのカタログを使用できるようにするには、このチェックボックスをオンにします。 他のグループが使用できないようにするには、このチェックボックスをオフにします。
[選択されたグループ]チェックボックス リスト	[選択した項目] ダイアログボックスに含まれているグループのチェックボックスをオンにします。 オンにしたグループは、新しいVMをプロビジョニングするときにこのカタログを使用します。
[エンドユーザへ公開（Publish to end users）] チェックボックス	このカタログがエンドユーザに表示されないようにするには、このチェックボックスをオフにします。 このチェックボックスをオフにしない場合、このカタログはシステムのエンドユーザに表示されます。
[クラウド名] ドロップダウン リスト	VM プロビジョニング用のイメージがあるクラウドを選択します。

名前	説明
[イメージ] フィールド	このカタログを使用してVMをプロビジョニングするときに使用するイメージのタイプ（イメージを構成する Windows ファイル、Linux ファイル、およびそのほかのファイルなどの既存のテンプレート）を選択します。 グループ管理者である場合や、カタログを作成する権限のあるグループのエンドユーザである場合は、属しているグループに割り当てられたイメージがこのフィールドに表示されます。 MSP 管理者である場合は、ご自身の MSP 組織と MSP 組織内のグループに割り当てられたイメージがこのフィールドに表示されます。
[Windowsライセンスプール] フィールド	Windows ライセンスを選択します。 （注） このオプションは、Windows イメージが選択されて場合にのみ表示されます。 （注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。
[単一データストアのすべてのディスクをプロビジョニング] チェックボックス	単一データストアのすべてのディスクをプロビジョニングするには、このチェックボックスをオンにします。 ストレージ ポリシーで各ディスクに対して設定されているデータストアを使用することも選択できます。 複数ディスク ストレージ ポリシーの作成の詳細については、8-1ページの「ポリシーの管理」を参照してください。 （注） このオプションは、選択されたテンプレートに複数のディスクがある場合に表示されます。 （注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。
[サービスコンテナテンプレート名] ドロップダウン リスト	リストからテンプレートを選択します。 （注） このオプションは、カタログ タイプがサービス コンテナである場合に表示されます。

名前	説明
[XenDesktop Catalog（XenDesktop カタログ）] ドロップダウン リスト	Desktop Studio で設定された XenDesktop 専用カタログのリストからテンプレートを選択します。 （注） このオプションは、カタログ タイプが [VDI] である場合に表示されます。
[フォルダの選択] ドロップダウン リスト	このカタログの作成先となるフォルダを選択します。 （注） ドロップダウン リストには、デフォルトで使用可能なフォルダの名前が含まれます。 使用可能なフォルダを選択するか、または [+] アイコンをクリックして新しいフォルダを作成します。 [新しいフォルダの追加] ダイアログボックスで、フォルダ名を指定し、そのフォルダのアイコンを選択します。

ステップ 7 [次へ] をクリックします。

ステップ 8 [アプリケーションの詳細] ペインで、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[カテゴリ] ドロップダウン リスト	VDC カテゴリを選択します。
[サポートの問い合わせ先の電子メールアドレス] フィールド	このカタログ項目を使用してサービス リクエストが作成されたときに通知が送信される問い合わせ先の電子メール アドレス。
[OSの指定] ドロップダウン リスト	VMのプロビジョニング時に、VMにインストールされる OS のタイプを選択します。 （注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。
[他のOSの指定] フィールド	[OSの指定] リストにない OS。 （注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。

名前	説明
[アプリケーションの指定]チェックボックスリスト	[項目の選択] ダイアログボックスのアプリケーションのチェックボックスをオンにします。 これらのアプリケーションはプロビジョニング中に VM にインストールされます。 （注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。
[他のアプリケーションの指定] フィールド	[項目の選択] ダイアログボックスにないアプリケーション。 （注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。
[アプリケーションコード] フィールド	VM名に使用するアプリケーション コード。 アプリケーション コードは 1 ～ 4 文字です（例：W2K3、DB、WS）。 VM 名のシステム ポリシーでアプリケーション コードを使用するには、変数 ${APPCODE} を使用します。 たとえば VM 名のテンプレートが vm-${GROUP_NAME}-${APPCODE} の場合、システムポリシーを使用してプロビジョニングされた VM の名前は vm-groupname-W2K3 になります。 （注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。

ステップ 9 [次へ] をクリックします。

ステップ 10 [ユーザクレデンシャル] ペインで、次のフィールドに値を入力します。

（注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。

名前	説明
[クレデンシャルのオプション] ドロップダウンリスト	ユーザに対し、VM アクセス クレデンシャル（共有）の取得を許可するか、または禁止するかを選択します。
[ユーザID] フィールド	ユーザ ID。 （注） このオプションは、[クレデンシャルのオプション]の下でいずれかの共有オプションを選択した場合に表示されます。

名前	説明
[パスワード] フィールド	ユーザのパスワード。 （注） このオプションは、[クレデンシャルのオプション] の下でいずれかの共有オプションを選択した場合に表示されます。

ステップ 11 [次へ] をクリックします。

ステップ 12 [カスタマイズ] ペインで、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[プロビジョニング後のカスタムアクション] チェックボックス	VM のプロビジョニング後に実行されるオーケストレーション ワークフローを有効にするには、このチェックボックスをオンにします。
[ワークフロー] ドロップダウン リスト	プロビジョニング用に定義されたワークフローを選択します。 （注） このオプションは、[プロビジョニング後のカスタムアクション] がオンの場合に表示されます。
[VMアプリケーションの請求間隔] ドロップダウン リスト	[毎時] または [毎月] を選択します。
[アクティブなVMアプリケーションのコスト] フィールド	テンプレートに含まれているアプリケーションのコスト。 （注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。
[非アクティブなVMアプリケーションコスト] フィールド	時間あたりまたは月あたりに、非アクティブな VM のカタログにかかるコスト。 （注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。

ステップ 13 [次へ] をクリックします。

ステップ 14 [VMアクセス] ペインで、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[Webアクセス設定] チェックボックス	VM への Web アクセスを有効にするには、このチェックボックスをオンにします。 VM への Web アクセスを無効にするには、このチェックボックスをオフにします。

名前	説明
[URL] フィールド	VM の URL。 （注） このオプションは、[Webアクセス設定] がオンの場合に表示されます。
[ラベル] フィールド	この URL に定義されたラベル （注） このオプションは、[Webアクセス設定] がオンの場合に表示されます。
[リモートデスクトップのアクセス設定] チェックボックス	VM へのリモートアクセスを有効にするには、このチェックボックスをオンにします。 VM へのリモート アクセスを無効にするには、このチェックボックスをオフにします。
[サーバ] フィールド	サーバのリモート アクセス用 IP アドレス。 （注） このオプションは、[リモートデスクトップのアクセス設定] がオンの場合に表示されます。
[ポート] フィールド	サーバのリモート アクセス用ポート番号。 （注） このオプションは、[リモートデスクトップのアクセス設定] がオンの場合に表示されます。
[ラベル] フィールド	このリモート アクセス用に定義されたラベル （注） このオプションは、[リモートデスクトップのアクセス設定] がオンの場合に表示されます。

ステップ 15 [次へ] をクリックします。

ステップ 16 [サマリー] ページのカタログ情報を確認します。

ステップ 17 [送信] をクリックします。

詳細カタログの公開について

高度なカタログ タイプを選択すると、エンド ユーザにワークフロー カタログをプロビジョニングできます。 エンドユーザは、ワークフローを実行するサービス要求中にこれらのカタログを使用できます。 高度なカタログ項目は、グループ名、ワークフローなどのパラメータを定義することにより作成します。

詳細カタログの公開

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ポリシー] > [カタログ] の順に選択します。

ステップ 2 [カタログ] タブを選択します。

ステップ 3 [追加] をクリックします。

ステップ 4 [カタログの追加] ダイアログ ボックスで、[カタログタイプ] ドロップダウン リストから [詳細] を選択します。

ステップ 5 [送信] をクリックします。

ステップ 6 [カタログの作成] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[基本情報] ペイン	
[カタログ名] フィールド	カタログの名前。
[カタログの説明] フィールド	カタログの説明。
カタログ タイプ	[詳細] を選択します。
[カタログアイコン] ドロップダウン リスト	このカタログに関連付けるイメージのアイコンを選択します。アイコンは、このカタログを使用してサービス リクエストを作成するときに表示されます。
[すべてのグループに適用] チェックボックス	すべてのグループがこのカタログを使用できるようにするには、このチェックボックスをオンにします。他のグループが使用できないようにするには、このチェックボックスをオフにします。

名称	説明
選択したグループ	[選択] をクリックし、以下の操作を行います。 **1** （任意）[すべてオン]をクリックしてすべてのカテゴリを選択するか、または[すべてオフ]をクリックしてすべてのカテゴリを選択解除します。 **2** [項目の選択]ダイアログボックスで、追加するグループをオンにします。 オンにしたグループは、新しい VM をプロビジョニングするときにこのカタログを使用できます。 **3** [選択]をクリックして、カテゴリの選択を終了します。
[エンドユーザへ公開（Publish to end users）] チェックボックス	このカタログがエンドユーザに表示されないようにするには、このチェックボックスをオフにします。このチェックボックスをオフにしない場合、このカタログはシステムのエンドユーザに表示されます。
[フォルダの選択] ドロップダウン リスト	このカタログを作成するフォルダを選択します。 （注） ドロップダウン リストには、すでに利用可能なフォルダの名前が表示されています。 利用可能なフォルダを選択するか、+アイコンをクリックして新しいフォルダを作成します。 [新しいフォルダの追加] ダイアログボックスで、フォルダ名を指定し、そのフォルダのアイコンを選択します。

ステップ 7 [次へ] をクリックします。

ステップ 8 [vApp ワークフロー] ペインで、[ワークフローの選択] をクリックします。

ステップ 9 [選択] ダイアログボックスで、使用するワークフローの横のチェックボックスをオンにします。

ステップ 10 [選択] をクリックします。

ステップ 11 [サマリー] ページのカタログ情報を確認します。

ステップ 12 [送信] をクリックします。

カタログの表示

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ポリシー] > [カタログ] の順に選択します。
ステップ 2 [カタログ] タブを選択します。
ステップ 3 表示するカタログの名前を選択します。
ステップ 4 [送信] をクリックします。

カタログの編集

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ポリシー] > [カタログ] の順に選択します。
ステップ 2 [カタログ] タブを選択します。
ステップ 3 編集するカタログ名を選択します。
ステップ 4 [編集] をクリックします。
ステップ 5 [カタログの修正] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[基本情報] ペイン	
[カタログ名] フィールド	カタログの名前。 （注） カタログを作成した後では、名前は変更できません。
[カタログの説明] フィールド	カタログの説明。

名前	説明
[カタログタイプ] ドロップダウン リスト	カタログのタイプ。 この属性の種類は次のとおりです。 • [標準]：クラウドリストにあるイメージを使用してVMプロビジョニングのためのカタログを作成する場合に使用します。 • [詳細]：カタログ項目などのオーケストレーション ワークフローを公開する場合に使用します。 • [サービスコンテナ]：カタログ項目としてアプリケーション コンテナを公開する場合に使用します。 • [VDI]：カタログ項目として Xen Desktop を公開する場合に使用します。
[カタログアイコン] ドロップダウン リスト	このカタログに関連付けるイメージのアイコンをリストから選択します。 このアイコンは、このカタログを使用してサービスリクエストを作成するときに表示されます。
[すべてのグループに適用] チェックボックス	すべてのグループがこのカタログを使用できるようにするには、このチェックボックスをオンにします。 他のグループが使用できないようにするには、このチェックボックスをオフにします。
[選択されたグループ]チェックボックス リスト	[選択した項目] ダイアログボックスに含まれているグループのチェックボックスをオンにします。 オンにしたグループは、新しいVMをプロビジョニングするときにこのカタログを使用します。
[エンドユーザへ公開（Publish to end users）] チェックボックス	このカタログがエンドユーザに表示されないようにするには、このチェックボックスをオフにします。 このチェックボックスをオフにしない場合、このカタログはシステムのエンドユーザに表示されます。
[クラウド名] ドロップダウン リスト	VM プロビジョニング用のイメージがあるクラウドを選択します。

名前	説明
[イメージ] フィールド	このカタログを使用してVMをプロビジョニングするときに使用するイメージのタイプ（イメージを構成する Windows ファイル、Linux ファイル、およびそのほかのファイルなどの既存のテンプレート）を選択します。 グループ管理者である場合や、カタログを作成する権限のあるグループのエンドユーザである場合は、属しているグループに割り当てられたイメージがこのフィールドに表示されます。 MSP 管理者である場合は、ご自身の MSP 組織と MSP 組織内のグループに割り当てられたイメージがこのフィールドに表示されます。
[Windowsライセンスプール] フィールド	Windows ライセンスを選択します。 （注） このオプションは、Windows イメージが選択されて場合にのみ表示されます。 （注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。
[単一データストアのすべてのディスクをプロビジョニング] チェックボックス	単一データストアのすべてのディスクをプロビジョニングするには、このチェックボックスをオンにします。 ストレージ ポリシーで各ディスクに対して設定されているデータストアを使用することも選択できます。 複数ディスク ストレージ ポリシーの作成の詳細については、8-1ページの「ポリシーの管理」を参照してください。 （注） このオプションは、選択されたテンプレートに複数のディスクがある場合に表示されます。 （注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。
[サービスコンテナテンプレート名] ドロップダウン リスト	リストからテンプレートを選択します。 （注） このオプションは、カタログ タイプがサービス コンテナである場合に表示されます。

名前	説明
[XenDesktop Catalog（XenDesktop カタログ）] ドロップダウン リスト	Desktop Studio で設定された XenDesktop 専用カタログのリストからテンプレートを選択します。 （注） このオプションは、カタログ タイプが [VDI] である場合に表示されます。
[フォルダの選択] ドロップダウン リスト	このカタログの作成先となるフォルダを選択します。 （注） ドロップダウン リストには、デフォルトで使用可能なフォルダの名前が含まれます。 使用可能なフォルダを選択するか、または [+] アイコンをクリックして新しいフォルダを作成します。 [新しいフォルダの追加] ダイアログボックスで、フォルダ名を指定し、そのフォルダのアイコンを選択します。

ステップ 6 [次へ] をクリックします。

ステップ 7 [Applications Details（アプリケーションの詳細）] ペインで、次のフィールドを編集します。

名前	説明
[カテゴリ] ドロップダウン リスト	VDC カテゴリを選択します。
[サポートの問い合わせ先の電子メールアドレス] フィールド	このカタログ項目を使用してサービス リクエストが作成されたときに通知が送信される問い合わせ先の電子メール アドレス。
[OSの指定] ドロップダウン リスト	VMのプロビジョニング時に、VMにインストールされる OS のタイプを選択します。 （注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。
[他のOSの指定] フィールド	[OSの指定] リストにない OS。 （注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。

名前	説明
[アプリケーションの指定] チェックボックス リスト	[項目の選択] ダイアログボックスのアプリケーションのチェックボックスをオンにします。これらのアプリケーションはプロビジョニング中に VM にインストールされます。 （注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。
[他のアプリケーションの指定] フィールド	[項目の選択] ダイアログボックスにないアプリケーション。 （注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。
[アプリケーションコード] フィールド	VM 名に使用するアプリケーション コード。アプリケーション コードは 1 ～ 4 文字です（例：W2K3、DB、WS）。 VM 名のシステム ポリシーでアプリケーション コードを使用するには、変数 ${APPCODE} を使用します。 たとえば VM 名のテンプレートが vm-${GROUP_NAME}-${APPCODE} の場合、システム ポリシーを使用してプロビジョニングされた VM の名前は vm-groupname-W2K3 になります。 （注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。

ステップ 8 [次へ] をクリックします。

ステップ 9 [ユーザクレデンシャル] ペインで、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[クレデンシャルのオプション] ドロップダウン リスト	ユーザに対し、VM アクセス クレデンシャル（共有）の取得を許可するか、または禁止するかを選択します。
[ユーザID] フィールド	ユーザ ID。 （注） このオプションは、[クレデンシャルのオプション] の下でいずれかの共有オプションを選択した場合に表示されます。

名前	説明
[パスワード] フィールド	ユーザのパスワード。 （注） このオプションは、[クレデンシャルのオプション]の下でいずれかの共有オプションを選択した場合に表示されます。

ステップ 10 [次へ] をクリックします。

ステップ 11 [カスタマイズ] ペインで、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[プロビジョニング後のカスタムアクション] チェックボックス	VM のプロビジョニング後に実行されるオーケストレーション ワークフローを有効にするには、このチェックボックスをオンにします。
[ワークフロー] ドロップダウン リスト	プロビジョニング用に定義されたワークフローを選択します。 （注） このオプションは、[プロビジョニング後のカスタムアクション]がオンの場合に表示されます。
[VMアプリケーションの請求間隔] ドロップダウン リスト	[毎時] または [毎月] を選択します。
[アクティブなVMアプリケーションのコスト] フィールド	テンプレートに含まれているアプリケーションのコスト。 （注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。
[非アクティブなVMアプリケーションコスト] フィールド	時間あたりまたは月あたりに、非アクティブな VM のカタログにかかるコスト。 （注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。

ステップ 12 [次へ] をクリックします。

ステップ 13 [VMアクセス] ペインで、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[Webアクセス設定] チェックボックス	VM への Web アクセスを有効にするには、このチェックボックスをオンにします。 VM への Web アクセスを無効にするには、このチェックボックスをオフにします。

名前	説明
[URL] フィールド	VM の URL。 （注） このオプションは、[Webアクセス設定] がオンの場合に表示されます。
[ラベル] フィールド	この URL に定義されたラベル （注） このオプションは、[Webアクセス設定] がオンの場合に表示されます。
[リモートデスクトップのアクセス設定] チェックボックス	VM へのリモート アクセスを有効にするには、このチェックボックスをオンにします。 VM へのリモート アクセスを無効にするには、このチェックボックスをオフにします。
[サーバ] フィールド	サーバのリモート アクセス用 IP アドレス。 （注） このオプションは、[リモートデスクトップのアクセス設定] がオンの場合に表示されます。
[ポート] フィールド	サーバのリモート アクセス用ポート番号。 （注） このオプションは、[リモートデスクトップのアクセス設定] がオンの場合に表示されます。
[ラベル] フィールド	このリモート アクセス用に定義されたラベル （注） このオプションは、[リモートデスクトップのアクセス設定] がオンの場合に表示されます。

ステップ 14 [次へ] をクリックします。

ステップ 15 [サマリー] ページのカタログ情報を確認します。

ステップ 16 [送信] をクリックします。

フォルダ内のカタログの並べ替え

デフォルトでは、フォルダ内のカタログはアルファベット順にリストされています。 これらのカタログの順序は並べ替えることができます。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ポリシー] > [カタログ] の順に選択します。
ステップ 2 [カタログ] タブを選択します。
ステップ 3 フォルダを展開すると、フォルダ内のカタログが表示されます。
ステップ 4 リストからカタログを選択します。
ステップ 5 [上へ移動] または [下へ移動] オプションを選択して、カタログの順序を並べ替えます。

カタログの複製

複製機能を使用してカタログ項目を複製できます。 複製するカタログ項目を選択すると、[名前] と [説明] を除く既存のすべてのプロパティが新しいカタログにコピーされます。 [名前] と [説明] を定義した後で、他のプロパティを変更できます。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ポリシー] > [カタログ] の順に選択します。
ステップ 2 [カタログ] タブを選択します。
ステップ 3 複製するカタログの名前を選択します。
ステップ 4 [複製] をクリックします。
ステップ 5 [カタログの複製] ダイアログボックスに、カタログの名前と説明を入力します。
ステップ 6 カタログの詳細を必要に応じて編集します。
ステップ 7 [送信] をクリックします。

カタログの削除

フォルダ内のすべてのカタログを削除すると、それらのカタログが保存されていたフォルダも削除されます。 ただし、デフォルトで使用可能なフォルダは削除されることはありません。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ポリシー] > [カタログ] の順に選択します。

ステップ 2 [カタログ] タブを選択します。

ステップ 3 削除するカタログ名を選択します。

ステップ 4 [削除] をクリックします。

展開するホストへのアクセス

カタログ項目を選択して、展開可能なホストを評価し、除外されたホストの理由を入力できます。この評価をすべての設定済み VDC で実行するか、または特定の VDC で実行するかを選択できます。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ポリシー] > [カタログ] の順に選択します。

ステップ 2 [カタログ] タブを選択します。

ステップ 3 評価する [カタログ項目] を選択します。

ステップ 4 [導入可能性に関するアセスメント] をクリックします。

ステップ 5 [VDCの選択（Select vDC）] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

フィールド	説明
[すべてのVDCでアセスメントを実行する（Run Assessment Across all VDCs）] チェック ボックス	デフォルトでは、このチェックボックスはオンになっています。 これは、このカタログ項目がすべてのVDCで評価されることを意味します。特定の VDC を選択する場合は、このチェックボックスをオフにします。
[vDCの選択（Select vDC）] フィールド	[選択（Select）] をクリックし、カタログ項目の評価対象とする vDC のチェック ボックスをオンにします。 リストには、選択されたカタログのユーザ グループに関連付けられたすべての vDC が表示されます。

ステップ 6 [送信] をクリックします。

ステップ 7 [導入可能性に関するアセスメント（Deployability Assessment）] レポートを確認した後、[閉じる（Close）] をクリックします。

カタログ フォルダの並べ替え

デフォルトでは、カタログフォルダはアルファベット順にリストされています。 これらのフォルダの順序は並べ替えることができます。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ポリシー] > [カタログ] の順に選択します。

ステップ 2 [フォルダの管理] をクリックします。

ステップ 3 [フォルダの管理] ダイアログ ボックスで、矢印を使用してフォルダの順序を並べ替えます。

ステップ 4 [送信] をクリックします。

第 11 章

セルフサービス プロビジョニングの使用方法

この章は、次の内容で構成されています。

- セルフ サービス プロビジョニングについて，207 ページ
- サービス リクエストについて，207 ページ
- サービス リクエスト ワークフローと詳細，213 ページ
- サービス リクエストのスケジュール設定について，217 ページ
- サービス リクエストの再送信について，218 ページ
- その他のサービス リクエスト機能，218 ページ
- サービス リクエストの承認プロセス，221 ページ
- サービス リクエストの予算作成，223 ページ

セルフ サービス プロビジョニングについて

セルフサービス プロビジョニングを使用して仮想マシン（VM）をプロビジョニングできます。ただし、VM をプロビジョニングする前に、サービス要求の作成が必要です。 この操作は、サービス要求の状態に関する予算の確認、動的なリソース割り当て、承認、プロビジョニング、ライフサイクル セットアップおよび通知を含む VM の作成ワークフローを開始します。

サービス リクエストについて

セルフサービス プロビジョニング機能を使用してサービス リクエストを作成し、仮想マシン（VM）、サービス、またはアプリケーションをプロビジョニングできます。 サービス リクエスト プロセスでは VM 作成用のプロビジョニング ワークフローを作成しますが、これには次のアクションが含まれます。

- 予算の検証
- 動的なリソース割り当て
- 承認
- プロビジョニング
- ライフサイクルの設定および通知

（注） [展開構成] ペインで CPU コアの数またはメモリ割り当てを変更すると、総コストが自動的に更新されて表示されます。

VM をプロビジョニングするまたはオーケストレーション ワークフローを実行するには、最初にサービス リクエストを作成する必要があります。 管理者または該当のユーザがサービス リクエストを承認すると、VM がプロビジョニングされます。 VM はただちに承認することも、オリジナルのリクエストから 90 日以内に承認するようにスケジュールすることもできます。

（注） サービス リクエスト承認プロセスはオプションです。

管理者はオーケストレーション ワークフローをカタログとして Self-Service portal に提供できます。 サービス リクエストの承認プロセスは 1 人または 2 人のユーザによる承認が必要です。 このようなシナリオでは、VM をプロビジョニングするには管理者および IT 管理者がリクエストを承認する必要があります。

[標準] カタログ タイプを使用したサービス リクエストの作成

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [サービスリクエスト] の順に選択します。

ステップ 2 [サービスリクエスト] タブを選択します。

ステップ 3 [リクエストの作成] をクリックします。

ステップ 4 [サービスの作成] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[カタログの選択リクエスト] ペイン	
VM 所有者	
[グループ（Group）] オプション ボタン	VM のプロビジョニング対象とするグループを選択するには、このオプション ボタンをオンにします。

名称	説明
[ユーザグループ（User Group）] フィールド	[選択（Select）] をクリックして、VM をプロビジョニングする対象のユーザ グループを選択します。 （注） 有効な vDC があるグループが表示されます。 このフィールドは [グループ] ラジオ ボタンが選択されたときだけ表示されます。
[ユーザ] ラジオ ボタン	このラジオ ボタンを選択して VM をプロビジョンするユーザを選択します。
[ユーザ（User）] フィールド	[選択] をクリックして VM をプロビジョニングするユーザを選択します。 このリストには、ユーザへのリソース割り当てを許可するグループからのユーザが表示されます。 （注） 現在、特定のエンド ユーザに割り当てることができるのは、VMWare クラウド内の VM だけです。
VM アクセス共有	
[アクセス権限のあるユーザ（Users with Access Privilege）] フィールド	[選択（Select）] をクリックして、VM 情報へのアクセスのみを許可するユーザを選択します。 選択したユーザには、VM へのアクセスのみが許可されます。 管理タスクを実行することはできません。
[管理権限のあるユーザ（Users with Manage Privilege）] フィールド	[選択（Select）] をクリックして、VM の管理のみを許可するユーザを選択します。 選択したユーザは、VM の管理タスクを実行できます。

名称	説明
[カタログタイプ] ドロップダウン リスト	カタログのタイプを選択します。 この属性の種類は次のとおりです。 • 標準 • 詳細 • サービスコンテナ • VDI （注） [詳細]は、オーケストレーション ワークフローのために使用されます。
[カタログの選択] ドロップダウン リスト	VM のプロビジョニングに使用されるカタログを選択します。

ステップ 5 [次へ] をクリックします。

ステップ 6 [導入設定] ペインで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[VDCの選択] ドロップダウン リスト	VM がプロビジョニングされる VDC。 VDC は管理者によって定義されます。
[VM名またはVMプレフィクス] フィールド	VM 名またはプレフィクス。
[コメント] フィールド	導入の設定に関するコメント。
[プロビジョニング] ドロップダウン リスト	[今すぐ] または [あとで] のいずれかを選択します。 [今すぐ] を選択すると、VM はただちにまたは 90 日以内にプロビジョニングされます。 [あとで] を選択すると、日付選択用のカレンダー、時間と分のドロップダウン リスト、およびAM または PM のオプション ボタンが表示されます。
[日数] カレンダー	この日数が経過すると VM が終了します。 （注） このオプションは、[次の期間後にVM の電源をオフにする]チェックボックスがオンの場合に表示されます。

名称	説明
[時間] ドロップダウン リスト	選択した時間が経過するとVMが終了します。 （注） このオプションは、[次の期間後にVMの電源をオフにする] チェックボックスがオンの場合に表示されます。
[分] ドロップダウン リスト	選択した時間（分単位）が経過するとVMが終了します。 （注） このオプションは、[次の期間後にVMの電源をオフにする] チェックボックスがオンの場合に表示されます。
[リース時間] チェックボックス	VM のリース期間が設定されている場合は、このチェック ボックスをオンにします。

ステップ 7 [次へ] をクリックします。

ステップ 8 [カスタム仕様] ペインで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[CPUコア] ドロップダウン リスト	プロビジョニングされる VM の CPU コアを選択します。 （注） このリストは、[コンピューティング ポリシー] ダイアログボックスボックスでサイズ変更オプションを選択した場合に開きます。
[メモリ] ドロップダウン リスト	プロビジョニングされるVMのメモリ量を選択します。 （注） このリストは、[コンピューティング ポリシー] ダイアログボックスでサイズ変更オプションを選択した場合に開きます。

名称	説明
[ストレージ階層] ドロップダウン リスト	プロビジョニングされるVMのストレージエントリをカスタマイズするオプションを選択します。 （注） このカスタム リストは、選択されたカタログの作成時に仮想ストレージ カタログが有効であった場合に開きます。 仮想ストレージ カタログの作成については、8-1 ページの「ポリシーの管理」の項を参照してください。 カタログの作成時にこのオプションを有効化する方法については、10-1 ページの「カタログの管理」の項を参照してください。
[ディスク] ドロップダウン リスト	VM のプロビジョニングに望ましいハードディスクのサイズを選択します。 使用可能なデータストアのリストは、ストレージポリシーで指定されたスコープ条件によって異なります。 ストレージポリシーでこのオプションを有効または無効にできます。

ステップ 9 ディスクのデータストアを選択するには、ディスクをリストから選択し、[鉛筆]アイコンをクリックします。

ステップ 10 [選択] をクリックして、使用可能なデータストアを表示します。

ステップ 11 リストからデータストアを選択し、[選択] をクリックします。

ステップ 12 [送信] をクリックします。

ステップ 13 （任意） 複数のディスクを含むテンプレートの場合は、各ディスクのデータストアを選択します。

ステップ 14 [カスタム仕様] ペインで、[選択] をクリックして利用可能な VM ネットワークを参照します。

（注） このオプションは、この VM プロビジョニングのサービス リクエストに対して選択された VDC に関連するネットワーク ポリシーで、[エンドユーザにオプションのNICの選択を許可] チェックボックスまたは [エンドユーザによるポートグループ選択を許可] チェックボックスがオンの場合にのみ使用できます。 詳細については、8-8 ページの「ネットワーク ポリシーの追加」の項を参照してください。

ステップ 15 VM ネットワークをリストから選択し、[選択] をクリックします。

ステップ 16 [次へ] をクリックします。

ステップ 17 [カスタムワークフロー] ペインの詳細を入力します。

（注） カスタム ワークフローの入力は、VM のプロビジョニング用に選択されたカタログの [プロビジョニング後のカスタムアクション] が有効な場合に適用されます。 上記の場合、ユーザはプロビジョニング後のワークフローでカスタム入力を指定できます。

ステップ 18 [次へ] をクリックします。

（注） 使用可能なデータストアのリストは、ストレージ ポリシーで指定されたスコープ条件によって異なります。 各ディスク カテゴリ（システム、データ、データベース、スワップ、ログ）に対してデータストアを 1 つだけ選択できます。

ステップ 19 サービス リクエストの概要を確認します。

ステップ 20 [送信] をクリックします。

カタログ タイプを使用したサービス リクエストの作成 - 詳細

サービス リクエストの作成時に詳細カタログ タイプを選択すると、オーケストレーション ワークフローを実行できます。 詳細カタログを作成する場合の詳細は、標準カタログを作成する場合とほぼ同じです。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [サービスリクエスト] の順に選択します。

ステップ 2 [サービスリクエスト] タブを選択します。

ステップ 3 [リクエストの作成] をクリックします。

ステップ 4 [サービスリクエストの作成] ダイアログボックスの [カタログの選択] セクションで、[グループ]、[カタログタイプ]（[詳細]）、および [カタログ]（[ワークフロー]）を選択します。

ステップ 5 [次へ] をクリックします。

ステップ 6 [サービスリクエストの作成] ダイアログボックスの [カスタムワークフロー] セクションで、カスタムワークフローの入力値を入力します。

ステップ 7 [次へ] をクリックします。

ステップ 8 サービス リクエストの概要を確認します。

ステップ 9 [送信] をクリックします。
ワークフロー作成時のユーザ入力に応じ、これらの入力がサービス リクエストで反映されます。

サービス リクエスト ワークフローと詳細

サービス リクエストを作成した後で、ステータスとワークフローの確認、リクエストのキャンセル、リクエストの再送信などを行うことができます。 これらの操作は、サービス リクエスト リストの上部のツールバー ボタンを使って制御できます。

サービス リクエスト ワークフロー

[ワークフロー ステータス] ボックスにはサービス リクエストおよびワークフロー ステップの詳細が表示されます。 サービスリクエストの一般的なワークフローには次のステップが含まれます。

1. 開始：ユーザによるサービス リクエストの開始。
2. リソース割り当て：VM に必要なリソースの割り当て。
3. 承認：VMがプロビジョニングされる前のユーザ承認プロセス。 カタログの作成時に定義された承認者に電子メールが送信されます。 このカタログは VM のプロビジョニング時に使用されるカタログです。
4. プロビジョニング：VM のプロビジョニング プロセス。
5. ライフサイクル スケジュールのセットアップ：セットアップ、スケジュール、および終了の時間が設定されるライフサイクルのスケジューリング。
6. 通知：VM のプロビジョニングに関して電子メールでユーザに通知するプロセス。

オプションのサービス リクエスト ワークフロー ステップには、次に示す予算の監視とリソース制限の検査が含まれます。

1. 予算の監視：管理者はグループに対して予算化を有効にする必要があります。 このステップは、新しいVMをプロビジョニングするための十分な予算がそのグループにあるかどうかを判別します。
2. リソース制限の検査：管理者はグループに対するリソース制限を有効にする必要があります。 これは、新しいVMをプロビジョニングするための十分なリソースがそのグループで使用可能かどうかを判別します。

サービス リクエスト詳細

サービスリクエストの詳細には、サービスリクエストの概要、所有権、カタログ情報、および現在のステータスの項目が含まれます。

項目	説明
概要	
要求 ID	サービス リクエスト ID 番号。
要求タイプ	リクエストのタイプ（この場合は VM の作成）。
VDC	VM がプロビジョニングされる VDC。
画像	VM がプロビジョニングされるイメージ

項目	説明
リクエスト日時	サービス リクエストの作成時点。
リクエストのステータス	サービス リクエストのステータス（[完了]、[キャンセル]、[失敗] など）。
コメント	任意のコメント。
所有権	
グループ	サービスリクエストを開始したユーザが属するグループ。
送信ユーザ	サービス リクエストを開始したユーザ。
期間（時間）	VM がアクティブな期間。 定義した場合、VM は指定された期間の経過後に削除されます。
予定時刻	VM がプロビジョニングされる時刻。 定義した場合と、VM はスケジュール設定された日付の午前 6 時に プロビジョニングされます。 定義しない場合は、サービスリクエストのワークフロー ステップが完了するとただちに VM がプロビジョニングされます。
カタログ情報	
VDC 所有者の電子メール	VDC の作成時に管理者が指定した電子メール ID。
承認ユーザ	VM プロビジョニングのサービス リクエストを承認する必要があるユーザ（定義されている場合）。
カタログ名	VM プロビジョニングの起点となるカタログ項目の名前。
カタログの説明	カタログ項目の説明。
サービス リクエスト コスト	VM プロビジョニングのコスト（見積）。 このコストはカタログ項目に対して定義されているコスト モデルに基づいています。

各ワークフロー ステップのステータスを確認できます。 警告メッセージやエラー メッセージ、リクエストの時刻などの詳細も表示されます。 ワークフローステップは、それぞれのステータスを示すため色分けされています。

カラー コード	説明
グレー	ステップは未完了です。
グリーン	ステップは正常に完了しました。
赤	ステップは失敗しました。 失敗の理由も示されます。
青	ステップを完了するために追加の入力が必要です。 たとえば、サービス リクエストに対して承認者が定義されている場合、リクエストが承認されるまではこのステップは完了しません。

（注） 承認者は各自に割り当てられているサービス リクエストを [承認] タブで確認できます。

サービス リクエストのワークフロー ステータスの表示

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [サービスリクエスト] の順に選択します。

ステップ 2 左側のパネルから、ユーザ グループを選択します。
デフォルトは [すべてのユーザグループ] で、すべてのサービス リクエストが表示されます。

ステップ 3 [サービスリクエスト] タブを選択します。

ステップ 4 サービス リクエストを選択します。

ステップ 5 [詳細の表示] をクリックして、サービス リクエストの詳細とステータスを確認します。 デフォルトでは、[ワークフロー ステータス] タブがダイアログボックスに表示されます。

サービス リクエストのログ詳細の表示

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [サービスリクエスト] の順に選択します。

ステップ 2 左側のパネルから、ユーザ グループを選択します。
デフォルトは [すべてのユーザグループ] で、すべてのサービス リクエストが表示されます。

ステップ 3 [サービスリクエスト] タブを選択します。

ステップ 4 サービス リクエストを選択します。

ステップ 5 [詳細の表示] をクリックし、[ログ] タブを選択します。

サービス リクエストのスケジュール設定について

遅延プロビジョニングを使用して、VMプロビジョニングのスケジュールを後日に設定できます。デフォルト プロビジョニングは、スケジュールされた日付の 午前 8 時 30 分に行われます。 日付が設定されると、ワークフローでの VM プロビジョニング ステータスは、後日にスケジュールされているプロビジョニングとして表示されます。

サービス リクエストのスケジュール設定

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [サービスリクエスト] の順に選択します。

ステップ 2 [サービスリクエスト] タブを選択します。

ステップ 3 [リクエストの作成] をクリックします。

ステップ 4 グループ、カタログ タイプ、カタログを選択します（詳細については、11-1 ページの「カタログ タイプを使用したサービス リクエストの作成 - 標準」を参照してください）。

ステップ 5 [次へ] をクリックします。

ステップ 6 [プロビジョニング] フィールドで [あとで] オプションを選択し、[サービスリクエスト] ダイアログ ボックスでプロビジョニングの日付を選択します。

ステップ 7 [サマリー] ウィンドウが表示されるまで [次へ] をクリックします。

ステップ 8 [送信] をクリックします。

サービス リクエストの再送信について

失敗したサービス リクエストを再送信できます。 サービス リクエストは、次に示す理由で失敗することがあります。

- VM がプロビジョニングされるグループの予算制限（管理者により定義）を超過した。
- VM がプロビジョニングされるグループのリソース制限（管理者により定義）を超過した。
- サービス リクエストの作成時に関連情報が入力されないと、プロビジョニングが失敗する可能性があります。

サービス リクエストが再送信されると、以前の送信で失敗したワークフローステップから処理が再開されます。 たとえば、サービス リクエストがリソース割り当てワークフロー（ステップ 2）で失敗した場合、このサービス リクエストが再送信されると、失敗したそのステップから処理が開始されます。

サービス リクエストの再送信

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [サービスリクエスト] の順に選択します。

ステップ 2 左側のパネルから、ユーザ グループを選択します。
デフォルトは [すべてのユーザグループ] で、すべてのサービス リクエストが表示されます。

ステップ 3 [サービスリクエスト] タブを選択します。

ステップ 4 再送信するサービス リクエストを選択します。

ステップ 5 [リクエストの再送信] をクリックします。

その他のサービス リクエスト機能

サービス リクエストのキャンセル

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [サービスリクエスト] の順に選択します。

ステップ 2 左側のパネルから、ユーザ グループを選択します。
デフォルトは [すべてのユーザグループ] で、すべてのサービス リクエストが表示されます。

ステップ 3 [サービスリクエスト] タブを選択します。

ステップ 4 キャンセルするサービス リクエストのエントリを選択します。

ステップ 5 [リクエストのキャンセル] をクリックします。

ステップ 6 [送信] をクリックして、サービス リクエストをキャンセルします。

サービス リクエストのロールバック

サービス リクエストがオーケストレーション ワークフローまたはフェンスド コンテナの導入を使用して作成されている場合は、サービス リクエストをロールバックできます。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [サービスリクエスト] の順に選択します。

ステップ 2 左側のパネルから、ユーザ グループを選択します。
デフォルトは [すべてのユーザグループ] で、すべてのサービス リクエストが表示されます。

ステップ 3 [サービスリクエスト] タブを選択します。

ステップ 4 アーカイブするサービス リクエストを選択します。

ステップ 5 [アーカイブ] をクリックします。

ステップ 6 [リクエストのアーカイブ] ダイアログ ボックスで、[アーカイブ] をクリックします。
アーカイブされたすべてのリクエストを表示するには、[アーカイブ済みのサービスリクエスト] タブを選択します。

特定グループのサービス リクエストの表示

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [サービスリクエスト] の順に選択します。

ステップ 2 左側のパネルから、ユーザ グループを選択します。
デフォルトは [すべてのユーザグループ] で、すべてのサービス リクエストが表示されます。

ステップ 3 [サービスリクエスト] タブを選択します。

グループのサービス リクエスト履歴の検索

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [サービスリクエスト] の順に選択します。
ステップ 2 [サービスリクエスト] タブを選択します。
ステップ 3 ツールバーで、[検索と置換] をクリックします。
ステップ 4 [検索と置換] ダイアログボックスの検索フィールドに、検索条件を入力します。
ステップ 5 [送信] をクリックします。

グループのサービス リクエスト履歴のエクスポート

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [サービスリクエスト] の順に選択します。
ステップ 2 左側のパネルからグループ名を選択します。
ステップ 3 [サービスリクエスト] タブを選択します。
ステップ 4 ツールバーの右側で、[レポートのエクスポート] アイコンをクリックします。
ステップ 5 [レポートのエクスポート] ダイアログボックスで、レポート形式を選択します。
レポートの形式は、PDF、CSV、XLS です。
ステップ 6 [レポートの生成] をクリックします。

アーカイブ済みのサービス リクエストの回復

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [サービスリクエスト] の順に選択します。
ステップ 2 [アーカイブ済みのサービスリクエスト] タブを選択します。
ステップ 3 回復するサービス リクエストを選択します。
ステップ 4 [アーカイブ解除] をクリックします。

サービス リクエストの承認プロセス

VM をプロビジョニングする前に、サービス リクエストは VDC 内で定義された指定承認者により承認される必要があります。 1 つのグループに対して 2 人の承認者を定義できます。

- 作成後、サービス リクエスト ワークフローには承認者の名前を示す VM 承認を必要とするステップが含まれます。
- 承認者へサービス リクエスト通知電子メールが送信されます。 承認者は [承認] タブの下ですべてのリクエストを確認できます。
- 承認後、次のステップとして VM のプロビジョニングが開始されます。

（注） 承認者の定義の詳細については、9-1 ページの「仮想データセンターの管理」の項を参照してください。

サービス リクエストの承認

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [承認記録] の順に選択します。

ステップ 2 [承認記録] タブを選択します。

ステップ 3 承認するサービス リクエストのエントリを選択します。

ステップ 4 （任意） 詳細を確認するため、[詳細の表示] をクリックします。
ワークフローと入力/出力情報を確認できます。確認し終わったら、[閉じる（Close）] をクリックします。

ステップ 5 [承認] をクリックします。

ステップ 6 必要に応じて、[サービスリクエスト] ダイアログボックスでコメントを追加します。

ステップ 7 [承認] をクリックします。

サービス リクエストの拒否

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [承認記録] の順に選択します。

ステップ 2 [承認記録] タブを選択します。

ステップ 3 拒否するサービス リクエスト エントリを選択します。

ステップ 4 （任意） [詳細の表示（View Details）] をクリックして詳細を確認した後、[閉じる（Close）] をクリックします。

ステップ 5 [却下] をクリックします。

ステップ 6 必要に応じて、[サービスリクエスト] ダイアログボックスでコメントを追加します。

ステップ 7 [却下] をクリックします。

サービス リクエスト承認の履歴の表示

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [承認記録] の順に選択します。

ステップ 2 [承認記録] タブを選択します。
すでに完了している承認と、保留中の承認がリストされます。

サービス リクエストの承認履歴の検索

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [承認記録] の順に選択します。

ステップ 2 [承認記録] タブを選択します。
すでに承認されているか、承認を保留中のすべての承認が表示されます。

ステップ 3 [検索] フィールドに、検索語を入力します。
検索条件に一致するサービス リクエストが表示されます。

サービス リクエスト承認の履歴のエクスポート

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [承認記録] の順に選択します。

ステップ 2 [承認記録] タブを選択します。

ステップ 3 リストからグループ名を選択します。

ステップ 4 ツールバーの右側で、[レポートのエクスポート] アイコンをクリックします。

ステップ 5 [レポートのエクスポート] ダイアログボックスで、レポート形式を選択します。
レポートの形式は、PDF、CSV、XLS です。

ステップ 6 [レポートの生成] をクリックします。

サービス リクエストの予算作成

今月の利用可能な予算の表示

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [サービスリクエスト] の順に選択します。

ステップ 2 左側のパネルから、[すべてのユーザグループ] または特定のユーザ グループを選択します。

ステップ 3 [今月の利用可能な予算] タブを選択します。

予算エントリの表示

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [サービスリクエスト] の順に選択します。

ステップ 2 左側のパネルから、ユーザ グループを選択します。

ステップ 3 [予算エントリ] タブを選択します。

予算エントリの追加

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [サマリー] の順に選択します。
ステップ 2 左側のパネルから、ユーザ グループを選択します。
ステップ 3 [予算エントリ] タブを選択します。
ステップ 4 [追加]（+）をクリックします。
ステップ 5 [予算エントリの追加] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[エントリ名] フィールド	予算エントリの名前。
[予算額] フィールド	1 カ月あたりの予算額。
[年] ドロップダウン リスト	年を選択します。
[月] ドロップダウン リスト	月を選択します。
[リピートエントリ] ドロップダウン リスト	同じ予算額を繰り返す月の数を選択します。

ステップ 6 [追加] をクリックします。

予算エントリの編集

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [サマリー] の順に選択します。
ステップ 2 左側のパネルから、ユーザ グループを選択します。
ステップ 3 [予算エントリ] タブを選択します。
ステップ 4 メイン ページで、予算エントリを選択します。
ステップ 5 [編集] をクリックします。
ステップ 6 [予算エントリの編集] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[エントリ名] フィールド	予算エントリの名前。

名称	説明
[予算額] フィールド	1 カ月あたりの予算額。
[年] ドロップダウン リスト	年を選択します。
[月] ドロップダウン リスト	月を選択します。
[リピートエントリ] ドロップダウン リスト	同じ予算額を繰り返す月の数を選択します。

ステップ 7 [保存] をクリックします。

予算エントリの削除

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [サマリー] の順に選択します。
ステップ 2 左側のパネルから、ユーザ グループを選択します。
ステップ 3 [予算エントリ] タブを選択します。
ステップ 4 メイン ウィンドウで、予算エントリを選択します。
ステップ 5 [削除]（X）をクリックします。
ステップ 6 [エントリの削除] ダイアログボックスで、削除を確認します。

第 12 章

複数ディスクの VM プロビジョニング

この章は、次の内容で構成されています。

- 複数ディスクの VM プロビジョニングについて，227 ページ
- 複数ディスクの VM プロビジョニングのワークフロー，228 ページ
- 複数ディスクを含むテンプレートについて，228 ページ
- ディスク カテゴリの割り当て，228 ページ
- ストレージ ポリシーの定義，229 ページ
- カタログの作成，233 ページ
- VM ディスクの作成，239 ページ

複数ディスクの VM プロビジョニングについて

Cisco UCS Director では、テンプレートからの複数ディスクの仮想マシン（VM）プロビジョニングがサポートされています。 1 つまたは複数のデータストアで VM ディスク プロビジョニングを設定できます。 また、テンプレートでの追加ディスクごとに個別のディスク ポリシーを設定できます。

Cisco UCS Director では、ディスクは次のカテゴリに分類されています。

- システム
- データ
- データベース
- スワップ
- ログ

（注） Cisco UCS Director で定義されているディスクのカテゴリは、ディスクのラベリング専用です。

複数ディスクの VM プロビジョニングのワークフロー

手順

ステップ 1 複数のディスクを使用している 1 つのテンプレートの可用性を検証します。
ステップ 2 ディスクのカテゴリを割り当てます。
ステップ 3 ストレージ ポリシーを定義します。
ステップ 4 テンプレート カタログを作成します。

複数ディスクを含むテンプレートについて

複数ディスクの仮想マシン（VM）をプロビジョニングするには、複数のディスクを含むテンプレート（イメージ）が使用可能である必要があります。 VM のプロビジョニングに複数のディスクを含むテンプレートを使用する前に、個々のディスクに対するディスク カテゴリを割り当てる必要があります。

ディスク カテゴリの割り当て

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。
ステップ 2 VMware クラウドを選択し、[イメージ] タブを選択します。
ステップ 3 複数ディスクを含むテンプレートを選択します。
ステップ 4 ツールバーで、[詳細の表示] ボタンをクリックします。
ステップ 5 [ディスク] タブをクリックします。
ステップ 6 ディスクを選択します。
ステップ 7 [ディスクタイプの割り当て] をクリックします。
ステップ 8 ディスク タイプを選択します。
この属性の種類は次のとおりです。

- システム

- データ
- データベース
- スワップ
- ログ

ステップ 9 [送信] をクリックします。

ストレージ ポリシーの定義

ストレージポリシーは、データストアスコープなどのリソース、使用するストレージのタイプ、容量の最小条件、遅延などを定義します。 ストレージポリシーには、複数のディスクに対して追加のディスク ポリシーを設定できるようにするオプションや、サービスリクエストの作成中にエンド ユーザがデータストアを選択できるようにするオプションなどもあります。

Cisco UCS Director は、複数データストア上の複数ディスクでの VM のプロビジョニングをサポートしています。 システム、データ、データベース、スワップ、およびログの 5 つのタイプがあります。 システム ディスク ポリシーは最初に設定され、他のディスクは必要に応じて後で設定されます。 各ディスク タイプに対して個別にディスク ポリシーを設定することも、各ディスクに対してデフォルトのシステム ディスク ポリシーを選択することもできます。

追加のディスクのポリシーを使用する場合は、複数ディスク テンプレートに対してカタログを作成する際に、[単一データストアのすべてのディスクをプロビジョニングします] オプションを必ずオフにしてください。 カタログ作成の詳細については、カタログの追加, （233 ページ） を参照してください。

また、Cisco UCS Director は、エンド ユーザに対してデータストアの選択を有効または無効にするオプションを提供することにより、VM プロビジョニングに対するサービス リクエストの作成中のデータストアの選択をサポートしています。 選択の対象としてリストされるデータストアは、サービス リクエストの作成時に選択された VDC に関連付けられているストレージ ポリシーで指定されているスコープ条件によって決定されます。

ストレージ ポリシーの作成

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ポリシー] > [仮想/ハイパーバイザポリシー] > [ストレージ] を選択します。

ステップ 2 [VMwareストレージポリシー] タブを選択します。

ステップ 3 [追加]（+）をクリックします。

ステップ 4 [ストレージリソース割り当てポリシーの追加] の [システムディスクポリシー] ダイアログ ボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[ポリシー名] フィールド	ポリシーの名前。 この名前は、カタログの定義時に使用されます。
[ポリシーの説明] フィールド	ポリシーの説明。
[クラウド名] ドロップダウン リスト	リソース割り当てが発生するクラウドを選択します。
システム ディスク スコープ	
[リンク済み複製の使用（Use Linked Clone）] チェック ボックス	リンク済み複製を使用するには、チェックボックスをオンにします。 リンク済み複製かフル複製かは、ストレージポリシーのリンク済み複製の選択によって異なります。
[ストレージプロファイル（Storage Profile）] ドロップダウンリスト	関連付けられたストレージプロファイルを使用して VM をプロビジョニングするにはストレージ プロファイルを選択します。
[データストア/データストアクラスタ範囲（Data Stores/Data Store Clusters Scope）] ドロップダウンリスト	展開の範囲を狭める場合は、すべてを使用するか、または選択済みのデータストアを含めるかを選択します。
[選択済みのデータストア（Selected Data Stores）] フィールド	[選択済みデータストアを含める（Include Selected Datastores）] が選択されている場合、ストレージプロファイルに関連付けられたデータストアを選択できます。
[共有データストアのみの使用（Use Shared Data Store Only）] チェックボックス	共有データストアのみを使用するには、このチェックボックスをオンにします。
ストレージ オプション	
[ローカルストレージの使用（Use Local Storage）] チェックボックス	ローカル ストレージを使用するには、このチェックボックスをオンにします。 デフォルトでは、このフィールドはオンです。
[NFSの使用（Use NFS）] チェックボックス	NFS ストレージを使用するには、このチェックボックスをオンにします。 デフォルトでは、このフィールドはオンです。

名称	説明
[SANの使用（Use SAN）] チェックボックス	SANストレージを使用するには、このチェックボックスをオンにします。 デフォルトでは、このフィールドはオンです。
[フィルタ条件（Filter Conditions）] チェックボックス	満たす必要がある 1 つ以上の条件チェックボックスをオンにします。 これらの条件を満たしていないホストまたはデータストアは、考慮の対象から除外されます。 複数の条件を選択した場合、選択したすべての条件を満たす必要があります。
[テンプレートのオーバーライド（Override Template）] チェックボックス	テンプレートのプロパティをオーバーライドするには、このチェックボックスをオンにします。 シン プロビジョニングの使用やカスタムディスク サイズなど、カスタム設定を入力するオプションが提供されます。
[シンプロビジョニングの使用（Use Thin Provisioning）] チェックボックス	VM ストレージのプロビジョニングの際にシンプロビジョニングを使用するには、このチェックボックスをオンにします。 シンプロビジョニングは、物理ストレージ容量の動的割り当てをイネーブルにし、VMストレージの使用率が向上します。 （注） このオプションは、[テンプレートのオーバーライド] がオンのときに表示されます。
[手動ディスクサイズ（Manual Disk Size）]	カスタムディスク サイズは、VM のプロビジョニングに使用されるテンプレートのディスク サイズをオーバーライドします。 （注） このオプションは、[テンプレートのオーバーライド] がオンのときに表示されます。
VM ライフサイクルのサイズ変更オプション	
[ディスクのサイズ変更を許可（Allow Resizing of Disk）] チェックボックス	このチェックボックスをオンにすると、プロビジョニングする前に、VMディスク サイズを選択できます。

名称	説明
[ディスクの許容値(GB単位)] フィールド	VM のプロビジョニングのためのディスク サイズ値。 （注） このオプションは、[ディスクのサイズ変更を許可する] がオンのときに表示されます。
[スコープからのデータストアの選択をユーザに許可します] チェックボックス	このチェックボックスをオンにすると、ユーザはサービス リクエストの作成中にデータストアを選択できます。

ステップ 5 [次へ] をクリックします。

ステップ 6 [追加のディスクポリシー] ペインで、設定するディスク タイプを選択します。
デフォルトでは、ディスクのディスク ポリシーは、[システムディスクポリシー] です。

ステップ 7 [鉛筆] アイコンをクリックすると、[ディスクポリシーエントリの編集] ダイアログボックスが表示されます。

ステップ 8 ディスクのポリシーを設定するには、[システムディスクポリシーと同じ] チェックボックスをオフにします。

ステップ 9 [エントリの編集] ダイアログボックスで、ディスク タイプの [ディスク スコープ] と [ストレージ オプション] を選択します。

ステップ 10 [送信] をクリックします。

ステップ 11 必要に応じて、他のディスク タイプの設定を続行します。

ステップ 12 [送信] をクリックします。

（注） その他のディスク ポリシーで作成されたストレージ ポリシーを使用するには、VM のプロビジョニングに使用される VDC とポリシーを関連付けます。

カタログの作成

カタログの追加

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ポリシー] > [カタログ] の順に選択します。

ステップ 2 [カタログ] タブを選択します。

ステップ 3 [追加]（+）をクリックします。

ステップ 4 [カタログの追加] ダイアログボックスで、追加するカタログ タイプを選択します。

ステップ 5 [送信] をクリックします。

ステップ 6 [カタログの作成] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[基本情報] ペイン	
[カタログ名] フィールド	カタログの名前。 （注） カタログを作成した後では、名前は変更できません。
[カタログの説明] フィールド	カタログの説明。
[カタログタイプ] ドロップダウン リスト	カタログのタイプ。 この属性の種類は次のとおりです。 • [標準]：クラウドリストにあるイメージを使用して VM プロビジョニングのためのカタログを作成する場合に使用します。 • [詳細]：カタログ項目などのオーケストレーション ワークフローを公開する場合に使用します。 • [サービスコンテナ]：カタログ項目としてアプリケーション コンテナを公開する場合に使用します。 • [VDI]：カタログ項目として Xen Desktop を公開する場合に使用します。

名前	説明
[カタログアイコン] ドロップダウン リスト	このカタログに関連付けるイメージのアイコンをリストから選択します。 このアイコンは、このカタログを使用してサービスリクエストを作成するときに表示されます。
[すべてのグループに適用] チェックボックス	すべてのグループがこのカタログを使用できるようにするには、このチェックボックスをオンにします。 他のグループが使用できないようにするには、このチェックボックスをオフにします。
[選択されたグループ]チェックボックス リスト	[選択した項目] ダイアログボックスに含まれているグループのチェックボックスをオンにします。 オンにしたグループは、新しいVMをプロビジョニングするときにこのカタログを使用します。
[エンドユーザへ公開（Publish to end users）] チェックボックス	このカタログがエンドユーザに表示されないようにするには、このチェックボックスをオフにします。 このチェックボックスをオフにしない場合、このカタログはシステムのエンドユーザに表示されます。
[クラウド名] ドロップダウン リスト	VM プロビジョニング用のイメージがあるクラウドを選択します。
[イメージ] フィールド	このカタログを使用してVMをプロビジョニングするときに使用するイメージのタイプ（イメージを構成する Windows ファイル、Linux ファイル、およびそのほかのファイルなどの既存のテンプレート）を選択します。 グループ管理者である場合や、カタログを作成する権限のあるグループのエンドユーザである場合は、属しているグループに割り当てられたイメージがこのフィールドに表示されます。 MSP 管理者である場合は、ご自身の MSP 組織と MSP 組織内のグループに割り当てられたイメージがこのフィールドに表示されます。

名前	説明
[Windowsライセンスプール] フィールド	Windows ライセンスを選択します。 （注） このオプションは、Windows イメージが選択されて場合にのみ表示されます。 （注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。
[単一データストアのすべてのディスクをプロビジョニング] チェックボックス	単一データストアのすべてのディスクをプロビジョニングするには、このチェックボックスをオンにします。 ストレージ ポリシーで各ディスクに対して設定されているデータストアを使用することも選択できます。 複数ディスク ストレージ ポリシーの作成の詳細については、8-1ページの「ポリシーの管理」を参照してください。 （注） このオプションは、選択されたテンプレートに複数のディスクがある場合に表示されます。 （注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。
[サービスコンテナテンプレート名] ドロップダウン リスト	リストからテンプレートを選択します。 （注） このオプションは、カタログ タイプがサービス コンテナである場合に表示されます。
[XenDesktop Catalog（XenDesktop カタログ）] ドロップダウン リスト	Desktop Studio で設定された XenDesktop 専用カタログのリストからテンプレートを選択します。 （注） このオプションは、カタログ タイプが [VDI] である場合に表示されます。
[フォルダの選択] ドロップダウン リスト	このカタログの作成先となるフォルダを選択します。 （注） ドロップダウン リストには、デフォルトで使用可能なフォルダの名前が含まれます。 使用可能なフォルダを選択するか、または [+] アイコンをクリックして新しいフォルダを作成します。 [新しいフォルダの追加] ダイアログボックスで、フォルダ名を指定し、そのフォルダのアイコンを選択します。

ステップ 7 [次へ] をクリックします。

ステップ 8 [アプリケーションの詳細] ペインで、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[カテゴリ] ドロップダウン リスト	VDC カテゴリを選択します。
[サポートの問い合わせ先の電子メールアドレス] フィールド	このカタログ項目を使用してサービス リクエストが作成されたときに通知が送信される問い合わせ先の電子メール アドレス。
[OSの指定] ドロップダウン リスト	VMのプロビジョニング時に、VMにインストールされる OS のタイプを選択します。 （注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。
[他のOSの指定] フィールド	[OSの指定] リストにない OS。 （注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。
[アプリケーションの指定]チェックボックス リスト	[項目の選択] ダイアログボックスのアプリケーションのチェックボックスをオンにします。 これらのアプリケーションはプロビジョニング中に VM にインストールされます。 （注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。
[他のアプリケーションの指定] フィールド	[項目の選択] ダイアログボックスにないアプリケーション。 （注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。
[アプリケーションコード] フィールド	VM名に使用するアプリケーション コード。 アプリケーション コードは 1 ～ 4 文字です（例：W2K3、DB、WS）。 VM 名のシステム ポリシーでアプリケーション コードを使用するには、変数 ${APPCODE} を使用します。 たとえば VM 名のテンプレートが vm-${GROUP_NAME}-${APPCODE} の場合、システムポリシーを使用してプロビジョニングされた VM の名前は vm-groupname-W2K3 になります。 （注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。

ステップ 9 [次へ] をクリックします。

ステップ 10 [ユーザクレデンシャル] ペインで、次のフィールドに値を入力します。

（注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。

名前	説明
[クレデンシャルのオプション] ドロップダウン リスト	ユーザに対し、VM アクセス クレデンシャル（共有）の取得を許可するか、または禁止するかを選択します。
[ユーザID] フィールド	ユーザ ID。 （注） このオプションは、[クレデンシャルのオプション] の下でいずれかの共有オプションを選択した場合に表示されます。
[パスワード] フィールド	ユーザのパスワード。 （注） このオプションは、[クレデンシャルのオプション] の下でいずれかの共有オプションを選択した場合に表示されます。

ステップ 11 [次へ] をクリックします。

ステップ 12 [カスタマイズ] ペインで、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[プロビジョニング後のカスタムアクション] チェックボックス	VM のプロビジョニング後に実行されるオーケストレーション ワークフローを有効にするには、このチェックボックスをオンにします。
[ワークフロー] ドロップダウン リスト	プロビジョニング用に定義されたワークフローを選択します。 （注） このオプションは、[プロビジョニング後のカスタムアクション] がオンの場合に表示されます。
[VMアプリケーションの請求間隔] ドロップダウン リスト	[毎時] または [毎月] を選択します。

名前	説明
[アクティブなVMアプリケーションのコスト] フィールド	テンプレートに含まれているアプリケーションのコスト。 （注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。
[非アクティブなVMアプリケーションコスト] フィールド	時間あたりまたは月あたりに、非アクティブな VM のカタログにかかるコスト。 （注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。

ステップ 13 [次へ] をクリックします。

ステップ 14 [VMアクセス] ペインで、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[Webアクセス設定] チェックボックス	VM への Web アクセスを有効にするには、このチェックボックスをオンにします。 VM への Web アクセスを無効にするには、このチェックボックスをオフにします。
[URL] フィールド	VM の URL。 （注） このオプションは、[Webアクセス設定] がオンの場合に表示されます。
[ラベル] フィールド	この URL に定義されたラベル （注） このオプションは、[Webアクセス設定] がオンの場合に表示されます。
[リモートデスクトップのアクセス設定] チェックボックス	VM へのリモートアクセスを有効にするには、このチェックボックスをオンにします。 VM へのリモート アクセスを無効にするには、このチェックボックスをオフにします。
[サーバ] フィールド	サーバのリモート アクセス用 IP アドレス。 （注） このオプションは、[リモートデスクトップのアクセス設定] がオンの場合に表示されます。
[ポート] フィールド	サーバのリモート アクセス用ポート番号。 （注） このオプションは、[リモートデスクトップのアクセス設定] がオンの場合に表示されます。

名前	説明
[ラベル] フィールド	このリモート アクセス用に定義されたラベル （注） このオプションは、[リモートデスクトップのアクセス設定] がオンの場合に表示されます。

ステップ 15 [次へ] をクリックします。

ステップ 16 [サマリー] ページのカタログ情報を確認します。

ステップ 17 [送信] をクリックします。

VM ディスクの作成

[VM] アクション ボタンから使用可能な [VMディスクの作成] オプションを使用して、プロビジョニングまたは検出された VM にカスタム サイズのディスクを追加できます。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 左側のペインで、クラウドの名前を選択します。

ステップ 3 [VM] タブを選択します。

ステップ 4 リストから VM を選択します。

ステップ 5 ツールバーの右側にある下矢印をクリックすると、VM オプションのドロップダウン リストが表示されます。

ステップ 6 [VMディスクの作成] を選択します。

ステップ 7 [VMディスクの作成] ダイアログ ボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[VM名] フィールド	VM の名前。 VM の名前は編集できません。
[新しいディスクサイズ(GB)] フィールド	VM のディスク サイズ（GB 単位）。

名称	説明
[ディスクの種類の選択] ドロップダウン リスト	ディスク ラベルを選択します。 この属性の種類は次のとおりです。 • システム • データ • データベース • スワップ • ログ
[データストアの選択] ドロップダウン リスト	データストアを選択します。 データストアの選択は VM の VDC に関連付けられたストレージ ポリシーによって異なります。
[Thinプロビジョニング] チェックボックス	VM にシン プロビジョニングされたディスクを追加する場合に、このチェックボックスをオンにします。 （注） シン プロビジョニングは、物理ストレージ容量の動的割り当てをイネーブルにし、VM ストレージの使用率が向上します。

ステップ 8 [作成] をクリックします。

第 13 章

チャージバック モジュールの使用方法

この章は、次の内容で構成されています。

- チャージバック機能について，241 ページ
- 予算ポリシー，242 ページ
- コスト モデル，243 ページ
- VDC を編集してコスト モデルを含める，248 ページ
- パッケージ ベースのコスト モデル，251 ページ
- ストレージ階層コスト モデル，253 ページ
- 階層へのデータストアの割り当てについて，254 ページ
- チャージバック レポート，255 ページ
- 変更レコードについて，259 ページ
- チャージバックの計算，260 ページ

チャージバック機能について

Cisco UCS Director のチャージバック モジュールによって、仮想インフラストラクチャのコストを詳細に把握することができます。 また、コストモデルを定義して、部署内や組織内のポリシーに割り当てることができます。 リソースのコストを正確に計算するため、仮想マシン（VM）の測定データを頻繁に収集します。

注目 チャージバック モジュールは、アプリケーション コンテナ内にある物理サーバでのみサポートされます。

以下に、チャージバック モジュールの機能を示します。

- 柔軟性：組織の要件に基づいて、固定費、ワンタイム コスト、割り当てコスト、使用コスト、およびこれらすべての組み合わせを提供します。
- 再利用可能なコストモデル：標準化されたコストモデルまたはテンプレートを使用してVMにコスト モデルを割り当てます。 これらのテンプレートは、新しい環境にコスト モデルを迅速に適用するために使用します。
- レポート作成：仮想インフラストラクチャのコストとリソースの使用状況のさまざまな概要レポートと比較レポートを生成します。 これらのレポートは、PDF、CSV、XLSの各形式にエクスポートすることができ、Web ブラウザで表示できます。
- 上位 5 件のレポート：VM のコスト、CPU、メモリ、ストレージ、およびネットワークのコストが高い上位 5 位までの組織またはグループのレポートをモニタします。
- ダッシュボード：組み込みダッシュボードと広範な視覚的ウィジェットのセットを使用して、リアルタイムで VM 測定情報とチャージバックをモニタし、分析します。

予算ポリシー

リソース全体のアカウンティングはチャージバック モジュールによって処理されます。 チャージバックに加えて、個別のグループまたは組織を予算ポリシーに関連付ける必要があります。 予算ポリシーでは、予算の監視と予算超過を有効または無効にできます。

予算ポリシーの設定

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [ユーザとグループ] の順に選択します。

ステップ 2 [ユーザグループ] タブを選択します。

ステップ 3 グループを選択し、[予算ポリシー] をクリックします。

ステップ 4 [予算ポリシー] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[予算の監視の有効化] チェックボックス	オンにすると、グループの予算使用状況が監視されます。 オフにすると、このグループのすべての予算エントリは無視されます。

名称	説明
[予算超過を許容] チェックボックス	オンにすると、グループ メンバーに対しプロビジョニングされた予算の超過が許可されます。オフにすると、予算をすべて消化した場合に、新たな予算が追加されるまではリクエストがすべて却下されます。

ステップ 5 [保存] をクリックします。

コスト モデル

コスト モデルを使用して、仮想リソースの CPU、RAM、ストレージなどのユニット レベルのコストを定義します。 これらのコストは、仮想インフラストラクチャ内の VM のチャージバック計算に使用されます。 コスト モデルは、線形モデルでコストの定義を提供し、コストはユニット レベルで定義できます。

VM の特定のリソースのコストは、その VM に割り当てられているユニット数に基づいて計算されます。 たとえば、1 GB の RAM のコストをコスト モデル内で定義し、そのユニット コストを使用して特定の VM のための RAM のコストを算出します。

1 回限りのプロビジョニング コスト、アクティブ/非アクティブな VM のコスト、プロビジョニング済み、予約済み、または使用済みの CPU、メモリなどのリソースのコストを定義できます。 これらのコストを使用して、使用量に基づいて VM のコストを計算します。

（注） コスト モデルを VDC またはアプリケーション コンテナにマッピングできます。 コスト モデルをアプリケーション コンテナにマッピングする方法の詳細については、『*Cisco UCS Director Application Container Guide*』を参照してください。

コスト モデルの作成

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニューバーで、[ポリシー]>[仮想/ハイパーバイザポリシー]>[サービスの提供] を選択します。

ステップ 2 [コストモデル] タブを選択します。

ステップ 3 [追加]（+）をクリックします。

ステップ 4 [コストモデルの追加（Add Cost Model）] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[コストモデル名] フィールド	コスト モデルの名前。
[コストモデルの説明] フィールド	コスト モデルの説明。
[コストモデルタイプ] ドロップダウン リスト	コスト モデルのタイプを選択します。 [標準] は線形コスト モデルを示します。 [詳細] はパッケージまたはスクリプトに基づくコスト モデルを示します。 [詳細] コスト モデルの説明と使用方法については、13-6 ページの「パッケージ ベースのコスト モデル」の項を参照してください。 該当する場合は [HyperV] も選択できます。
[請求期間（Charge Duration）] ドロップダウン リスト	VM リソースのコストを定義する頻度を選択します。 次のいずれかのオプションを使用できます。 • [毎時（Hourly）] : リソースのコストを時間単位で指定する場合。 • [毎日（Daily）] : リソースのコストを日次単位で指定する場合。 • [毎週（Weekly）] : リソースのコストを週単位で指定する場合。 • [毎月（Monthly）] : リソースのコストを月単位で指定する場合。 • [毎年（Yearly）] : リソースのコストを年単位で指定する場合。
仮想マシンのコスト パラメータ	
固定コスト（通貨 : USD）	

名称	説明
[一括での支払いのコスト] フィールド	VM のプロビジョニングの 1 回限りの固定コスト。
VM コスト（通貨：USD）	
[アクティブなVMのコスト] フィールド	アクティブ状態の VM の時間あたりのコスト。
[非アクティブなVMのコスト] フィールド	非アクティブ状態の VM の時間あたりのコスト。
CPU コスト	
[CPUチャージユニット] ドロップダウン リスト	CPU のチャージ単位（GHz またはコア）を選択します。
[プロビジョニング済みCPUのコスト] フィールド	1 時間あたり、CPU チャージ単位あたりのプロビジョニングされた CPU のコスト。 VM に対してプロビジョニングされた CPU の額が考慮されます。 （注） CPU チャージ単位が GHz の場合はコストです。 [使用済みCPUコスト]フィールドに値を入力する場合は、このフィールドは空白にしてください。
[予約済みCPUコスト] フィールド	1 時間あたり、GHz あたりの予約 CPU のコスト。 VM に対して実際に予約された CPU の額（プロビジョニングされた CPU のコスト計算を含む）が考慮されます。 予約 CPU の追加コスト（プロビジョニング コスト以外）がある場合は、ここに入力します。 たとえば、プロビジョニング コストが 1 ドルで、予約コストが 1.4 ドルの場合、追加の予約額を指定する必要があります。この例ではこれは 1.4 ドル – 1 ドル = 0.4 ドルです。 （注） CPU チャージ単位が GHz の場合はコストです。 [使用済みCPUコスト]フィールドに値を入力する場合は、このフィールドは空白にしてください。

名称	説明
[使用済みCPUコスト] フィールド	1 時間あたり、GHz あたりの使用 CPU のコスト。 コストは実際の CPU 使用量に基づいています。 このコストでは、プロビジョニング コストと予約コストは考慮されません。 [使用済みCPUコスト] フィールドに値を入力する場合は、プロビジョニング コストと予約コストのフィールドは空白のままにしておきます。 （注） CPU チャージ単位が GHz の場合はコストです。
メモリ コスト	
[プロビジョニング済みメモリのコスト] フィールド	1 時間あたり、GB あたりのプロビジョニングされたメモリのコスト。
[予約済みメモリコスト] フィールド	1 時間あたり、GB あたりの予約されたメモリのコスト。
[使用済みメモリコスト] フィールド	1 時間あたり、GB あたりの使用メモリのコスト。
ネットワーク コスト	
[受信済みネットワークデータのコスト] フィールド	1 時間あたり、GB あたりの受信データのコスト。
[転送済みネットワークデータのコスト] フィールド	1 時間あたり、GB あたりの送信データのコスト。
ストレージ コスト	
[コミット済みストレージコスト] フィールド	1 時間あたり、GB あたりのコミットされたストレージのコスト。
[コミットされていないストレージのコスト] フィールド	1 時間あたり、GB あたりのコミットされていないストレージのコスト。 未使用だがプロビジョニングされているストレージは、コミットされていないストレージとして定義されます。
物理サーバのコスト パラメータ	
固定コスト（通貨：USD）	

名称	説明
[一括での支払いのコスト] フィールド	サーバのプロビジョニングの 1 回限りの固定コスト。
CPU コスト	
[CPUチャージユニット] ドロップダウン リスト	CPU のチャージ単位（GHz またはコア）を選択します。
[プロビジョニング済みCPUのコスト] フィールド	1 時間あたり、CPU チャージ単位あたりのプロビジョニングされた CPU のコスト。 サーバに対してプロビジョニングされた CPU の額が考慮されます。 （注） CPU チャージ単位が GHz の場合はコストです。 [使用済みCPUコスト]フィールドに値を入力する場合は、このフィールドは空白にしてください。
メモリ コスト	
[プロビジョニング済みメモリのコスト] フィールド	1 時間あたり、GB あたりのプロビジョニングされたメモリのコスト。
[使用済みメモリコスト] フィールド	1 時間あたり、GB あたりの使用メモリのコスト。
ストレージ コスト	
[コミット済みストレージコスト] フィールド	1 時間あたり、GB あたりのコミットされたストレージのコスト。
ブレード コスト（通貨：USD）	
[完全長ブレードのコスト（Full Length Blade Cost）] フィールド	1 時間あたりの完全長ブレード サーバのコスト。 （注） このフィールドは、HyperV がコスト モデル タイプとして選択されている場合は表示されません。

名称	説明
[ハーフ長ブレードのコスト（Half Length Blade Cost）] フィールド	1 時間あたりのハーフ長ブレード サーバのコスト。 （注） このフィールドは、HyperV がコスト モデル タイプとして選択されている場合は表示されません。

ステップ 5 [追加] をクリックします。

VDC を編集してコスト モデルを含める

新しく作成したコスト モデルを割り当てるよう、既存の VDC を追加または編集することができます。 既存の VDC を編集したり、新しい VDC を作成したりして、これらの VDC に対して 1 つのコスト モデルを割り当てることができます。

コスト モデルが VDC に割り当てられると、その VDC 内のすべての VM は、高度なコスト モデルに基づいてチャージされます。 標準タイプのコスト モデルを持つ VDC 内のすべての VM は、引き続き標準のコスト モデルに従ってチャージされます。

VDC へのコスト モデルの追加

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ポリシー] > [仮想/ハイパーバイザポリシー] > [仮想データセンター] を選択します。

ステップ 2 [VDC] タブを選択します。

ステップ 3 コスト モデルに追加する VDC を選択します。

ステップ 4 [追加]（+）をクリックします。

ステップ 5 [vDCの追加（Add vDC）] ダイアログボックスで、アカウント タイプを選択してから [送信（Submit）] をクリックします。

ステップ 6 [VDCの追加] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[VDC名] フィールド	VDC の名前。

名称	説明
[ロック済みのvDC] チェックボックス	今後の導入で VDC を使用できないようにするには、このチェックボックスをオンにします。この VDC 内の既存の VM に対するアクションは無効になります。 今後の導入で VDC を使用できるようにするには、このチェックボックスをオフにします。
[vDCの説明] フィールド	VDC 固有の説明。
[グループ] ドロップダウン リスト	VDC の設定対象グループを選択します。
[クラウド名] ドロップダウン リスト	VDC の設定対象クラウドを選択します。
承認者と連絡先	
[第1承認者のユーザ名] フィールド	第 1 レベルでサービス リクエストを承認する必要があるユーザ。 [選択（Select）] をクリックして、該当するユーザのチェック ボックスをオンにします。 複数のユーザを選択できます。
[第2承認担当者のユーザ名] フィールド	第 2 レベルでサービス リクエストを承認する必要があるユーザ。 [選択（Select）] をクリックして、該当するユーザのチェック ボックスをオンにします。 複数のユーザを選択できます。
[すべてのユーザからの承認が必要（Approval Required from all users）] チェック ボックス	第 1 レベルおよび第 2 レベルの承認担当者として選択されたすべてのユーザからの承認を必要とする場合は、このチェック ボックスをオンにします。
[承認依頼通知の数（Number of Approval Requests Reminders）] フィールド	サービス リクエストを承認するよう通知する電子メールを承認担当者に送信する回数。 デフォルトでは、サービス リクエストが承認または拒否されるまで、24 時間ごとに 1 回通知電子メールを送信します。
[通知間隔（時間）（Reminder Interval (Hours)）] フィールド	承認担当者に通知電子メールを送信する時間間隔。 デフォルトでは、24 時間ごとに 1 回通知電子メールを送信します。

名称	説明
[プロバイダーのサポート用電子メールアドレス] フィールド	連絡先またはユーザの電子メール アドレス。この VDC を使用した VM のプロビジョニングに関する通知を受信するユーザ。
[電子メールアドレスへの通知をコピー] フィールド	この VDC に関する通知をコピーする 2 番目の連絡先の電子メール。
ポリシー	
[システムポリシー] ドロップダウン リスト	VDC に適用できるシステム ポリシーを選択します。
[コンピューティングポリシー] ドロップダウン リスト	VDCに適用できるコンピューティング ポリシーを選択します。
[ネットワークポリシー] ドロップダウン リスト	VDC に適用できるネットワーク ポリシーを選択します。
[ストレージポリシー] ドロップダウン リスト	VDC に適用できるストレージ ポリシーを選択します。
[コストモデル] ドロップダウン リスト	VDCに適用できるコストモデルを選択します。
[サービスリクエストサマリーと電子メールページへのコストの表示を無効化] チェックボックス	この VDC の SR サマリーと電子メール ページでのコストの表示を無効にするには、このチェックボックスをオンにします。
[ユーザアクションポリシー] ドロップダウン リスト	VMのプロビジョニング後にオーケストレーション ワークフローの実行に使用するポリシーを選択します。 選択されたワークフローは、VDC 内の VM に対するアクション ボタンとして表示されます。
エンド ユーザ セルフサービス ポリシー	
[VMの電力管理] チェックボックス	この VDC に属している VM に対してすべての VM 電源管理アクションを実行できるようにするには、このチェックボックスをオンにします。

（注） エンド ユーザ セルフサービス ポリシーには、VM のサイズ変更、VM スナップショット管理、VM の削除、VM ディスク管理、VM ネットワーク管理が含まれます。 詳細については、仮想データセンターの追加, （170 ページ）を参照してください。

ステップ 7 [追加] をクリックします。

VDC を編集してコスト モデルに含める

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ポリシー] > [仮想/ハイパーバイザポリシー] > [仮想データセンター] を選択します。

ステップ 2 [VDC] タブを選択します。

ステップ 3 コスト モデルに追加する VDC を選択します。

ステップ 4 [カテゴリの管理] をクリックします。

ステップ 5 編集するカテゴリを選択します。

ステップ 6 [編集] をクリックします。

ステップ 7 [アプリケーションカテゴリの編集] ダイアログボックスで、ドロップダウン リストから [コスト モデル] および [ポリシーの導入] を選択します。

ステップ 8 [保存] をクリックします。

パッケージ ベースのコスト モデル

パッケージ ベースのコスト モデルでは、システム リソースのコストを個別の定義としてではなく、パッケージとして定義することができます。 要件に基づいて、さまざまなパッケージを選択できます。 このタイプのコスト モデルは、非線形モデルに適しています。

（注） Cisco UCS Director は、CPU メモリ（サーバ）パッケージの定義をサポートしています。

このタイプのコスト モデルでは、定義は、利用可能なリソース パッケージに基づいています。モデルの形式は以下のとおりです。

C – M:X

C は CPU コア数です。

M はメモリ（GB）です。

X は C と M の月間コストの組み合わせです。

たとえば、2-4:200 のエントリを持つパッケージは、CPU コアが 2、メモリが 4 GB、およびこのパッケージの月間コストが 200 ドルであることを意味します。

次の形式を使用して、複数のパッケージを定義できます：C1-M1:X1,C2-M2:X2,.....,CN-MN:XN

たとえば、次のようにします：1-1:50,1-2:70,1-4:90,2-4:150,2-6:170,2-8:190,4-8:350,4-12:380,4-16:400 最初のエントリ 1-1:50 は、コア CPU が 1、メモリが 1 GB で、月間コストが 50 ドルのパッケージです。

（注） これらのエントリは、コスト パッケージの要件に合わせて随時に編集できます。

パッケージ ベースのコスト モデルの作成

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニューバーで、[ポリシー]>[仮想/ハイパーバイザポリシー]>[サービスの提供] を選択します。

ステップ 2 [コストモデル] タブを選択します。

ステップ 3 新しいコスト モデルを作成するには、[追加]（+）をクリックします。

ステップ 4 [コストモデルタイプ] フィールドの下で、[詳細] オプションを選択します。

ステップ 5 [高度なコストモデル] フィールドに、次に示すスクリプトを貼り付けます。

```
/*********************************/
var CPU_MEMORY_COST =
1-2:81,1-4:95,1-8:109,2-4:162,2-6:176,2-8:189,2-16:378,4-12:352,4-16:378;
/*********************************/
/* 上記のようにコスト パッケージを定義します。
コスト パッケージは次の形式で指定できます：
C-M:X。
C は CPU コアの数です。
M はメモリ（GB）です。
X は C および M を組み合わせた月次コストです。
たとえば 2-4: 162 は、CPU コアの数 = 2、メモリ = 4 GB、このパッケージのコストは 1 ヵ月あたり 162 ドルであることを示します。 */
/* 複数のパッケージを定義するときは、次の形式で定義します：C1-M1:X1,C2-M2:X2,
.....,CN-MN:XN
```

標準パッケージは、スクリプトの先頭で CPU_MEMORY_COST 変数を使用して定義されています。

コスト パッケージ要件に合わせてこの変数を編集できます。 */

/* 参考：使用するストレージ コストはストレージ階層コスト モデル定義に基づいています。 */

/* 以下のスクリプトは編集しないでください */

```
computeChargeback(data);
function computeChargeback(data)
{
var map = chargeBackAPI.getCPUMemCostModelMap(CPU_MEMORY_COST);
var cpuCores = data.getVmMeter().getCpuCores();
var memory = data.getVmMeter().getAllocMemGB();
var serverCost = chargeBackAPI.getCostForItem(map,cpuCores, memory);
serverCost = serverCost / (24 * 30);
var storageTierCost = chargeBackAPI.getStorageCostForItem(data.getVmMeter().getVmId());
var storageGB = (data.getVmMeter().getCommittedDiskGB()) +
(data.getVmMeter().getUncommittedDiskGB());
var committedDiskGBCost = (data.getVmMeter().getCommittedDiskGB()) * storageTierCost;
var unCommittedDiskGBCost = (data.getVmMeter().getUncommittedDiskGB()) * storageTierCost;
var storageCost = (storageGB * storageTierCost) / (24 * 30);
var totalVMCost = serverCost + storageCost;
var cb = data.getCbSummary();
cb.setCpuCores(cpuCores);
cb.setMemory(memory);
cb.setServerCost(serverCost);
cb.setCommittedDiskGB(data.getVmMeter().getCommittedDiskGB());
cb.setCommittedDiskGBCost(committedDiskGBCost);
cb.setUncommittedDiskGB(data.getVmMeter().getUncommittedDiskGB());
cb.setUncommittedDiskGBCost(unCommittedDiskGBCost);
cb.setTotalCost(totalVMCost);
}
/*******************************/
```

ステップ 6 [追加] をクリックします。

（注） コスト モデルが定義されている場合は、このコスト モデルに基づいて VM のチャージバックを開始するために VDC にコスト モデルを割り当てます。

ストレージ階層コスト モデル

階層形式のストレージに関して複数のコストを定義するためにストレージ階層コスト モデルを使用できます。 現在のストレージ タイプには、ローカル、NFS、SAN、NAS などがあります。 各ストレージ タイプのコストは異なる可能性があり、ストレージ使用コストの計算にこの差異を組み込むことができます。

このモデルを使用して異なる階層に異なるコストを定義した後、これらの階層に既存のデータストアを割り当てることができます。 この階層コストモデルを使用して、コスト面で類似するデータストア タイプをグループ化できます。

各階層にコストを割り当てる必要があります。 このコストは、1 ヵ月 1 GB あたりです。 たとえば、$0.5 を階層に割り当てると、この階層内のすべてのデータストアは、1 ヵ月 1 GB あたり $0.5 課金されます。 デフォルトでは、4 階層がすでに作成されているので、それらにコストを割り当てる必要があります。

階層へのコストの割り当て

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニューバーで、[ポリシー]>[仮想/ハイパーバイザポリシー]>[サービスの提供] を選択します。

ステップ 2 [ストレージ階層のコストモデル] タブを選択します。

ステップ 3 編集する階層を選択します。

ステップ 4 [編集] をクリックします。

ステップ 5 [ディスク コスト（GB）/月] フィールドを編集します。

ステップ 6 [送信] をクリックします。

階層へのデータストアの割り当てについて

データストアを階層に割り当てることにより、その階層に定義されたコストを使用して、そのデータストア内のストレージのコストを計算できます。

データストア内の VM に対するチャージバックを計算するとき、データストアを割り当てた階層によってコストが決定されます。 データストアが階層に割り当てられていない場合、そのデータストアのストレージ コストは高度な（スクリプト ベースの）コスト モデルを使用するときには考慮されません。

フォームによってリソースのコストを定義する標準のコスト モデルを使用する場合は、階層のコストが割り当て済みであり、その階層に対してデータストアが割り当て済みである場合にのみ、ストレージ階層のコストが考慮されます。 ただし、階層がデータストアに割り当てられていない場合、そのデータストアの下の VM のストレージ コストはコスト モデル フォームのストレージ コスト エントリから取得されます。

（注） 階層へのデータストアの割り当ては、標準のコスト モデルのみに適用されます。

階層へデータストアの割り当て

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [ストレージ] の順に選択します。

ステップ 2 左側のパネルからクラウド アカウントを選択します。

ステップ 3 [データストアの容量レポート] タブを選択します。
現在、階層に基づくコストは VMware クラウド アカウントでのみサポートされています。

ステップ 4 階層を割り当てるデータストアを選択します。

ステップ 5 [階層の割り当て] をクリックします。[ストレージ階層] ダイアログボックスが表示されます。

ステップ 6 ドロップダウン リストから階層を選択します。

ステップ 7 [送信] をクリックします。

チャージバック レポート

チャージバックは、使用中および未使用のリソースに対して組織が支払う金額に関する情報を提供します。 この機能を使用して、リソースの消費量とコストを最適化できます。 システム リソース アカウンティングは、毎月の使用量をベースにすることができます。 CPUやメモリの使用率といったリソースが監視および計測されます。

チャージバック レポートはコスト モデルのタイプに基づいています。 チャージバックは、表形式のレポート、サマリー、グラフィカル レポートおよびウィジェットの形式で計算および表示されます。

以下に、利用可能なレポート タイプを示します。

- 表示
  - 今月のサマリー：今月のサマリー コスト レポート（VM、CPU、ストレージ コストなど）。
  - 前月のサマリー：前月のサマリー コスト レポート（VM、CPU、ストレージ コストなど）。
  - 月間リソース アカウンティングの詳細：月単位のリソース アカウンティングの詳細（CPU およびメモリの使用状況の統計情報）。
  - VM レベル リソース アカウンティングの詳細：VM レベルのリソース アカウンティングの詳細。

- VM レベル チャージバックの詳細：チャージバック機能を使用して VM の使用量に適用されるチャージ。

- エクスポート
  - 月間リソース アカウンティングの詳細のエクスポート：リソース アカウンティングの詳細のレポートは、表としてエクスポートできます。
  - VM レベル リソース アカウンティングの詳細のエクスポート：VM レベル リソース アカウンティングの詳細のレポートは、表としてエクスポートできます。
  - VM レベル チャージバックの詳細のエクスポート：チャージバック レポートは、表としてエクスポートできます。

重要 グループまたは特定の仮想データセンター（VDC）用にこれらのレポートを生成できます。これらのレポートには、仮想リソースと物理サーバに関する情報が含まれています。

今月のサマリーの表示

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [チャージバック] の順に選択します。

ステップ 2 左側のパネルからグループを選択します。

ステップ 3 [今月のサマリー（Current Month Summary）] タブを選択して、このグループに属するすべての VM と物理サーバの今月のチャージバックの詳細を確認します。

前月のサマリーの表示

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [チャージバック] の順に選択します。

ステップ 2 左側のパネルからグループを選択します。

ステップ 3 [前月のサマリー（Previous Month Summary）] タブを選択して、このグループに属するすべての VM と物理サーバの前月のチャージバックの詳細を確認します。

月間リソース アカウンティング情報の表示

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [チャージバック] の順に選択します。

ステップ 2 左側のパネルから、グループまたは仮想データセンター（VDC）を選択します。

ステップ 3 [リソースアカウンティング] タブを選択します。

VM レベルのリソース アカウンティングの詳細の表示

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [チャージバック] の順に選択します。

ステップ 2 左側のパネルから、グループまたは仮想データセンター（VDC）を選択します。

ステップ 3 [リソースアカウンティングの詳細] タブを選択して、各 VM リソースの使用率の詳細を表示します。

VM レベルのチャージバックの詳細の表示

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [チャージバック] の順に選択します。

ステップ 2 左側のパネルから、グループまたは仮想データセンター（VDC）を選択します。

ステップ 3 [チャージバック] タブを選択します。

月間リソース アカウンティングの詳細のエクスポート

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [チャージバック] の順に選択します。

ステップ 2 [リソースアカウンティング] タブを選択します。

ステップ 3 ツールバーの右側にある[レポートのエクスポート]アイコンをクリックして、[レポートのエクスポート] ダイアログボックスを表示します。

ステップ 4 ドロップダウン リストから [PDF]、[CSV]、または [XLS] のいずれかの形式を選択します。

ステップ 5 [レポートの生成] をクリックします。

VM レベルのリソース アカウンティングの詳細のエクスポート

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [チャージバック] の順に選択します。

ステップ 2 [リソースアカウンティングの詳細] タブを選択します。

ステップ 3 ツールバーの右側で、[レポートのエクスポート]アイコンをクリックします。[レポートのエクスポート] ダイアログボックスが表示されます。

ステップ 4 ドロップダウン リストから [PDF]、[CSV]、または [XLS] のいずれかの形式を選択します。

ステップ 5 [レポートの生成] をクリックします。

VM レベルのチャージバックの詳細のエクスポート

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [チャージバック] の順に選択します。

ステップ 2 [チャージバック] タブを選択します。

ステップ 3 ツールバーの右側で、[レポートのエクスポート]アイコンをクリックします。[レポートのエクスポート] ダイアログボックスが表示されます。

ステップ 4 ドロップダウン リストから [PDF]、[CSV]、または [XLS] のいずれかの形式を選択します。

ステップ 5 [レポートの生成] をクリックします。

変更レコードについて

変更管理データベース（CMDB）内の変更レコードを使用して、システムの変更を追跡および管理できます。 通常、これらのレコードは、VM、サービス リクエスト、グループなどのあらゆるリソースに対するイベント タイプ（ADD、DELETE、および MODIFY）を示します。

変更レコードは、リソース タイプ（VM）に関する情報（リソース名、変更タイプ、変更時刻、説明など）を表示します。 VM のサイズ変更の場合、サイズ変更された VM のリソースに関する情報と、サイズ変更前とサイズ変更後のリソースの値に関する情報が示されます。

VM のサイズが変更された場合、変更が記録され、[レコードの変更] タブに表示されます。

変更レコードへのアクセス

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[管理] > [統合] の順に選択します。

ステップ 2 [レコードの変更] タブを選択します。

チャージバックの計算

VM の総コストの計算には次のものが含まれます。

総コスト = アクティブな VM のコストまたは非アクティブな VM のコスト+一括での支払いのコスト+CPU のコスト+メモリ コスト+ディスク コスト+CPU 予約コスト+メモリ予約コスト+CPU 使用コスト+CPU コアのコスト+メモリ使用コスト+受信ネットワーク使用コスト+転送ネットワーク使用コスト+アプリケーション コスト

物理サーバの総コストの計算には次のものが含まれます。

総コスト = 一括での支払いのコスト + CPU コスト + メモリ コスト + メモリ使用コスト + コミット済みディスクコスト + CPU コア コスト + フル ブレード コスト + ハーフ ブレード コスト。

VM のコスト計算は 1 時間単位でのみ実行されます。 各リソースのコストはコスト モデルで定義されている値に基づいて計算されます。 コスト計算は次のコストに基づいています。

コスト	コストの説明
アクティブな VM のコスト	アクティブな VM のコストのコスト モデルで定義されている値。
非アクティブな VM のコスト	非アクティブな VM のコストのコスト モデルで定義されている値。
一括での支払いのコスト	一括での支払いのコストのコスト モデルで定義されている値。
CPU コスト	CPU 使用量（プロビジョニング済み） x プロビジョニング済み CPU コストのコスト モデルで定義されているコスト。 CPU のチャージユニットは GHz です。

コスト	コストの説明
メモリ コスト	メモリ使用量（プロビジョニング済み） x プロビジョニング済みメモリ コストのコスト モデルで定義されているコスト。 メモリのチャージ ユニットは GB です。
ディスク コスト	コミット済みストレージ x コスト モデルで定義されているコミット済みストレージ コスト + コミットされていないストレージ x コスト モデルで定義されているコミットされていないストレージのコスト ストレージのチャージ ユニットは GB です。
CPU 予約コスト	予約済み CPU x 予約済み CPU コストのコスト モデルで定義されているコスト。1
メモリ予約コスト	予約済みメモリ x 予約済みメモリ コストのコスト モデルで定義されているコスト。2
CPU 使用コスト	使用済み CPU x 使用済み CPU コストのコスト モデルで定義されているコスト。1
CPU コア コスト	使用済み CPU コア x CPU コア コストのコスト モデルで定義されているコスト。 CPU のチャージ ユニットはコアです。
メモリ使用コスト	使用済みメモリ x 使用済みメモリ コストのコスト モデルで定義されているコスト。2
受信ネットワーク使用コスト	受信ネットワーク使用率（KB）/（1024.0 x 1024.0） x 受信済みネットワーク データのコストのコスト モデルで定義されているコスト。 ネットワークのチャージユニットは GB です。
転送ネットワーク使用コスト	転送ネットワーク使用率（KB）/（1024.0 x 1024.0） x 転送済みネットワーク データのコストのコスト モデルで定義されているコスト。5
アプリケーション コスト	アクティブな VM 時間 x アクティブな VM アプリケーション コストのカタログで定義されているコスト+非アクティブな VM 時間 x 非アクティブな VM アプリケーション コストのカタログで定義されているコスト。

コスト	コストの説明
完全長ブレードのコスト	1 時間あたりの完全長ブレード サーバのコスト。 このコストは、物理サーバのみに適用されます。 これは、アプリケーション コンテナの一部である物理サーバに対してのみ適用されます。
ハーフ長ブレードのコスト	1 時間あたりのハーフ長ブレード サーバのコスト。 このコストは、物理サーバのみに適用されます。 これは、アプリケーション コンテナの一部である物理サーバに対してのみ適用されます。

第 14 章

システムのモニタリングとレポート作成

この章は、次の内容で構成されています。

- ダッシュボード，263 ページ
- サマリー，265 ページ
- インベントリ管理，266 ページ
- リソース プール，266 ページ
- クラスタ，267 ページ
- イメージ，267 ページ
- ホスト ノード，269 ページ
- 仮想マシン（VM），269 ページ
- トポロジ，270 ページ
- アセスメント，271 ページ
- レポート，271 ページ

ダッシュボード

ダッシュボードは、ログインしたときに表示される最初のウィンドウです。 アプリケーションのすべてのレポート ウィジェットをダッシュボードに追加できます。 ダッシュボード（のトップレベルのメニュー）で、重要なまたはお気に入りのレポート ウィジェットの追加を有効にできます。

ダッシュボードの有効化

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 ウィンドウの右上で、[管理者] をクリックします。
ステップ 2 [ダッシュボード] タブを選択します。
ステップ 3 [ダッシュボードの有効化] チェックボックスをオンにします。
ステップ 4 [適用] をクリックします。

レポート ウィジェットの追加

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。
ステップ 2 左側のパネルから、クラウドの名前を選択します。
ステップ 3 表示するレポート タイプのタブを選択します。
ステップ 4 レポートの右上で下矢印をクリックします。
ステップ 5 [ダッシュボードに追加] を選択します。

ウィジェット データの更新

レポート ウィジェット データの自動更新または手動更新を設定できます。 自動更新の場合、自動更新の間隔を 5 分から最大 60 分までの間でカスタマイズできます。

時間を設定するには、ダッシュボードの [自動更新] ボタンを [オン] に設定する必要があります。

サマリー

[サマリー] ウィンドウでシステム インベントリを管理することができます。 このウィンドウではさまざまな表、図、およびマップ レポートを利用できるほか、インベントリ ライフサイクル活動の管理に役立ちます。

各レポートは、ウィジェットとして表示され、カスタマイズによって非表示にできます。

仮想マシン、クラウド、およびシステムのサマリー情報

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 [サマリー] タブを選択します。

サマリー レポート ウィジェットのカスタマイズ

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 [サマリー] タブを選択します。

ステップ 3 [カスタマイズ] アイコンをクリックして、使用可能なレポート ウィジェットを起動します。

ステップ 4 ウィジェットをクリックし、ダッシュボードにドラッグします。

ステップ 5 レポートをダブルクリックしてビューを拡大するか、またはレポートの右上をクリックして、[ビューの展開] を選択します。

ステップ 6 スライド バーを使用して、[ダッシュボード] に表示されるレポートのサイズを調整します。

インベントリ管理

ダッシュボードを使用して、システム インベントリをモニタできます。 物理インフラストラクチャに対するすべての変更がダッシュボードへ反映されます。 ダッシュボードには、管理運営に対するシステム全体のレベルのインフラストラクチャ情報が表示されます。

システム インベントリの詳細情報へのアクセス

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 左側のパネルから、クラウドの名前を選択します。

ステップ 3 詳細情報を表示するタブを選択します。

リソース プール

[リソースプール] タブにはホスト ノード レベルでのリソースの詳細が表示されます。 これらの詳細には、CPU 設定予約、CPU 制限値、使用済み CPU、使用済みメモリなどが含まれます。

リソースの詳細情報へのアクセス

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 左側のパネルから、クラウドの名前を選択するか、[すべてのクラウド] を選択します。

ステップ 3 [リソースプール] タブを選択します。

クラスタ

[クラスタ] タブには、ポッドのすべてのクラスタとその詳細（存在する場合）が表示されます。

クラスタへのアクセス

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 [クラスタ] タブを選択します。

イメージ

[イメージ] タブには、使用可能なすべてのイメージ ID、およびその詳細が表示されます。 これらのイメージにはゲスト OS、CPU、メモリ、およびプロビジョニングされているストレージが含まれます。 これらのイメージ ID を使用して、新しい仮想マシン（VM）をプロビジョニングできます。 グループ管理者または MSP 管理者の場合は、この [イメージ（Images）] タブにグループに割り当てられているイメージが表示されます。

特定の VMware クラウド アカウントを選択し、[イメージ（Images）] タブを選択すると、イメージをグループまたはユーザに割り当てることができます。 そうすることで、特定のグループまたはユーザに割り当てられたイメージがそのグループの管理者がシステムにログインしたときに表示されます。

イメージへのアクセス

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 [イメージ] タブを選択します。

ユーザまたはグループへの VM イメージの割り当て

管理者として、ユーザまたはグループに特定の VM イメージを割り当てることができます。 これにより、カタログの作成などの VM のプロビジョニング タスクを実行したときに表示されるイメージがフィルタリングされます。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 VMware クラウドを選択し、[イメージ] タブを選択します。

ステップ 3 テーブルからイメージを選択します。

ステップ 4 [グループへのイメージの割り当て（Assign Image to Group）] をクリックします。

ステップ 5 [グループへのイメージの割り当て（Assign Image to Group）] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[ユーザに割り当て（Assign to Users）] チェック ボックス	特定のユーザにイメージに割り当てるには、チェック ボックスをオンにします。
[ユーザ（User）] フィールド	[選択（Select）] をクリックして、イメージを割り当てるユーザの名前を確認します。 このフィールドは、[ユーザに割り当て（Assign to Users）] チェック ボックスがオンになっているときに表示されます。
[グループ名（Group Name）] フィールド	[選択（Select）] をクリックして、イメージを割り当てるグループの名前を確認します。 このフィールドは、[ユーザに割り当て（Assign to Users）] チェック ボックスがオフになっているときに表示されます。

ステップ 6 [送信] をクリックします。

ステップ 7 [OK] をクリックします。

ホスト ノード

[ホストノード] タブには、インフラストラクチャで使用できるすべての物理ホスト ノードが表示されます。 インストールされている ESX/ESXi のバージョン、アクティブな VM、電源ステータスなどの詳細を見ることができます。

ホスト ノードへのアクセス

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 [ホストノード] タブを選択します。

ステップ 3 ツールバーのドロップダウン リストから、[レポート] タイプを選択します。

仮想マシン（VM）

[VM] タブには、選択したクラウドのすべての VM と各 VM の詳細が表示されます。

VM へのアクセス

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 [VM] タブを選択します。

グループ レベル VM へのアクセス

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[組織] > [仮想リソース] を選択します。

ステップ 2 左側のパネルから、グループを選択し、[VM] タブを選択します。

トポロジ

[トポロジ] タブには VMware クラウド トポロジが表示されます。 表示モード タイプには、[階層]、[同心]、[円形]、および [強制の実行] の 4 つがあります。 選択する表示モードによって、項目のスペース設定、距離、半径、厳密性、および強制距離を調整できます。

トポロジ タイプへのアクセス

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 左側のパネルから、クラウドの名前を選択します。

ステップ 3 [トポロジ] タブを選択します。

ステップ 4 トポロジ タイプ（[Hostnode データストア トポロジ]） または [Hostnode VM トポロジ] のいずれか）を選択します。

ステップ 5 ツールバーで [接続の表示] ボタンをクリックします。 トポロジが新しいウィンドウに表示されます。

（注） すべてのトポロジ タイプが表示されるわけではありません。

アセスメント

[アセスメント] タブには、アセスメント レポート（クラウド対応状況、仮想化のベスト プラクティス、パフォーマンス最適化、容量、電源最適化など）が表示されます。

評価へのアクセス

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 左側のパネルから、クラウドの名前を選択します。

ステップ 3 [評価] タブを選択します。

ステップ 4 [レポート] ドロップダウン リストから、レポート タイプを選択します。

レポート

Cisco UCS Director では、さまざまなレポートを表示して、仮想インフラストラクチャおよびシステム リソースをモニタできます。 これらのレポートは、システムの詳細を理解するのに役立ち、システムの実行状況に関する情報を提供します。

以下にレポートのタイプを示します。

- システム情報に関する表形式のレポート。概要、ホスト ノード、新しい VM、および削除された VM が含まれます。
- 棒グラフおよび円グラフによる比較。アクティブな VM と非アクティブな VM、プロビジョニングされた CPU とキャパシティなどの比較が表示されます。
- システム リソースに関するトレンド グラフ。CPU のトレンド、メモリのトレンド、VM の追加および削除などが含まれます。
- その他のレポートには、グループ、VDC、ホスト ノード、および VM レベルの上位 5 つのレポートがあります。 上位 5 つのレポートは、VM の数が最も多いグループ、CPU 使用率が最大のグループ、VM の数が最も多い VDC、CPU 使用率が最大のホスト ノードなどです。
- マップ レポートは、ヒート マップまたは色分けされたマップの形式でシステム リソース情報を表示します。

特定のアカウント（たとえば KVM アカウントなど）について、追加の傾向レポートを利用することもできます。 傾向レポートには、選択した期間内のデータが表示されます。

レポートへのアクセス

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 左側のパネルから、クラウドの名前を選択します。

ステップ 3 レポートのタイプ（[マップ]、[上位 5]、[その他のレポート]）のタブを選択します。

第 15 章

ライフサイクルの管理

この章は、次の内容で構成されています。

- VM の電源設定の管理，273 ページ
- VM のサイズ変更，274 ページ
- VM スナップショットの管理，275 ページ
- 仮想マシンのリース時間の設定，279 ページ
- VM アクションの管理，279 ページ

VM の電源設定の管理

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 クラウドの名前を選択します。

ステップ 3 仮想マシン（VM）アクションを実行するには、[VM] タブを選択し、VM を右クリックします（タイマーが動いている間待ちます）。

ステップ 4 アクションを選択すると、[VMタスク] ダイアログボックスが開きます。 最後の 2 つのフィールドに値を入力します。

名称	説明
[VM名] フィールド（表示専用）	アクションの実行対象である VM の名前。
[電源オフ] フィールド（表示専用）	VM の電源をオフにするタスク。

名称	説明
[電源オン] フィールド（表示専用）	VM の電源をオンにするタスク。
[一時停止] フィールド（表示専用）	VM を一時停止状態にするタスク。
[ゲストのシャットダウン] フィールド（表示専用）	VM でゲスト OS をシャット ダウンするタスク。
[スタンバイ] フィールド（表示専用）	VM をスタンバイ状態にするタスク。 （注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。
[リセット] フィールド（表示専用）	VM のハード リセットを実行するタスク。 （注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。
[リブート] フィールド（表示専用）	VM のソフト リブートを実行するタスク。 （注） RHEV KVM コネクタではサポートされていません。
[コメント] フィールド	コメント。
[アクションのスケジュール設定] オプション ボタン	特定の日時にまたは今すぐ VM の電源をオンにするタスク。

ステップ 5 [続行] をクリックします。

VM のサイズ変更

はじめる前に

プロビジョニング済み VM を作成します。 管理者はグループの vDC で [エンドユーザセルフサービスオプション] を有効にして、許可を与える必要もあります。

手順

ステップ 1 [仮想リソース] をクリックして、[VM] を選択します。

ステップ 2 VM を右クリックして [VMのサイズ変更] を選択します。

ステップ 3 [VMのサイズ変更] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[VM名] フィールド	選択した VM の名前。
[現在の割り当てCPU] フィールド	VM によって使用中の割り当て済み CPU の数。
[現在の割り当てメモリ(GB)] フィールド	VM に割り当てられているメモリ容量。
[新しいCPU数] ドロップダウン リスト	ドロップダウン リストから必要な CPU を選択します。
[新しいメモリ] ドロップダウン リスト	ドロップダウン リストから必要なメモリ容量を選択します。

ステップ 4 [サイズ変更] をクリックします。

VM スナップショットの管理

ここでは、次の作業について説明します。

- スナップショットの作成：すべての VM リソースの現在の状態のスナップショットを作成できます。 スナップショットを作成すると、仮想マシンがクラッシュした際、元の状態に戻すことができます。
- スナップショットへの復帰：VM がクラッシュや誤作動（OS が破損）した場合、VM の最新スナップショットへ復帰することにより、VM を再稼働させることができます。 VM のスナップショットが複数ある場合、特定のスナップショットに戻すことができます。
- ゴールドスナップショットとしてマーク付け：VM の特定のスナップショットをゴールドスナップショットとしてマークできます。 この機能は、そのスナップショットが誤って削除されないよう保護します。
- スナップショットの削除：必要に応じてスナップショットを削除できます。 ゴールドスナップショットを削除する場合は、あらかじめマークを外しておく必要があります。
- すべてのスナップショットの削除：VM のすべてのスナップショットを削除できます。 ただし、ゴールドスナップショットが存在する場合、すべてのスナップショットの削除はできません。 先にゴールド スナップショットのマークを外してから、すべてのスナップショットの削除を実行してください。

VM スナップショットの作成

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 クラウドの名前を選択します。

ステップ 3 [VM] タブを選択します。

ステップ 4 VM を選択し、ツールバーの右側にある下矢印ボタンをクリックします。

ステップ 5 ドロップダウン リストから、[スナップショットの作成] を選択します。

ステップ 6 [仮想マシンのスナップショットの作成] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[スナップショット名] フィールド	スナップショットの名前。
[スナップショットの説明] フィールド	スナップショットの説明。
[スナップショットメモリ] チェックボックス	VMのメモリを組み込む場合にこのチェックボックスをオンにします。
[ゲストのファイルシステムを休止] チェックボックス	休止モードでスナップショットを作成する場合は、このチェックボックスをオンにします。 （注） ファイル システムを休止すると、物理または仮想マシンのディスク上のデータがバックアップに適した状態になります。 このプロセスには、オペレーティング システムのメモリ内キャッシュから、ディスクまたはその他の高レベルのアプリケーション固有のタスクにバッファをフラッシュするなどのアクションが含まれる場合があります。 このオプションを使用するには、VMware ツールを VM にインストールする必要があります。

ステップ 7 [続行] をクリックします。

スナップショットへの復帰

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 クラウドの名前を選択します。

ステップ 3 [VM] タブを選択します。

ステップ 4 VM を選択し、ツールバーの右側にある下矢印ボタンをクリックします。

ステップ 5 ドロップダウン リストから、[スナップショットの復帰] を選択します。

ステップ 6 [スナップショットタスクの復帰] ダイアログボックスで、スナップショット名の隣にあるチェックボックスをオンにしてリストからスナップショットを選択します。

ステップ 7 [続行] をクリックします。

ゴールデン スナップショットのマーキング

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 クラウドの名前を選択します。

ステップ 3 [VM] タブを選択します。

ステップ 4 VM を選択し、ツールバーの右側にある下矢印ボタンをクリックします。

ステップ 5 ドロップダウン リストから、[ゴールデンスナップショットのマーキング] を選択します。

ステップ 6 [ゴールデンスナップショットのマーキング] ダイアログボックスで、リストのスナップショット名の横にあるチェックボックスをオンにして、スナップショットを選択します。

ステップ 7 [ゴールデンスナップショットとしてマーキング] チェックボックスをオンにします。

ステップ 8 [続行] をクリックします。

スナップショットの削除

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。
ステップ 2 クラウド名を選択します。
ステップ 3 [VM] タブを選択します。
ステップ 4 VM を選択し、ツールバーの右側にある下矢印ボタンをクリックします。
ステップ 5 ドロップダウン リストから [スナップショットの削除] を選択します。
ステップ 6 [スナップショットタスクの削除] ダイアログボックスで、スナップショット名の隣にあるチェックボックスをオンにして、リストからスナップショットを選択します。
ステップ 7 [子の削除] チェックボックスをオンにします。
ステップ 8 [続行] をクリックします。

すべてのスナップショットの削除

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。
ステップ 2 クラウド名を選択します。
ステップ 3 [VM] タブを選択します。
ステップ 4 VM を選択し、ツールバーの右側にある下矢印ボタンをクリックします。
ステップ 5 ドロップダウン リストから [すべてのスナップショットの削除] を選択します。
ステップ 6 [VMスナップショットタスク] ダイアログボックスに、任意でコメントを入力します。
ステップ 7 [続行] をクリックします。

仮想マシンのリース時間の設定

ユーザは、選択した仮想マシン（VM）のリース有効時間を設定できます。 リース時間が期限切れになると、VM はシャットダウン（電源オフ）されます。 リース時間の終了については、カレンダーで選択するため制限はありません。

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 クラウドの名前を選択します。

ステップ 3 [VM] タブを選択します。

ステップ 4 VM を選択します。

ステップ 5 ツールバーで、[リース時間の設定] ボタンをクリックします。

ステップ 6 [リース時間の設定] ダイアログボックスで、[リース時間の設定] チェックボックスをオンにします。 次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[VM名] フィールド	VM の名前。 このフィールドは編集できません。
[リース日時] のカレンダー、ドロップダウン リスト、オプション ボタン	VM のリースの日時。 日付のカレンダー、時刻（時間および分）のドロップダウン リスト、AM と PM のオプション ボタンがあります。

ステップ 7 [送信] をクリックします。

VM アクションの管理

VM のその他のアクション メニューは、VM を右クリックすることで、短縮形のメニューが表示され、また、VM を選択してからツールバーの右側の下矢印をクリックすることで、フル メニューが表示されます。

他の VM アクションには次のものがあります。

- VM の詳細を表示：個別の VM にアクセスして、サマリー レポート、vNIC、ディスク、スナップショットなどの詳細を表示できます。

- スタック ビュー：OS、ハイパーバイザ、インフラストラクチャ情報など、特定の VM についてさまざまな情報を参照できます。
- VM の削除：リストから VM を削除できます。 電源がオフになっている VM のみ削除できます。
- VM ディスクの作成：カスタム サイズの追加ディスクを VM に追加できます。
- VM ディスクの削除：ディスクを削除できます。
- vNIC の追加：VM に複数の vNIC を追加できます。 また、VM 内で vNIC を追加、または交換するオプションもあります。 vNIC のオプションは、VM に関連付けられた VDC にマップされているネットワーク ポリシーによって異なります。
- VM クライアントの起動：Web アクセス、リモート デスクトップ、または VNC コンソールのいずれかのプリファレンスを VM へ設定できます。
- VM の割り当て：VM をグループまたは VDC に割り当てたり、VM のカテゴリを変更したりできます。 VM のプロビジョニング時間、終了時間、およびラベルを設定できます。
- VM クレデンシャルにアクセス：VM のログイン クレデンシャルが Web またはリモートのデスクトップ アクセスに対して設定されており、管理者が、その VM がプロビジョニングされているカタログ内の権限を提供している場合のみ、VM のログイン クレデンシャルにアクセスできます。
- VM のインベントリ収集のリクエスト：1 つの VM を選択し、その VM に対してオンデマンドのインベントリ収集をリクエストできます。
- VNC のテスト：トラブルシューティングの目的のために、VNC の接続をテストします。
- 複製：同じ、または類似のクオリティを持つ新しい VM を作成するために、既存の VM を複製したり、コピーを作成したりできます。
- VM を VDC に移動：VM を VDC に移動して、VDC システム ポリシー規則が VM 内で適用されるようにすることができます。
- VM 再同期：VM を Cisco UCS Director と定期的に再同期させる時間（分）を設定することができます。

VM の詳細の表示

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。
ステップ 2 クラウドの名前を選択します。
ステップ 3 [VM] タブを選択します。
ステップ 4 リストから VM を選択します。
ステップ 5 ツールバーで、[詳細の表示] ボタンをクリックします。

スタック ビューの使用方法

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。
ステップ 2 クラウド名を選択します。
ステップ 3 [VM] タブを選択します。
ステップ 4 ツールバーで、[スタックビュー] ボタンをクリックします。

VM の削除

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。
ステップ 2 クラウド名を選択します。
ステップ 3 [VM] タブを選択します。
ステップ 4 VM を選択し、ツールバーの右側にある下矢印ボタンをクリックします。
ステップ 5 ドロップダウン リストから、[VMの削除] を選択します。

ステップ 6 [VMタスク]ダイアログボックスに必要に応じてコメントを入力し、すぐもしくは、あとで実行する操作をスケジュールします。

（注） [あとで実行] を選択した場合は、時間を指定します。

ステップ 7 [続行] をクリックします。

VM ディスクの作成

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 クラウドの名前を選択します。

ステップ 3 [VM] タブを選択します。

ステップ 4 VM を選択し、ツールバーの右側にある下矢印ボタンをクリックします。

ステップ 5 ドロップダウン リストから、[VMディスクの作成] を選択します。

ステップ 6 [VMディスクの作成] ダイアログ ボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[VM名] フィールド	VM の名前。 この名前は編集できません。
[新しいディスクサイズ(GB)] フィールド	VM のディスク サイズ（GB 単位）。
[ディスク タイプの選択] ドロップダウン リスト	ディスク ラベルを選択します。
[データストアの選択] ドロップダウン リスト	データストアを選択します。 （注） 選択できるデータストアは、VM（VM の VDC）に関連付けられたストレージ ポリシーによって異なります。

名称	説明
[Thinプロビジョニング] チェックボックス	VMにシンプロビジョニングされたディスクを追加する場合に、このチェックボックスをオンにします。 （注） シン プロビジョニングは、物理ストレージ容量の動的割り当てをイネーブルにし、VMストレージの使用率が向上します。

ステップ 7 [作成] をクリックします。

VM ディスクの削除

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 クラウド名を選択します。

ステップ 3 [VM] タブを選択します。

ステップ 4 VM を選択し、ツールバーの右側にある下矢印ボタンをクリックします。

ステップ 5 ドロップダウン リストから、[VMディスクの削除] を選択します。

ステップ 6 [VMディスクの削除] ダイアログボックスで、ドロップダウン リストからディスク名を選択します。

ステップ 7 [削除] をクリックします。

vNIC の追加

（注） vNIC VM を追加するときには、[ポートグループ名] と [アダプタのタイプ] の値のみが変更されます。 VM の IP アドレスは、選択されたポート グループで DHCP が有効な場合にのみ変更されます。 ただし、IP アドレスがスタティック プール ポリシーから供給されている場合は変更されません。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 クラウドの名前を選択します。

ステップ 3 [VM] タブを選択します。

ステップ 4 VM を選択し、ツールバーの右側にある下矢印ボタンをクリックします。

ステップ 5 ドロップダウン リストから、[vNICの追加] を選択します。

ステップ 6 [VM vNICの追加] ウィンドウの [操作] ドロップダウン リストから [追加] を選択します。
ネットワーク ポリシーに設定されたvNICの追加制限を超える場合、この操作は許可されません。

ステップ 7 [追加]（+）をクリックします。

ステップ 8 [VMネットワークへのエントリの追加] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[NICエイリアス] ドロップダウン リスト	リストから NIC エイリアスを選択します。
[ポートグループタイプ] ドロップダウン リスト（表示専用）	リストからポート グループを選択します。
[ポートグループ名] ドロップダウン リスト	リストからポート グループ名を選択します。
[アダプタのタイプ]表示専用ドロップダウン リスト	アダプタ タイプを選択します。 この項目が選択可能であるのは、ネットワーク ポリシーでこの NIC エイリアスに対して [テンプレートからのアダプタのタイプのコピー] が選択されていない場合に限られます。
[DHCP] チェックボックス	オンにすると、IP は DHCP を使用して割り当てられます。 このフィールドは編集できません。
[静的IPプール] フィールド	固定 IP アドレス プール。

名前	説明
[ネットワークマスク] フィールド	ネットワーク マスク。
[ゲートウェイIPアドレス] フィールド	ゲートウェイ IP アドレス。

（注） [NICエイリアス]、[ポートグループ名]、[アダプタのタイプ]、[DHCP]、および [静的IPプール] の各選択項目は、VM（VM の VDC）に関連付けられたネットワーク ポリシーの設定によって異なります。 複数の NIC ネットワーク ポリシーの詳細については、ポリシーの管理, （141 ページ）を参照してください。

このアクションを実行するために VM の電源がオフになります。 アクションが完了すると、VM の電源がオンになります。

ステップ 9 [送信] をクリックします。

vNIC の置換

（注） vNIC VM を置き換えると、[ポートグループ名] および [アダプタのタイプ] の値のみが変更されます。 VM の IP アドレスは、選択されたポート グループで DHCP が有効な場合にのみ変更されます。 ただし、IP アドレスがスタティック プール ポリシーから供給されている場合は変更されません。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 クラウドの名前を選択します。

ステップ 3 [VM] タブを選択します。

ステップ 4 VM を選択し、ツールバーの右側にある下矢印ボタンをクリックします。

ステップ 5 ドロップダウン リストから、[vNICの追加] を選択します。

ステップ 6 [VM vNICの追加] ウィンドウで、[操作] ドロップダウン リストから [置換] を選択します。
ネットワーク ポリシーに設定された vNIC の追加制限を超える場合、この操作は許可されません。

ステップ 7 vNIC を選択します。

ステップ 8 [vNICの追加] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[NICエイリアス] ドロップダウン リスト	NIC エイリアスを選択します。 ネットワーク ポリシーに設定された vNIC のみが表示されます。
[ポートグループ名] ドロップダウン リスト	リストからポート グループ名を選択します。
[アダプタのタイプ]表示専用ドロップダウン リスト	アダプタ タイプを選択します。 これを選択できるのは、ネットワーク ポリシーで [テンプレートからのアダプタのタイプのコピー] が選択されていない NIC エイリアスを選択した場合のみです。
[DHCP] チェックボックス	DHCP を使用して割り当てられた IP が必要な場合は、このチェックボックスをオンにします。
[静的IPプール] フィールド	固定 IP アドレス プール。
[ネットワークマスク] フィールド	ネットワーク マスク。
[ゲートウェイIPアドレス] フィールド	ゲートウェイ IP アドレス。

ステップ 9 [送信] をクリックします。

（注） このアクションを実行するために VM の電源がオフになります。 アクションが完了すると、VM の電源が投入されます。 [置換] 操作は、VM から既存の vNIC をすべて削除し、追加された vNIC に置き換えます。 ネットワーク ポリシーに設定された vNIC の追加制限を超える場合、この操作は許可されません。

[NICエイリアス]、[ポートグループ名]、[アダプタのタイプ]、[DHCP]、および [静的IPプール] の選択は、VM（VM VDC）に関連付けられたネットワーク ポリシーの設定によって異なります。 複数の NIC ネットワーク ポリシーの詳細については、ポリシーの管理, （141 ページ）を参照してください。

vNIC の削除

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 クラウドの名前を選択します。

ステップ 3 [VM] タブを選択します。

ステップ 4 VM を選択し、ツールバーの右側にある下矢印ボタンをクリックします。

ステップ 5 ドロップダウン リストから、[vNICの削除] を選択します。

ステップ 6 [VM vNICの削除] ダイアログボックスの [選択] ボタンをクリックします。

ステップ 7 [項目の選択] ダイアログボックスで、削除する vNIC の隣にあるチェックボックスをオンにします。
[すべてオン] を選択すると、すべての vNIC を削除できます。

ステップ 8 [選択] をクリックします。

ステップ 9 [削除] をクリックします。

VM クライアントの起動

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 クラウドの名前を選択します。

ステップ 3 [VM] タブを選択します。

ステップ 4 リストから VM を選択します。

ステップ 5 ツールバーで、[VMクライアントの起動] を選択します。

ステップ 6 [VMクライアントの起動] ダイアログボックスで、VM クライアントのアクセス方式を選択します。
[リモートデスクトップ]、[Web アクセス]、または [VNC コンソール] を選択できます。

（注） VNC コンソールは、VM にアクセスできる Ajax ベースのコンソールです。 コンソール ウィンドウは、あらゆるスタンドアロン Web ブラウザを使用して起動できます。 専用のブラウザプラグインを必要とせず、包括的な VM コントロール機能を備えています。

ステップ 7 [続行] をクリックします。

VM の VNC コンソールの有効化

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 クラウド名を選択します。

ステップ 3 [VM] タブを選択します。

ステップ 4 VM を選択し、ツールバーの右側にある下矢印ボタンをクリックします。

ステップ 5 ドロップダウン リストから、[VNCの設定] を選択します。

ステップ 6 [送信] をクリックします。

ステップ 7 [OK] をクリックします。
要求が送信されると、Cisco UCS Director は VM への VNC コンソール アクセスを自動的に設定します。

VM の VNC コンソール ウィンドウへのアクセス

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 クラウドの名前を選択します。

ステップ 3 [VM] タブを選択します。

ステップ 4 リストから VM を選択します。

ステップ 5 ツールバーで、[VMクライアントの起動] を選択します。

ステップ 6 [クライアントの起動] ダイアログ ボックスで、アクセス スキーマとして [VNCコンソール] を選択します。

ステップ 7 [続行] をクリックします。

（注） ESX/ESXi サーバの VNC ポート（5900 ～ 5964）は、VM VNC のコンソール アクセス用ハイパーバイザで開く必要があります。

（注） Cisco UCS Director は VM に VNC コンソールの自動設定を提供します。 設定するには、ハイパーバイザの必須ポートを開く必要があります。

（注） ESX 4.X および ESXi 5.0 のハイパーバイザは VNC コンソール アクセスの設定をサポートしています。

VM の割り当て

ユーザ グループにはリソースまたは VM を割り当てることができます。 リソースまたは VM が VMWare クラウドにある場合は、それを Cisco UCS Director 内の特定のエンド ユーザに割り当てることもできます。

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 クラウドの名前を選択します。

ステップ 3 [VM] タブをクリックします。

ステップ 4 リストから VM を選択します。

ステップ 5 ツールバーで、[VMの割り当て] ボタンをクリックします。

ステップ 6 [VM の割り当て] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[VM名] フィールド	VM の名前。
[VM所有者（VM Ownership）] セクション	
[顧客組織（Customer Organizations）] オプション ボタン	VM を特定のグループに割り当てるには、このオプション ボタンをオンにします。
[顧客組織（Cutomer Organizations）] フィールド	[選択（Select）] をクリックして、VM を割り当てる特定のユーザ グループを選択します。 このフィールドが表示されるのは、[顧客組織（Customer Organizations）] オプション ボタンをオンにした場合のみです。 （注） 有効な vDC があるグループだけが表示されます。
[ユーザ] ラジオ ボタン	VM を特定のユーザに割り当てるには、このオプション ボタンをオンにします。

名称	説明
[ユーザ（User）] フィールド	[選択（Select）] をクリックして、VM を割り当てるユーザを選択します。 このリストには、ユーザへのリソース割り当てを許可するグループからのユーザが表示されます。 ユーザへのリソース割り当てを許可するグループに属するユーザだけが表示されます。
[VMアクセス共有（VM Access Sharing）] セクション	
[アクセス権限のあるユーザ（Users with Access Privilege）] フィールド	[選択（Select）] をクリックして、VM 情報へのアクセスのみを許可するユーザを選択します。 選択したユーザには、VM へのアクセスのみが許可されます。 管理操作を実行することはできません。 このオプションを使用できるのは、[ユーザ（User）] オプション ボタンをオンにして、この VM に特定のユーザを選択した場合のみです。
[管理権限のあるユーザ（Users with Manage Privilege）] フィールド	[選択（Select）] をクリックして、VM の管理のみを許可するユーザを選択します。 選択したユーザは、VM の管理タスクを実行できます。 このオプションを使用できるのは、[ユーザ（User）] オプション ボタンをオンにして、この VM に特定のユーザを選択した場合のみです。
[割り当ての一般情報（General Assignment Information）] セクション	
[VDC] ドロップダウン リスト	VDC を選択します。
[カテゴリ] ドロップダウン リスト	VM のカテゴリを選択します。
[VM ユーザ ラベル] フィールド	VM ラベル（必要な場合）。
[プロビジョニング時間の設定] チェックボックス	VM のプロビジョニング時間を設定するには、このチェックボックスをオンにします。

名称	説明
[プロビジョニング日時] カレンダー、ドロップダウン リスト、オプション ボタン	VM プロビジョニングを実行する日時。 日付のカレンダー、時刻（時間および分）のドロップダウン リスト、AM と PM のオプション ボタンがあります。 このオプションは、[プロビジョニング時間の設定] をオンにした場合に表示されます。
[コメント] フィールド	必要に応じて、コメントを入力します。

ステップ 7 [割り当て] をクリックします。

ステップ 8 [OK] をクリックします。

VM クレデンシャル

VM に対する Web またはリモート アクセスのログイン クレデンシャルは、管理者が VM がプロビジョニングされるカタログに必要な権限を提供した場合にだけ表示されます。

VM クレデンシャルの表示

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 クラウドの名前を選択します。

ステップ 3 [VM] タブを選択します。

ステップ 4 リストから VM を選択します。

ステップ 5 ツールバーで、[VMクレデンシャルにアクセス] ボタンをクリックします。

VM のインベントリ収集のリクエストの使用方法

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 クラウド名を選択します。

ステップ 3 [VM] タブを選択します。

ステップ 4 VM を選択し、ツールバーの右側にある下矢印ボタンをクリックします。

ステップ 5 ドロップダウン リストから、[インベントリ収集] を選択します。

ステップ 6 [送信] をクリックします。

VNC 接続のテスト

VNC 接続のテストは、トラブルシューティングのために使用します。 VNC 接続のテストが成功すると、ホスト ノードの IP アドレスと VNC ポート番号が表示されます。 例：「`VNC connectivity intact at 172.29.110.75:5921`（`VNC は 172.29.110.75:5921 で接続されています`）」。

ただし、接続が失敗すると、エラーメッセージが表示されます。 例：「`VM is not configured for VNC yet.`（`VM がまだ VNC に設定されていません`）」。

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 クラウドの名前を選択します。

ステップ 3 [VM] タブを選択します。

ステップ 4 VM を選択し、ツールバーの右側にある下矢印ボタンをクリックします。

ステップ 5 ドロップダウン リストから、[VNCのテスト] を選択します。

ステップ 6 [VNC接続のテスト] ダイアログ ボックスで、[送信] をクリックします。

ステップ 7 結果を使用して、VNC 接続をトラブルシューティングします。

（注） 接続に失敗した場合は、VM の IP アドレスに VNC ポートが割り当てられていません。詳細については、VM の VNC コンソールの有効化, （288 ページ）を参照してください。

VM の複製

VM の複製は、類似する性質を持つ新しい VM を作成する目的で既存の VM をコピーする操作と同じです。 複製では、新しい VM に必要な調整を行い、かつ複製元の VM の必要なパラメータを維持することで、時間を節約できます。 複製に指定される新しい名前は、システム ポリシーで定義されます。

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 クラウドの名前を選択します。

ステップ 3 [VM] タブを選択します。

ステップ 4 VM を選択し、ツールバーの右側にある下矢印ボタンをクリックします。

ステップ 5 ドロップダウン リストから [複製] を選択します。

ステップ 6 [VMの複製] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[グループの選択] ドロップダウン リスト	複製する定義済みのグループを選択します。 デフォルトでは[デフォルトグループ] が選択されています。
[ユーザに割り当て] チェックボックス	特定のユーザにVMを割り当てる場合は、このチェックボックスをオンにします。 このオプションは、選択したユーザ グループに適用されるグループ共有ポリシーについて、エンドユーザに対するリソースの割り当てが有効である場合のみ表示されます。 グループ共有ポリシーの作成の詳細については、グループ共有ポリシーの作成, （147 ページ）を参照してください。
[ユーザ] ドロップダウン リスト	このVMを割り当てる必要があるユーザを選択します。 （注） 現在、特定のエンド ユーザに割り当てることができるのは、VMWare クラウド内の VM だけです。

名称	説明
[リンクされた複製の使用] チェックボックス	リンクされた複製からVMを複製するには、このチェックボックスをオンにします。 （注） リンクされた複製とは、親VMと仮想ディスクを共有する仮想マシンのコピーです。 リンクされた複製は、親VMのスナップショットから作成されます。 リンクされた複製は親 VM にアクセスできる必要があります。 親VMにアクセスできない場合、リンクされた複製は無効化されます。
[スナップショット タイプ] ドロップダウン リスト	リンクされた複製に関連付けられているスナップショットを選択します。 次のいずれかを選択できます。 • [既存のスナップショット] • [新しいスナップショット]
[既存のスナップショットの選択] フィールド	[選択] をクリックして、既存のスナップショットのリストを表示します。 スナップショットをリストから選択し、[選択] をクリックします。 （注） このフィールドは、[既存のスナップショット] を選択した場合にだけ表示されます。
[スナップショット名] フィールド	スナップショットの名前を指定します。 （注） このフィールドは、[新しいスナップショット] を選択した場合にだけ表示されます。

ステップ 7 [次へ] をクリックします。

ステップ 8 [カスタマイズ オプション] ペインで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[カテゴリ] ドロップダウン リスト	必要な VM カテゴリを選択します。

名称	説明
[クレデンシャルオプション] ドロップダウン リスト	ユーザに対し、VM アクセス クレデンシャル（共有）の取得を許可するか、または禁止するかを選択します。 管理者が Cisco UCS Director 外部の別のユーザにクレデンシャルをプライベートに送信する場合は、[共有しないでください] オプションを選択します。
[単一データストアのすべてのディスクをプロビジョニングします] チェックボックス	以前に設定した単一データストアに含まれているすべてのVMディスクをプロビジョニングするには、このチェックボックスをオンにします。
[ユーザID] フィールド	ユーザ ID。 このオプションは、[クレデンシャルオプション] の下でいずれかの共有オプションを選択した場合に表示されます。
[パスワード] フィールド	ユーザのパスワード。 このオプションは、[クレデンシャルオプション] の下でいずれかの共有オプションを選択した場合に表示されます。
[自動ゲストカスタマイズ] チェックボックス	[有効化] チェックボックスがオンになっています。
[プロビジョニング後のカスタムアクション] チェックボックス	ワークフローを付加するには、[有効化] をクリックします。[ワークフロー] ドロップダウンリストに、選択できるワークフローのリストが表示されます。プロビジョニングの開始時に、選択されたワークフローが開始します。
[VMアプリケーションの請求間隔] ドロップダウン リスト	[毎時間] または [毎月] を選択します。
[アクティブなVMアプリケーションのコスト] フィールド	テンプレートに含まれているアプリケーションのコスト。
[非アクティブなVMアプリケーションのコスト] フィールド	時間あたりまたは月あたりの非アクティブ状態の VM のこのカタログにかかるコスト。

ステップ 9 [次へ] をクリックします。

ステップ 10 [導入設定] ペインで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[VDCの選択] ドロップダウン リスト	VM に設定するポリシーを含む VDC を選択します。
[コメント] フィールド	任意で、VDC の説明を入力します。
[プロビジョニング] ドロップダウン リスト	VDC を今すぐプロビジョニングするには [今すぐ] を選択し、VDC を後でプロビジョニングするには [あとで] を選択します。 [あとで] を選択すると、日付と時刻を指定するためのフィールドが表示されます。
[リース時間] チェックボックス	リースの有効期間を設定するには、このチェックボックスをオンにします。
[日数] フィールド	リース期間の日数を指定します。 （注） このフィールドは、[リース時間] チェックボックスをオンにした場合にだけ表示されます。
[時間] フィールド	リース期間の時間数を指定します。 （注） このフィールドは、[リース時間] チェックボックスをオンにした場合にだけ表示されます。

ステップ 11 [次へ] をクリックします。

ステップ 12 [カスタム仕様] ペインで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[CPUコア] ドロップダウン リスト	プロビジョニングする VM の CPU コアを選択します。
[メモリ] ドロップダウン リスト	プロビジョニングする VM のメモリ容量を選択します。

ステップ 13 [次へ] をクリックします。

ステップ 14 [データストアの選択] ペインで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
[VMディスク] 鉛筆アイコン	ディスクにデータストアを割り当てるには、[VMディスク] 鉛筆アイコンをクリックします（ディスクが使用可能な場合）。

ステップ 15 [VM ディスク エントリの編集] ペインで、次のフィールドに値を入力します。

名称	説明
ディスク名	データストアが割り当てられているVMディスクの名前。
[ディスクの種類]	VMディスクの種類を選択します。 例：システム。
[選択したデータストア]	このVMディスクに割り当てるデータストアを選択します。 表示されるデータストア選択項目は、VDC に付加されているデータ ストレージ ポリシーから取り込まれます。

ステップ 16 [送信] をクリックします。

ステップ 17 [次へ] をクリックします。

ステップ 18 [VM ネットワークの選択] パネルで、次のフィールドから選択します。

名称	説明
[VMディスク] 鉛筆アイコン	VM ネットワークを編集するには、このアイコンをクリックします。

（注） ネットワーク ポリシーの [エンドユーザにオプションのNICの選択を許可] チェックボックスがオフの場合、[VM ネットワークの選択] パネルは空です。

ステップ 19 [選択] ダイアログボックスで、VM に関連付けるクラウドを選択します。

ステップ 20 [送信] をクリックします。

ステップ 21 [サマリー] パネルで複製 VM の情報を確認します。

ステップ 22 [送信] をクリックします。
複製 VM の新しい名前は、VDC のポリシーから取得されます。

VM の VDC への移動

VM を VDC に移動すると、VDC システム ポリシーのルールが VM で採用されます。 既存の VM は、VDC に移動されたものに置き換えられます。

（注） 古い VM は削除されます。 新しい VM 名が、システム ポリシーに従って割り当てられます。

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 クラウドの名前を選択します。

ステップ 3 [VM] タブを選択します。

ステップ 4 VM を選択し、ツールバーの右側にある下矢印ボタンをクリックします。

ステップ 5 ドロップダウン リストから、[VMをVDCに移動] を選択します。

ステップ 6 [VMをVDCに移動] ダイアログ ボックスでは、VDC を複製するときと同じ方法で、移動する VM を変更できます。 詳細については、VM の複製, （293 ページ）を参照してください。

VM の再同期

はじめる前に

このタスクを完了するには、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[仮想] > [コンピューティング] の順に選択します。

ステップ 2 クラウドの名前を選択します。

ステップ 3 [VM] タブを選択します。

ステップ 4 VM を選択し、ツールバーの右側にある下矢印ボタンをクリックします。

ステップ 5 ドロップダウン リストから [再同期VM] を選択します。

ステップ 6 [再同期VM] ダイアログ ボックスの [最大待機時間] ドロップダウン リストで、0 ～ 30 の分単位の数値を選択します。

ステップ 7 [送信] をクリックします。

第 16 章

CloudSense 分析の管理

この章は、次の内容で構成されています。

- CloudSense Analytics について，301 ページ
- レポートの生成，302 ページ
- アセスメントの生成，303 ページ

CloudSense Analytics について

Cisco UCS Director の CloudSense Analytics は、インフラストラクチャ リソースの使用率、IT インフラストラクチャ スタック全体にわたる重要なパフォーマンスメトリック、およびリアルタイムのキャパシティを可視化します。 CloudSense は、仮想インフラストラクチャおよびクラウドインフラストラクチャのキャパシティのトレンド、予測、レポート、プランニングの性能を大きく改善します。

CloudSense を使用して次のレポートを生成できます。

- 顧客の課金レポート
- EMC のストレージ インベントリ レポート
- NetApp のストレージ インベントリ レポート
- グループごとの NetApp ストレージ節約量
- NetApp ストレージ節約量レポート
- ネットワークのインパクト アセスメント レポート
- 仮想コンピューティング インフラストラクチャの組織使用状況
- PNSC アカウントの要約レポート
- グループの物理インフラストラクチャのインベントリ レポート
- ストレージの重複除外状況レポート

- グループのストレージ インベントリ レポート
- シン プロビジョニングされた領域レポート
- UCS データセンターのインベントリ レポート
- グループごとの VM アクティビティ レポート
- VMware ホストのパフォーマンス サマリー
- 仮想インフラストラクチャおよびアセット レポート

（注） これは、システムで使用可能なレポートの完全なリストです。 しかし、ユーザのシステムで利用可能なレポート数はユーザ ロールによって異なります。 デフォルトでは、[CloudSense] オプションは MSP 管理者に表示されません。 システム管理者は MSP 管理者に対してこのオプションを有効にする必要があります。 こうすることで、MSP 管理者がログインしたときに、顧客組織に関連するレポートのみが表示されます。

レポートの生成

はじめる前に

このタスクを実行する前に、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[CloudSense] > [レポート] を選択します。

ステップ 2 左側のパネルからレポートを選択します。

ステップ 3 [レポートの生成] をクリックします。

ステップ 4 [レポートの作成（Generate Report）] ダイアログボックスで、次のフィールドに値を入力します。

名前	説明
[コンテキスト（Context）] ドロップダウンリスト	レポートを生成するグループを選択します。 （注） 管理者の場合は、管理者権限があるすべてのグループがこのドロップダウンリストに表示されます。 たとえば、MSP 管理者の場合は、このドロップダウンリストには管理対象のすべての顧客グループが表示されます。 このリストには、他のグループは表示されません。

名前	説明
[レポートラベル（Report Label）] フィールド	生成する他のレポートと区別するために、レポートにラベルを付けることができます。

ステップ 5 [送信（Submit）] をクリックします。
レポートはシステムで生成されます。 この生成されたレポートには、あなたと管理対象のグループのユーザのみがアクセスできます。 たとえば、MSP管理者の場合、この生成されたレポートは他の MSP 管理者やグループには表示されません。

アセスメントの生成

はじめる前に

このタスクを実行する前に、アプライアンスにログインする必要があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[CloudSense] > [アセスメント] の順に選択します。

ステップ 2 [仮想インフラストラクチャ アセスメント レポート] をクリックします。

ステップ 3 [レポートの生成] をクリックします。
このステップにより、新しいインスタント レポートが HTML 形式または PDF 形式で生成されます。

付 録 A

付録

この章の内容は、次のとおりです。

- ESX サーバでの VNC コンソールの設定，305 ページ

ESX サーバでの VNC コンソールの設定

はじめる前に

VM の VNC コンソールにアクセスするには、ハイパーバイザで ESX/ESXi サーバの VNC ポート（5900 ～ 5964）を開きます。 Cisco UCS Director では、VM の VNC コンソールを自動的に設定できます。

（注） 現在、VNC コンソールのアクセス設定では、ESX 4.X および ESXi 5.0 バージョンを搭載したハイパーバイザがサポートされています。

手順

ステップ 1 ESXi5.x ホストにログインします。

ステップ 2 シェルを使用して次のコマンドを実行し、ファイアウォールの設定を無効化します。
 # cat /etc/vmware/firewall/vnc.xml

ステップ 3 XML 設定をコピーして vnc.xml ファイルに貼り付けます。

```
  <!-- Firewall configuration information for VNC -->
<ConfigRoot>
  <service>
   <id>VNC</id>
    <rule id='0000'>
    <direction>inbound</direction>
     <protocol>tcp</protocol>
     <porttype>dst</porttype>
```

```
     <port>
     <begin>5901</begin>
     <end>6000</end>
     </port>
    </rule>
    <rule id='0001'>
     <direction>outbound</direction>
     <protocol>tcp</protocol>
     <porttype>dst</porttype>
     <port>
      <begin>0</begin>
      <end>65535</end>
     </port>
    </rule>
    <enabled>true</enabled>
    <required>false</required>
  </service>
</ConfigRoot>
```

ステップ 4 ファイアウォール ルールを更新し、新しい設定が正確にロードされたことを確認します。

```
~ # esxcli network firewall refresh
~ # esxcli network firewall ruleset list | grep VNC
VNC   true #****************************************
```